第２章

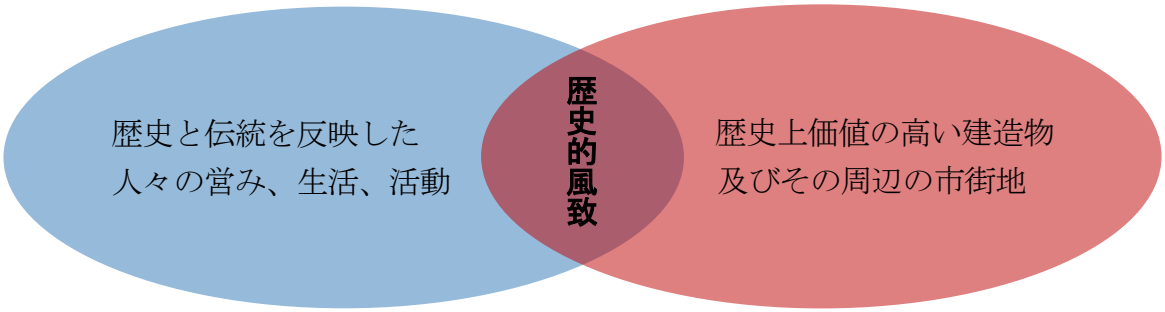
小樽市の維持及び向上すべき歴史的風致

１．小樽市における歴史的風致の考え方

歴史的風致とは、「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」（歴史まちづくり法第１条）とされている。そのため、歴史的風致の前提条件は、下記①～③を全て備えていることである。

① 地域固有の歴史や文化を反映した活動が、現在も行われていること
② ①の活動が歴史的価値の高い建造物及びその周辺の市街地で行われていること
③ ①の活動と②の建築物が一体となって良好な市街地の環境を形成していること

一体となって形成された良好な市街地の環境



「歴史的風致」の概念図

本市は、自然の恵みと物流拠点としての発展を通じ、北海道の経済と文化の中心を担い、独自の歴史を歩んできた。日本海に面した自然豊かな環境の中で古くから水産資源の利用が盛んに行われ、18 世紀以降、漁業は地域の主要な産業となった。特にニシン漁は地域の繁栄を支える重要な産業であり、その歴史は、現在も続く漁業の営みとともに、番屋や石蔵などの建造物が残る地域に受け継がれている。

明治２年（1869）以降、小樽は日本海を横断する北前船の寄港地として重要な役割を果たし、北前船によって本州へニシン〆粕などの海産物が運ばれ、本州からは、米、味噌、醤油などの食料品や衣類などの生活物資がもたらされた。小樽の港がこの交易の拠点であったことから、小樽の経済は活性化し、都市基盤の整備も進められた。また、明治 15 年（1882）に開通した官営幌内（ほろない）鉄道によって幌内（現三笠（みかさ）市）で採掘された石炭が小樽港へ運ばれ、石炭の積み出し港となった小樽は、物流の中心地としての地位を確立し、大正期には北日本随一の経済都市と称されるようになる。

20 世紀初頭にかけて、小樽は物流と金融の拠点として北海道経済の中枢を担うが、昭和中期以降、太平洋航路の増大や道内経済の札幌への集中に伴い、次第にその役割が縮

小した。高度経済成長期に入ると、港湾施設としての役割を終えた運河を埋め立てて道路を拡幅する計画が進められるが、市民から運河の保存を訴える運動が起こる。この運河保存運動は全国的な注目を集め、約 10 年におよぶ論争の末、最終的には運河の一部が保存され、歴史的景観に配慮した環境整備が行われた。運河保存運動は、市民がまちの歴史と景観に新たな価値を見出し、自ら立ち上がったまちなみ保存の運動であるが、この運動の原動力となった市民の郷土愛や協働の精神は、その後のまちづくりや観光振興の礎となっている。

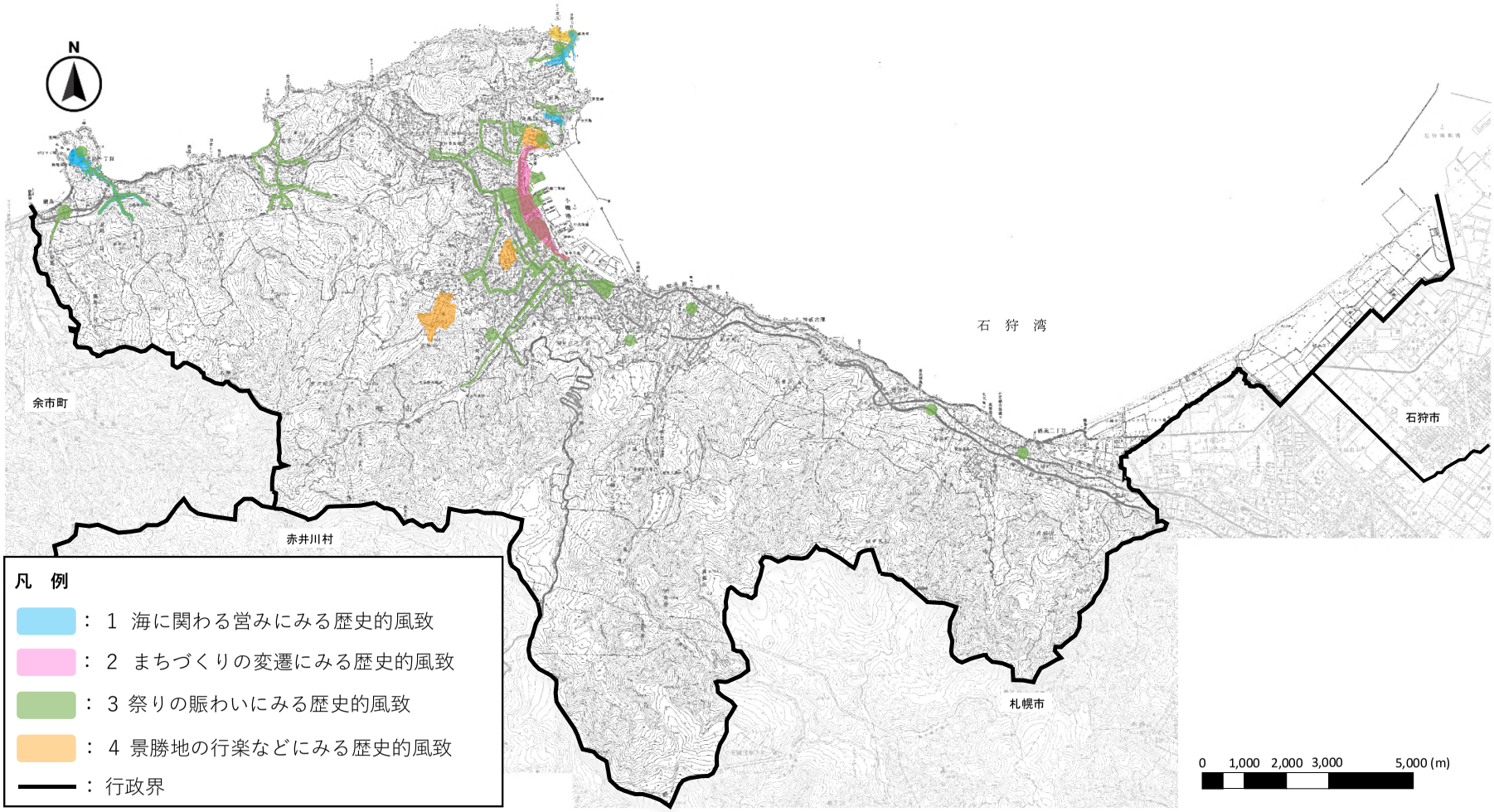
運河保存運動を契機とし、本市は観光都市へと舵を切り、港町の歴史的景観を形成する倉庫や銀行などの歴史的建造物の利活用が活発になるとともに、運河周辺や旧国鉄手宮線の施設整備なども行われ、国内外の人々を引きつける都市へと生まれ変わることとなった。これらは行政だけでなく、地域住民や企業、市民団体が積極的に参画するまちづくり活動や協働の取組によって支えられてきたものであり、このような取組が現在も数多く行われていることは運河保存運動を経験した本市ならではの特徴といえる。

さらに、初夏から初秋にかけて市内各地で開催される祭りにおいては、歴史や伝統を継承しながら、訪れる人々を迎え、賑わいを生み出している。また、市内の景勝地では、市民や観光客が眺望や四季折々の美しい自然景観などを楽しんでいる。こうした祭りや行楽・観光に関わる文化についても本市の歴史ある営みであり、地域の魅力を高める役割を果たしている。

今日の小樽では、市民をはじめ、訪れる人々に対して、かつての繁栄の歴史や面影を伝えるとともに、地域の魅力を未来へ継承するため、市民と行政が協力し、歴史を生かしたまちづくりを進めている。このような歴史的背景や様々な取組を踏まえ、以下の４つの歴史的風致を設定した。

1　海に関わる営みにみる歴史的風致
2　まちづくりの変遷にみる歴史的風致
3　祭りの賑わいにみる歴史的風致
4　景勝地の行楽などにみる歴史的風致

小樽市における維持向上すべき歴史的風致は、次のとおりである。



小樽市歴史的風致位置図

２．海に関わる営みにみる歴史的風致

はじめに

小樽周辺の遺跡を調査すると、縄文時代の地層から大量の魚の骨と貝殻が発見される。このことから、小樽では大昔より水産資源の利用が盛んに行われていたことがうかがえる。また、18 世紀以降、小樽の漁業は地域の産業としてさらに発展していくこととなった。

江戸時代半ば、全国で貨幣経済が進み商品作物の栽培が盛んになると、作物の品質を向上させるため、魚肥（魚を原料として作った肥料）の需要が高まった。魚肥の原料には一般的にイワシが使用されていたが、大量のニシンの漁獲がある蝦夷地では、ニシンが使われるようになり、ニシン魚肥の生産が主要産業となった。19 世紀に入ると、小樽周辺には「千石場所」といわれるニシンの好漁場が集中し、ニシン漁はますます活況を呈するようになる。

江戸時代、小樽を含む北海道の日本海側は西蝦夷地と呼ばれ、「場所請負人」と呼ばれた特定の漁業資本家のみが漁場の経営を許されていた。この地域のニシン漁が盛んになる 18 世紀半ばには、現在の小樽市域では、フゴッペ岬から於古発川（ヲコバチ川）までのヲショロ場所とタカシマ（シクズシ）場所を住吉屋西川家が、於古発川から現在の新川（ヲタルナイ川）河口付近までのヲタルナイ場所を恵美須屋岡田家が請け負った。

小樽市域における江戸時代の各場所の範囲

明治時代に入り場所請負制が廃止されると、定置網の権利は有償で開放され、一般の人々も権利を買い取れば自由に漁場を経営することができるようになった。このため、各地の浜では「親方」と呼ばれた漁場経営者が相次いで誕生した。明治以降の漁場は、作業行程の改善や機械化と同時に、大勢の漁夫を安定的に雇用するため、東北各地の村と出稼ぎ漁夫の契約をするなどして経営を拡大していった。漁夫の人数は、大きな漁場では 200 人前後に及び、それぞれの漁場には「番屋」と呼ばれる彼らの宿舎を兼ねた大規模な作業小屋が建てられた。そのいくつかは現在も残っており、かつてのニシン漁場の光景を彷彿とさせる。

ニシンは大正後期まで激しい浮き沈みを伴いながらも一定の漁獲高を維持したが、昭和 20 年代からは大きく減少し、かつてのような大漁は見られなくなった。近年の漁獲高は約 300～1,000 t でピーク時の約 9 万 t の 180 分の 1 にとどまっている。現在、漁業の中心はホッケやウニなどへ変化したものの、特に忍路から祝津・高島にかけての海岸沿いの地域では、幕末から続く漁業の営みや、それらを背景に持つ産業、風習、漁場建築、往時と変わらない美しい自然環境が小樽の原風景を伝えている。

（１）旧ヲショロ場所の営みにみる歴史的風致

① 概要

旧ヲショロ場所の運上屋（運上家）が置かれた忍路湾は、幕末より天然の良港として知られ、切り立つ崖に囲まれた幅わずか200mの湾口には、かつて荒天を避けるために北前船がひしめき合って停泊していた。時を経た現在でも、残された古写真などを通して、当時の情景を思い描けるほどの景観が保たれており、この恵まれた自然環境と豊かな海産資源を生かした漁業が現在でも盛んに行われている。

現在の忍路湾の風景

それらを現代に伝える幕末の遺構としては、場所請負人の西川家に関連する「忍路神社」及び「津古丹稲荷神社」の社殿が現存しており、「忍路鰊場の会」によって、ニシン漁撈に関わる労働歌や作業を含めた行事が継承されている。また、場所請負制の廃止後の漁場経営や商業活動を記した西川家文書（市指定文化財）が残されており、文字資料からも明治期の経済活動の様子をうかがい知ることができる。

明治期の忍路湾の風景

近代の遺構としては、漁業資源の研究拠点として建てられた「旧北海道帝国大学水産学科忍路臨海実験所」が忍路湾に面して佇んでおり、意匠性に富む外観は水辺に映える洋風建築として、漁村の原風景を基調とした忍路湾の景観にアクセントを加えている。

② 建造物等

（ア）忍路神社本殿・拝殿

忍路神社は、『北海道神社庁誌』（北海道神社庁　平成 11 年(1999)）によると、延宝２年（1674)、ヲショロ場所請負人の西川伝右衛門が勧請し、元禄２年（1689）に社殿が創建され、明治 17 年（1884)、「蝦夷大国主神社」から「忍路神社」に改称したとされている。明治 23 年（1890）年に社殿を焼失するが、明治 29 年（1896）に再建され、大正９年（1920）年には、現在地に流造の本殿を移転するとともに、入母屋造の拝殿を再建したとされている。また、大国主命を祀る神社としては、北海道内で最も古いとされ、「蝦夷大国主一の宮」といわれてきた。

拝殿とその背面の高台に建つ本殿が収められた大正 15 年（1926）の写真が残されているほか、境内の手水鉢には、場所請負人の西川家ゆかりの「橘の紋」とともに、「運上家連中」の文字が刻まれている。

大正 15 年の忍路神社社殿

現在の忍路神社拝殿

忍路神社手水鉢

（イ）津古丹稲荷神社本殿（市登録歴史的建造物）

津古丹稲荷神社本殿

忍路神社境内に建つ津古丹稲荷神社本殿は、『小樽市　の歴史的建造物』（小樽市教育委員会　平成６年（1994））によると、国道整備のため、昭和 13 年（1938）に社殿を解体し、昭和 15 年（1940）、現在地に再建したとされている。本殿は、入母屋造妻入りとし、向拝に唐破風を設けている。移築の際の調査で本殿の彫刻に「嘉永２年中　松前江差　中島作次郎」の銘が発見されたことから、嘉永２年（1849）の創建とされ、市内で建築された社寺建築では最も古いものと考えられている。

（ウ）旧北海道帝国大学水産学科忍路臨海実験所（市登録歴史的建造物）

忍路臨海実験所

旧北海道帝国大学水産学科忍路臨海実験所は、ニシンをはじめとする水産資源の調査・研究施設として建てられた。『小樽市の歴史的建造物』（小樽市教育委員会　平成６年（1994））によると、明治 40 年（1907）に建てられ、その後、施設の狭隘により、大正13年（1924）に移転改築、同年中に増築が行われたとされる。木造２階一部平屋建、外観は多彩な仕上げがなされており、腰から下を目板打堅羽目、１階を下見板、玄関ポーチと２階は白モルタルとドイツ壁でハーフティンバー風に見せている。

忍路湾の深く入り込んだ地形が観察などの研究活動に適していたことから、忍路が選ばれた。現存する臨海実験所としては、東京大学大学院理学系研究科附属臨海実験所に次ぎ２番目に古く、忍路と水産資源の関係を物語る貴重な遺構である。

③ 活動

（ア）忍路鰊漁撈（おしょろにしんぎょろう）の行事（市指定の無形の民俗文化財）

忍路鰊漁撈の行事は、かつてニシン漁で栄えた頃、乗船した漁夫らが協力して一度に大量のニシンを獲る際に唄われた労働歌や作業、当時のニシン漁撈に関わる行事からなるが、ニシン漁の衰退とともにそれらの多くは消滅しつつあった。

昭和 37 年（1962）、小樽の郷土史家越崎宗一や地元の須磨正敏らは鰊場経験者 15 名に呼びかけ、忍路にある大忠（だいちゅう）寺で鰊場の仕事唄を披露・録画し、関心があった研究者らに贈った。このことを契機に、アイヌ語研究者山田秀三、教育行政やテレビ局関係者の協力を経て、昭和 49 年（1974）２月に唄の録音、テレビカメラ収録が実現し、同年３月に発足した「忍路鰊場の会」によって、ニシン漁にまつわる風習を総体的に保存する「忍路鰊漁撈の行事」が伝承されている。

忍路鰊場の会の創設には、小樽市漁業協同組合 10 区（忍路）に所属する多数の組合員が関わっており、発足の背景にあったのは、風前の灯火であったニシン漁撈の唄に対する危機感と忍路への郷土愛そのものであった。

「忍路鰊漁撈の行事」は、忍路神社や旧北海道帝国大学水産学科忍路臨海実験所が建ち並び、かつて、ニシン漁に沸いた忍路湾を舞台として行われ、「網おろし」、「ローカ洗い」、「海上渡御」などの行事や宴会、餅つき、その席で振舞われる食事からなる。漁期のはじまりと終わりの節目に行われる宴会では、会員の力強い歌声が忍路神社や津古丹稲荷神社の社殿に響き渡り、その掛け声を聞いた人々に、網おろしは春の訪れ、ローカ洗いは冬の到来を感じさせる。まさに、「忍路鰊場の会」による労働歌と忍路湾の自然環境は、ニシン漁や北前船の停泊地として活気づいていた頃の情景を現代に蘇らせる風物詩といえる。

船漕ぎ唄の披露

宴席での餅つき

海上渡御の様子

◆忍路鰊漁撈の行事は、次の順序で行われる。

（ａ）網おろし

ニシン場では、雪の残る３月にニシン漁の第一の作業である「網おろしの行事」が行われていた。網おろしは、本格的な漁期に入る節目を祝う儀式で、季節労働者として集った人々をもてなし、漁期のはじまりに向け団結力を高めるニシン場にとって重要な集いであった。

沖揚げ音頭の披露

現在の網おろしは、忍路神社の主に拝殿で大漁祈願祭が行われ、隣接する社務所に会場を移し、宴席が設けられる。宴席には印半纏を羽織った会員や地元の漁業組合長、町内会長、神社総代などの来賓が集い、会場は当時さながらの雰囲気と人々の賑やかな声で満ちる。同席するモンペを着用した女性が主に調理を担当し、宴席が始まると、男女ともに食事や酒を楽しんでいた風習が見られる。

宴席では、種々の御馳走のほかに、会員がついた巨大な大福もちが振舞われ、食事や酒が進むと、会員が木造船の模型の前で「沖揚げ音頭（ソーラン節）」など４件の労働歌を歌う。この労働歌は、櫂を漕いだり、網を引いたりする作業のタイミングを合わせるための掛け声であり、実演形式で披露される。船上の漁夫たちが船頭の音頭により力を集結してニシンと格闘する海上での様子が再現され、宴席が佳境になると、「大船頭」、「船頭」と呼ばれる会長・副会長などの胴上げが行われて終了する。なお、ニシン場の胴上げは、高さを抑えて行われるため、胴上げされる人の帯をしっかりと掴んで行われる。このことは、かつて宴会が行われていた作業小屋の屋根が低く、勢いをつけすぎると天井にぶつかってしまうことから、暗黙のうちに誕生した伝統である。

網おろしでの保存会婦人

大福もち

現在でも、網おろしの前には、開催を告知するチラシを地元住民に配布している人の姿が見られる。また、当日は、会場に向かう人の姿が見られるほか、盛大な宴席を楽しむ団らんの声や唄が周囲に広がり、人々に春の訪れを感じさせる。

（ｂ）ローカ洗い

ローカ洗いとは、漁の後始末、総決算として行われる行事である。本来はニシン漁が終了する４月下旬から５月上旬に行われていたが、現在は 11 月に実施されている。

ローカとは、大量に漁獲されたニシンの仮置き場として使用される小屋のことで、ローカ洗いとは、漁期の終わりにこれを清掃することをいうが、転じて漁期を終えた漁夫たちが互いをねぎらい、漁場を引き上げる際の別れの宴席となった。内容としては、おおよそ「網おろし」と同様に、漁夫たちが酒や御馳走を楽しみ、重労働であるニシン漁の疲れをいやすものであった。現在、保存会が行う行事としてのローカ洗いは、忍路神社社務所などにおいて、餅やニシンなどの御馳走や酒が振舞われ、会員同士が労働歌などを研鑽する場として継承されている。当日の会場では、会員による労働歌の研鑽や宴席が執り行われるため、その宴席での話し声や唄などが周囲に聞こえてくる。また、宴席終了後には、帰路に就く会員の賑やかな様子や会話に、かつてのニシン漁にまつわる風習を思い起こさせる。

大漁祈願祭

会員同士の研鑽や指導

宴席

網おこしの唄の披露

●網おこしの唄の歌詞の一例

（はおい）	（シタゴエ）
どっとーおこー	
どっとこせーのこら	エー
よいやーさー	アラ
	ヨーイヤサー
やさの	
よーいさーあ	エーエエ
	ヨーイヤサ
よーいとぉーなぁ	ホーラァ　エンヤ
	アラアラードォーコイ
	ヨーイトーコ
	ヨーイトコナー
ほーらぁーえーえー	
このあみおこせば	
やーあえーい	ヤートコセー
	ヨーイヤサ
	ホーラァ
せんりょまんりょうの	
かねじゃもの	
よーいとーなぁ	ホーラー　エンヤ
	ホラアラー　ドォーコイ
	ヨーイトーコ
	ヨーイトーコナー

●船漕ぎ唄の歌詞

（はおい）	（シタゴエ）
おーしこー	オーオシコー
えんやあぁえー	オーシコー
おぉこーいーよぉ	オーシコー
ほーらぁ	ホーラァ　ヨェサーエー
えんやれ	ホーラァオーシコー
おこーいよ	オーシコー

（ｃ）海上渡御

７月に行われる忍路神社の例大祭に合わせ「海上渡御」が行われる。豊漁と海の安全を祈願するもので、忍路湾の岸壁に横付けされた木造船に、忍路神社から担いできた神輿が積み込まれると、会員の船漕ぎ唄に合わせ船が進み、湾内を一周する。

船漕ぎ唄は、もともと海岸から網を設置した「建場」までの朝夕の往復時に櫂を漕ぎながら歌うもので、独唱（はおい）と斉唱（シタゴエ）の一部が絶妙に重なり、独特の雰囲気を醸し出す。「オーシコー」の力強い掛け声とともに船に乗せた神輿が洋上を渡る様子を見に岸壁には忍路の人々を中心に多くの人が集まる。その情景は忍路神社例大祭が生み出す夏の風物詩となっている。

（イ）忍路神社の例大祭

毎年７月上旬に行われる忍路神社の例大祭では、約１か月前に神社役員会が開催され、地元の町内会、漁業協同組合及び漁師などで構成される 10 名程度の役員が例大祭に向けて、開催方針やそれぞれの役割を決議することで準備が本格的に始まる。

忍路鰊場の会も担い手となる神輿渡御

西川家文書（市指定文化財）には、明治 19 年（1886）頃に行われた忍路神社例大祭の様子が記されており、少なくとも、この時期から例大祭が行われていたことをうかがい知ることができる。

例大祭に向けた準備では、総代が例大祭を構成する宵宮（よみや）、本祭、神輿渡御、直会（なおらい）までの行程を取り仕切り、総代は軒花（のきばな）配りと題して寄附金の集金に勤み、神社境内で鳥居に掛ける注連縄の製作を手掛ける。

例大祭が近づくにつれて、界隈の人々は、高くそびえる神社の幟（のぼり）旗、民家の軒先に掲げられた軒花、社殿の掃除や注連縄の製作に勤む地元住民を見て、毎年恒例の祭りが近づいていることを感じる。

例大祭当日の朝は、御魂入れ神事が執り行われ、一行は御神体が奉遷された神輿を担いで忍路神社を出社し、忍路湾の岸壁に着岸された木造船まで渡御する。地域住民はその船出を見守るために岸壁に押し寄せ、漁の安全と大漁を祈願する。

神輿を木造船に移し、「忍路鰊場の会」が手漕ぎで忍路湾の防波堤内一円を海上渡御したのち、神輿を動力船に載せ替えて、大漁旗を携えた船とともに、忍路、桃内などの海上を一巡して湾に戻る。

その後は、神職、神社役員、奴、神輿らで構成される渡御一行が鰊漁撈の唄を携えて、地区一帯を練り歩く。

神輿の担ぎ手については、昭和 49 年（1974）に漁業協同組合員や町内会役員らが中心となり創設された「忍路鰊場の会」が、創設から 50 年経過した現在でもその担い手となっており、半纏をまとった会員が神輿を担ぎ、軒花が掲げられた家の前では「切り声」と称した沖揚げ

●沖揚げ音頭（ソーラン節）一例

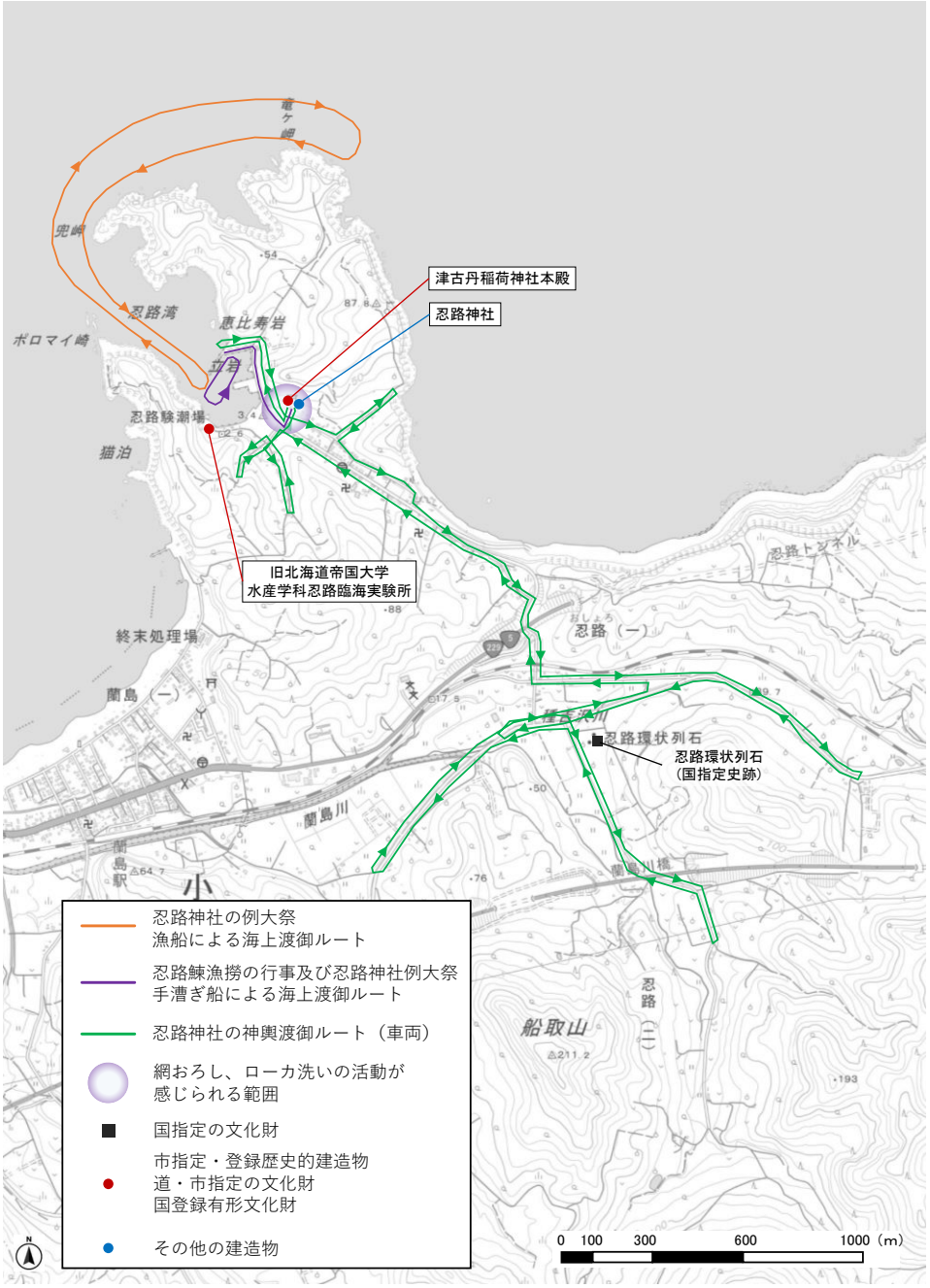
ソーラン　ソーラン　ソーラン　ソーラン
ハイ　ハイ
仏さんより　神さんよりも
サセルあの娘（こ）が有難いちょい
ヤサエンエレヤーサ　ドッコイショ
アラドッコイショ　ドッコイショ

音頭などを唄いながら忍路一円を渡御する。「切り声」を見聞きした人々は、ニシン漁場で行われてきた祭りの伝統と本格的な夏の訪れを感じる。

動力船による神輿渡御

忍路地区一円の神輿渡御

地元直売所での五穀豊穣祈願



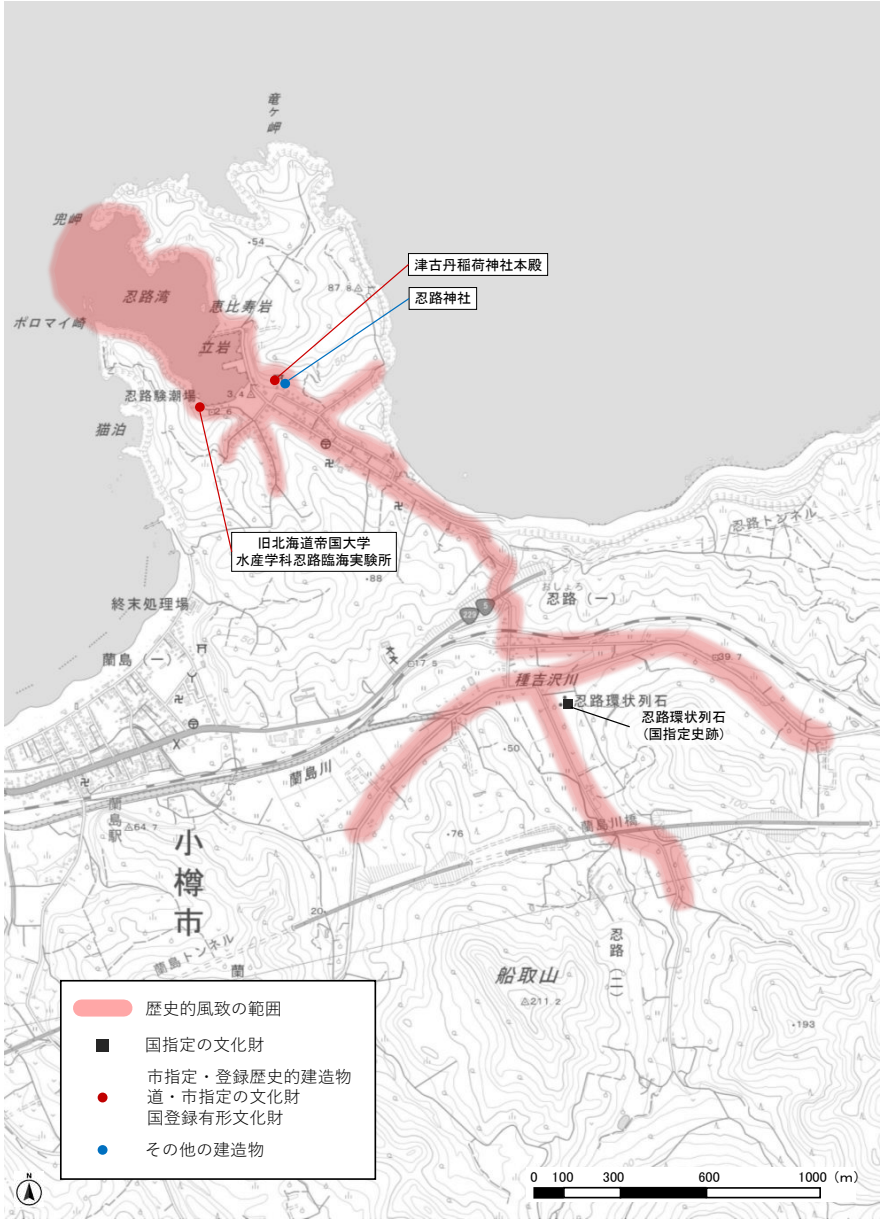
忍路鰊漁撈の行事・忍路神社の例大祭の範囲

④ まとめ

かつて、旧ヲショロ場所が置かれた忍路湾では、時を経た現在でも、ニシン漁で繁栄した漁場や北前船が停泊した当時の情景を描写できるほど、変わりない景観が保たれている。その漁村の原風景は、恵まれた自然環境や豊かな海産資源を生かした営みが映し出すものであり、西川家の遺構や西川家文書などの歴史資料もこの地区特有の文化的景観を補っている。

また、「忍路鰊場の会」や地元有志によって、かつてのニシン漁撈に関わる労働歌や風習が継承されており、その活動は、紛れもなく生まれ育った故郷や自らの先祖を想う郷土愛そのものといえる。

忍路地区では、今を生きる人によって、ニシン漁で繁栄した当時を生きた人々の心意気と風習が現在まで語り継がれ、漁村の原風景と歴史的建造物が一体となったまちなみが良好な歴史的風致を形成している。



旧ヲショロ場所の営みにみる歴史的風致の範囲

（２）旧タカシマ場所の営みにみる歴史的風致

① 概要

市の北西端に位置する祝津・高島地区では、江戸時代にタカシマ（シクズシ）場所が置かれ、明治に入ってからも、青山家、白鳥家、茨木家といった自営漁家が大規模なニシン漁場を展開した。特に祝津の海岸沿いには、明治 10 年代から大正期までの漁場建築や蔵・倉庫が集中して残り、当時の賑わいを彷彿とさせる歴史的まちなみが形成されている。

これらの建物の一部は地元の市民団体により保存・活用が図られており、平成 21 年（2009）からは祝津前浜において小樽産のニシンを振舞うイベントが開催され、現在では本市の人気イベントとなっている。

高島地区は、ニシン漁が衰退した後も北洋漁業の基地として賑わい、現在でも港の周囲には造船所や鉄工所が稼働しており、一部の鉄工所には、現役で稼働している旧手宮鉄道施設（重要文化財）の転車台に使われている古手の鋼材や機器を修繕できる職人が所属している。また、この地域では、明治初期に新潟県北蒲原郡から伝わった「高島越後盆踊りの行事」（市指定の無形の民俗文化財）が地域住民の手によって保存されている。

祝津・高島地区ともに、漁業の営みを背景とし、歴史的まちなみや伝統行事が継承される市内の中でも特色ある地域となっている。

② 建造物等

（ア）旧青山家別邸（国の登録有形文化財）

青山留吉（とめきち）は、明治中期に活躍した後志有数のニシン漁家である。青山家は、白鳥家、茨木家とともに祝津三大漁家の一人に数えられ、祝津には青山家の勢いを物語るかのように一大漁場建築群が建設された。

旧青山家別邸

青山家の本邸は、留吉の出身地である山形県飽海郡遊佐町に残り、重要文化財に指定されている。旧青山家別邸は、大正７年（1918）から工事に着手し、大正 12 年（1923）に完成している。本邸同様に贅を凝らした造りであり、主屋は、入母屋造桟瓦葺、木造平屋建で２階建の離れが付属する。南正面に主玄関と脇玄関を対称に配置し、室内は春慶塗や銘木を用い、部屋ごとに意匠を変えるなど、内外ともに豪邸としての風格を示している。

現在は、小樽貴賓館の一部として一般公開されている。また、留吉が大正８年（1919）に建てた番屋と明治 20 年代に建てた蔵の一部は、北海道開拓の村（札幌市）に移築保存されている。

（イ）旧白鳥家番屋（市指定歴史的建造物）

白鳥家の祖である喜四郎は、明治 10 年（1877）に祝津地区の総代となった。旧白鳥家番屋は、『小樽市の歴史的建造物』（小樽市教育委員会　平成６年（1994））によると、明治 22 年（1889）発行の『後志国盛業図録』に掲載されていることから、明治 10 年代に建てたとされている。

旧白鳥家番屋

主人と漁夫の住居部分が大屋根で一体となっており、主人のすまいは、床の間や欄間を設け、和風住宅の特徴を有している。また、漁夫の寝床は、吹き抜けを囲むように外壁側に設置されている。大工は、大棟梁が小林秀作、脇棟梁が土門倉次である。

（ウ）恵美須神社本殿（市指定歴史的建造物）

恵美須神社本殿は、『北海道神社庁誌』（北海道神社庁　平成 11 年(1999)）によると、場所請負人の西川貞二郎が漁場を開設する際に守護神として社殿を建てたとされており、文久３年（1863）と書かれた棟札が発見されている。また、『小樽市の歴史的建造物』（小樽市教育委員会　平成６年（1994））によると、昭和３年（1928）に社殿が改築されており、本殿は、本妻飾りに笈形付き太瓶束を設けた一間社流造で、覆屋に収められている。

恵美須神社

（エ）旧茨木與八郎番屋（市登録歴史的建造物）

旧茨木與八郎番屋は、『北海道の近代和風建築』（北海道教育委員会　平成７年（1995））によると、明治後期から大正期頃に建てたとされている。かつて、青山家、白鳥家と並び祝津で大きくニシン漁場経営をしていた茨木家により建てられた漁場建築である。主屋と離れからなり、主屋は寄棟の平屋建、離れは入母屋の２階建で建てられている。

旧茨木與八郎番屋

（オ）旧茨木家中出張（なかでばり）番屋

旧茨木家中出張番屋は、茨木家によって建てられた出張番屋である。寄棟の平屋建であり、発見された棟札から明治 45 年（1912）頃に建てたとされている。腐朽が進んでいたが、地元有志で構成する「おたる祝

旧茨木家中出張番屋

津たなげ会」をはじめとする関係者の努力により、平成 22 年（2010）に修復され、公開・活用されている。

（カ）にしん漁場建築（道指定有形文化財）

にしん漁場建築（鰊御殿）

にしん漁場建築は、後志地方でも有数の親方であった泊村の田中家が明治 30 年（1897）に建築した鰊漁場建築のうち、主屋のみを昭和 33 年（1958）に北海道炭礦汽船株式会社が創立 70 周年記念事業で移築したものである。大規模な切妻造、煙出しを兼ねた天窓、漁夫用と親方用の二つの玄関を備えた外観、内部では、親方の居住空間と漁夫の空間が隣接して併存し、漁夫用の空間には寝台が造りつけられているなど、番屋建築の特徴を残している。現在は、小樽市鰊御殿として、ニシン漁にまつわる民具や写真などを展示する資料館として一般公開されている。

（キ）日和山灯台

日和山灯台

祝津の日和山は、古くから船乗りたちが出港前に日和（天候や空模様）を見た場所であった。明治４年（1871）に信香町に設置された常灯台が火事で焼失した後、明治 16 年（1883）に北海道の洋式灯台としては２番目となる日和山灯台が設置された。開設当初は木造の白い外観であったが、昭和 28 年（1953）に鉄筋コンクリート造で改築され、昭和 33 年（1958）の北海道大博覧会記念はがきには、現在の日和山灯台が確認できる。

昭和 43 年（1968）に吹雪の日でも見やすいように赤と白の横縞のデザインに変更しており、現役の灯台として、年に数回内部が一般公開されている。

昭和 33 年（1958）年頃の
日和山灯台

（ク）高島稲荷神社

高島稲荷神社は、『北海道神社庁誌』（北海道神社庁平成 11 年(1999)）によると、元禄３年（1690）に創祀、享和２年（1802）に現在地に再建したとされている。大正５年（1916）に社殿が改築されるが、昭和 11 年（1936）に焼失する。昭和 13 年（1938）に再建され、昭和 46 年（1971）には神明造の本殿が改築された。境内の鳥居には、「昭和 16 年８月」と刻まれている。

高島稲荷神社

（ケ）旧高島町役場庁舎（市指定歴史的建造物）

旧高島町役場庁舎は、発見された棟札と施工業者が所蔵する写真により、昭和 10 年（1935）に高島町役場として建てられたことが判明している。

旧高島町役場庁舎

『小樽市の歴史的建造物』（小樽市教育委員会 平成６年（1994））によると、昭和 15 年（1940）の小樽市との合併により小樽市役所高島支所となり、昭和 21 年（1946）から診療所として活用された。外壁は石綿セメント板を下見板風に羽重ねしている。１、２階を通した窓額縁、その間のパネルのメダル状装飾など洋風建築の趣を伝えている。設計は小樽市営繕課の野村秀平が行った。

（コ）旧近江家番屋（市登録歴史的建造物）

旧近江家番屋は『小樽市の歴史的建造物』（小樽市教育委員会 平成６年（1994））によると、創建年は幕末から明治初期に建てられた。

旧近江家番屋

切妻の単純な大屋根を架けた平入りの典型的なニシン番屋である。平面中央にむくり破風をつけた玄関があり、正面平側は全面連子格子で覆われ、玄関から背後に抜ける「土間庭」を境に左側が親方の居住部で、１室のみ板の間となっている。右側が、桁行５間、梁間６間半の板敷きの広間（「台所（だいどころ）」）で、北面と東面にＬ字型の奥行き６尺ほどの中２階（漁夫用の「寝台（ねだい）」）を設けられている。ここの小屋組は開口６間半、桁行 12 間という広い空間を覆うため、棟通りの「庭」及び「寝台」境に太い大黒柱を３本立てて大梁を渡し、その上に対角線梁を交差させて組み上げている。

③ 活動

（ア）高島越後盆踊りの行事（市指定の無形の民俗文化財）

高島地区では、毎年盂蘭盆会の時期に「高島越後盆踊りの行事」が行われる。

高島越後盆踊りの行事

『新高島町史改訂増補版』（第一次編集高島小学校開校百周年記念協賛会、増補再編集大黒昭、平成 18 年）によると、この盆踊りは、明治初期に新潟県北蒲原郡紫雲寺（現新発田市）から高島へ移住した人々が、新たな土地で共同体を形作るとともに、故郷をしのび先祖を慰めるために始めたとされる。

当時高島はニシン漁の千石場所として知られており、道内外から多くの人が仕事を求めて移住してきた。小樽は道内の他都市のように集団入植が行われなかったた

め、特定の地域との結びつきが薄いとされるが、高島地区には越後と津軽からまとまった人数の移住があり、両地域との結びつきがうかがえる文化と風習が残る。「高島越後盆踊りの行事」をはじめとするこれらの風習は、ニシンがもたらした遺産といえる。

盆踊りは３日間にわたり開催され、従来、曜日にかかわらず８月 18 日、19 日、20 日に行われたが、令和６年度より８月 13 日から 20 日の金・土・日曜日と変更された。また現在は夜７時ごろにはじまり、９時ごろで終了するが、かつては夜が白むまで踊り続けて先祖を供養したと伝わる。

高島越後盆踊りの開催が近づくと、近隣の店舗などに開催を告げるポスターが貼り出される。会場となる高島公園では、１日目の夕方から、「高島越後踊り保存会」の会員たちが盆踊りの準備を始める。公園の近隣に「高島越後盆踊り」と書かれた幟（のぼり）を立て、公園の広場に櫓（やぐら）を設置し、櫓を大漁旗で飾り付け、提灯を下げ、櫓に太鼓を上げる。

櫓の様子

６時30分ごろには保存会の会員たちが会場に集まり、近隣の住民は、そろいの浴衣や笠を身に着けた会員たちが高島の住宅街を抜け高台の公園へ向かう様子を見て、盆踊りが間もなく始まることを知る。６時 50 分ごろには提灯に火がともり、踊り手は櫓を中心に輪を作る。

櫓の上で歌い手、太鼓、笛、摺（す）り鉦（がね）によるお囃子の準備が整うと、力強い太鼓の音を皮切りに盆踊りがはじまる。お囃子は、会場裏手にある高島稲荷神社のほか、普段保存会が盆踊りの練習をしている高島会館やその前に建つ旧高島町役場庁舎を含む近隣に響き渡る。盆踊りを途切れることなく踊り、演奏し続けるうちに、まだ少し明るかった日が次第に暮れ、提灯の明かりが目立ち始める。

盆踊りがはじまると、近隣から少しずつ地域の人々が集まり、椅子を持参し踊りを見物する者、軽快なお囃子に誘われ踊りの輪に参加する者など、思い思いに盂蘭盆会のひと時を過ごす姿が見られる。足腰が悪く立っては踊れないという高齢者も、椅子に座ったままで手や足を動かす様子が見られ、地域住民に高島越後盆踊りの行事が伝統行事として深く根付いていることがうかがえる。

行事は、１日目より２日目、２日目より最終日に参加者や見学者が増え、最終日の終了間際に最高潮を迎える。このとき、踊りの輪は二重三重に広がり、会場には賑やかなお囃子と歌い手の伸びやかな歌声、踊り子からの盆唄の「ドッコイドッコイ」の合いの手が響く。櫓を中心に広がる提灯のあかりや、櫓のライトに照らされた踊り子たちの影が長く伸び、幻想的な雰囲気が広がる中、１日目と２日目の最後には「恋し懐かし皆様方よ　またの会う日を楽しみに」、最終日には「踊るも跳ねるも今日今晩限り　明日の晩から誰踊る」との歌詞で盆踊りが締めくくられる。

盂蘭盆会の夜、会場から響くお囃子や盆唄に誘われるように地域の人々が集まり、踊りを楽しむ光景は、高島の夏の伝統行事として親しまれている。

また、保存会では、この伝統を後世に継承するため、祝津地区の旧青山家別邸やおたる潮まつりのほか、市内商店街などの様々な場所で踊りを披露して魅力を伝えている。そのほか、盆踊り会場に掲げられた大漁旗は、茨木家中出張番屋の内部や６月下旬に行われる恵美須神社例大祭でも掲げられている。また、盆踊り会場を灯す提灯も高島稲荷神社祭りや恵美須神社例大祭で掲げられる。そのほか、にしん漁場建築の売店では、「鰊御殿」と記された提灯が販売され、「忍路鰊漁撈の行事」の労働歌が流れる展示を行っており、高島から祝津にかけて、ニシン漁を中心とした風景や音声を通して漁業の息づく空間が展開されている。

（イ）ニシン番屋を背景に続く漁業の営み

ニシン漁で湧いた歴史をもつ祝津・高島地区では、現在も漁師による漁業の営みが続けられている。漁業の内容は、水産資源の変化や漁業規制に伴い変化しており、現在では刺網、エビ籠、沖合底引き、延縄（はえなわ）等による漁船漁業が主体となっている。ニシンについては、昭和 29 年（1954）を最後に海が群来（くき）る（ニシンが産卵行動のために沿岸に押し寄せ、海が白く濁る様子）ことはなかったが、漁業関係者の稚魚放流活動などにより、平成 20 年（2008）ころから毎年群来る様子が確認されている。

ニシン街道沿いの
漁場建築と漁具

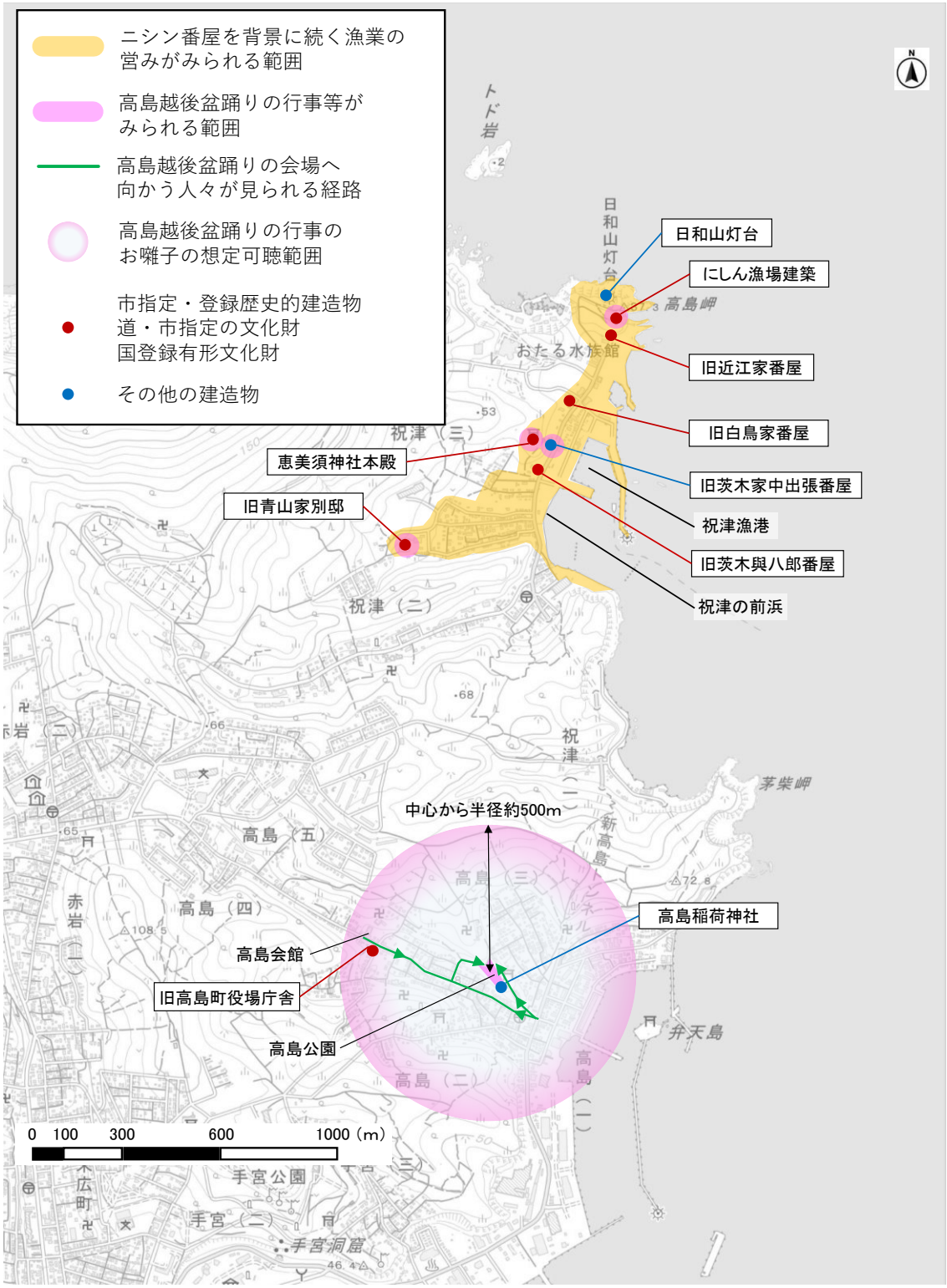
祝津地区はニシン漁が盛んだったころから漁場周辺の環境が大きく変わっておらず、海岸線を通る道路のすぐ山側には、旧白鳥家番屋や旧茨木與八郎番屋などの漁場建築や石蔵、道路の突き当りには旧近江家番屋が、さらに高台には旧青山家別邸や恵美須神社が建っている。それらの周辺には漁師の家が建ち並び、家の前には網にかかった魚を入れる万丈籠（ばんじょうかご）やホタテの稚貝を入れる座布団籠（ざぶとんかご）が干されている。

祝津の前浜

現在でも、漁師達は、明け方から漁場建築の建ち並ぶ通りを通って漁船に向かい、前浜や祝津漁港から船を出航させ、にしん漁場建築や日和山灯台などが建つ高島岬を背景に漁を行っている。

祝津地区の漁場建築と
石蔵が並ぶまちなみ

海岸線の道路に迫る海や、前浜に小型船や船外機が陸揚げされている様子を見た人々は、小樽の漁業の営みや水産資源の豊かさを感じる。また、ニシンには「春告魚（はるつげうお）」の別名があり、その名のとおり、小樽の人々は、ニシンが群来たニュースや、市場やスーパーで並ぶ小樽産のニシンを見ると、まだ雪が残る環境の中でも、季節が春へ向かっていることを強く感じる。現在も続く漁業の営みと、小樽と深い関わりのあるニシンを目にすると、ニシン漁で栄えた往時の様子や春の訪れを感じさせる。

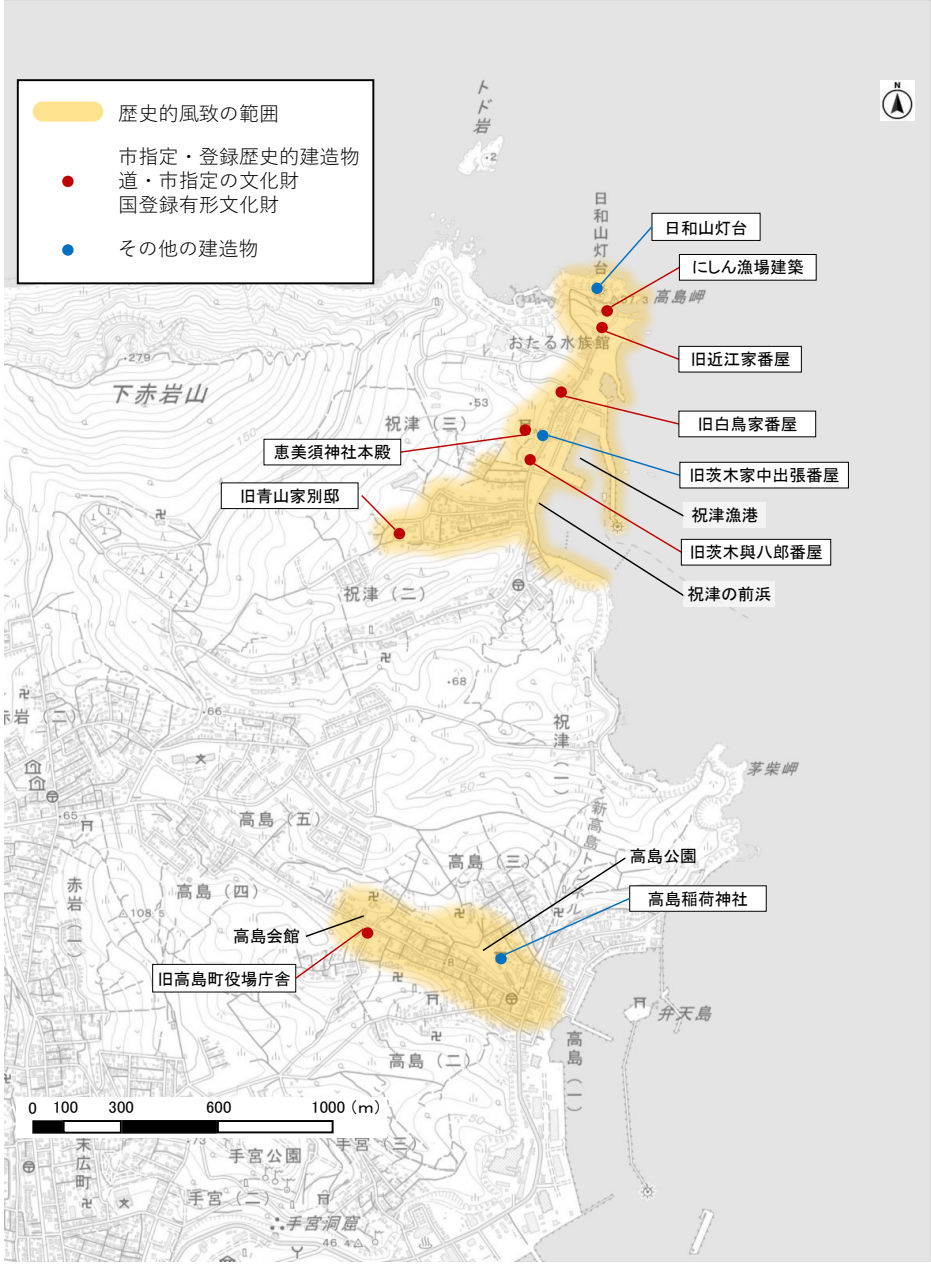


旧タカシマ場所の営みにみる活動の範囲

④ まとめ

祝津地区では、ニシン街道とよばれる海岸近くの道路沿いにニシン漁の繁栄を物語る漁場建築と現代の漁師たちの住宅が建ち並び、前浜には漁具や小型船が置かれている。これらは昔ながらの漁師町の情緒を感じさせ、磯の香りや沖から吹き付ける潮風がそれらをさらに際立たせている。漁場建築などを背景にして行われる漁業の営みは、ニシン漁で栄えたころから続く祝津地区の歴史的風致を形成している。

また、高島地区では、ニシンを求め新潟から移住してきた人々が伝えた盆踊りが継承されており、ニシンがもたらし、残した文化・風習と漁師町の佇まいが相まって、市内の中でも特色ある地域となっている。高島漁港を見下ろす高台に建つ高島稲荷神社横の高島公園で行われる高島越後盆踊りの営みは、高島地区の人々の生活の一部に溶け込み、この地区独特の歴史的風致を形成している。



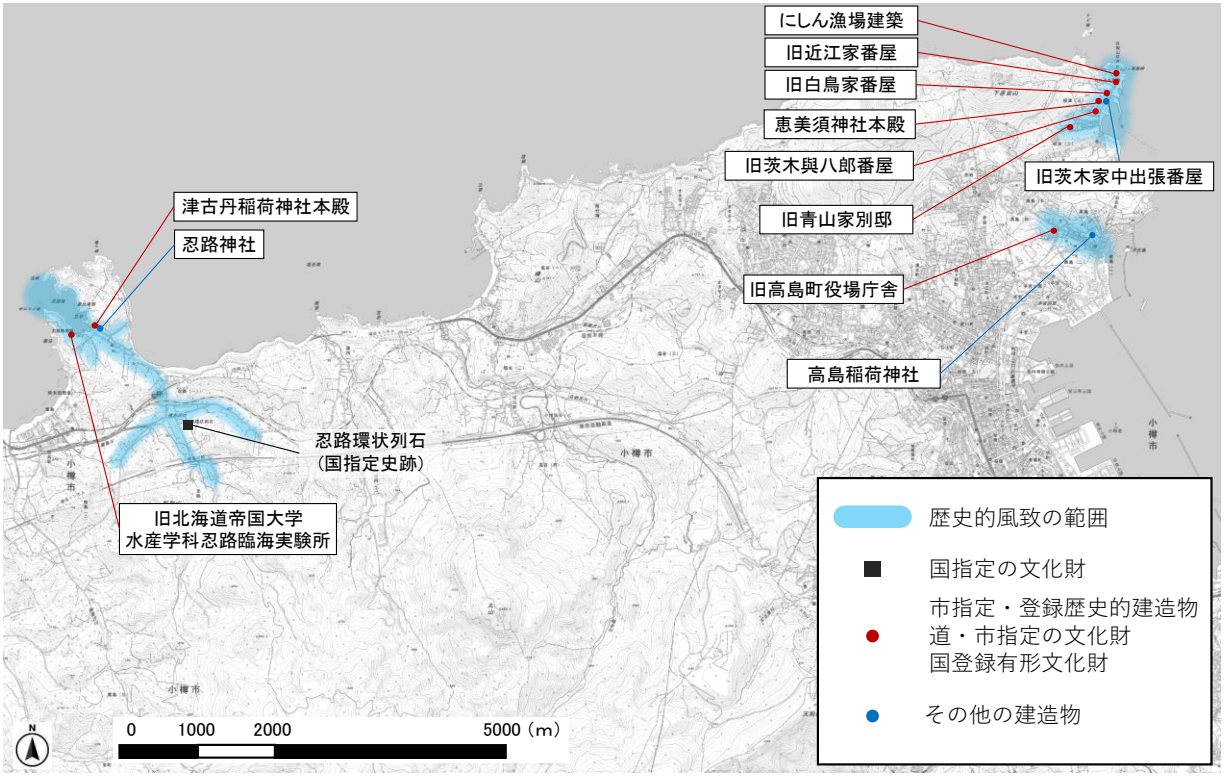
旧タカシマ場所の営みにみる歴史的風致の範囲

おわりに

本市は、幕末から明治にかけて道南及び本州以南各地からの移住者が多数住みつき、急速にまちが形成された。これらの背景には、ニシン漁を中心とした漁業の営み、ニシン〆粕を含む海産物の加工及び北前船による海上輸送によってもたらされた繁栄の歴史が関係するが、当時建てられた神社や番屋などの歴史的建造物とともに、移住者によって伝えられた多様な生活習慣や民俗芸能が継承されていることが本市の特徴といえる。

漁獲高の激減などにより、現在の漁業の中心はニシンから他の魚種に移り、ニシン漁そのものも一時途絶したが、近年では、往時ほどの漁獲高はないものの、ニシンの漁獲が復活しており、春先のニシンの季節になると、市場やスーパーには小樽産のニシンが売り場に並ぶ様子が日常的に見られる。また、人工種苗放流などの取組によって、半世紀ほど途絶えていた群来た海の様子が再び見られるようになったほか、市内外から多くの観光客が訪れる「ニシン祭り」の開催など、地区の特性を生かしたニシンとのつながりは、今もなお続いている。

海岸付近には小樽の原風景ともいえる環境が残されており、そこで行われる海に関わる営みは、神社や漁場建築などの歴史的建造物と一体となって歴史的風致を形成している。



海に関わる営みにみる歴史的風致

【コラム】：ヲタルナイ場所

小樽の地名は、17 世紀末に文献に登場した「ヲタルナイ」に由来する。小樽市総合博物館所蔵の「国絵図（松前島図）」（元禄 13 年、1700 年）には「おたるない」と記されており、この時点で既に「ヲタルナイ」の地名が確認できる。

国絵図（部分）　元禄 13 年

「ヲタルナイ」は元々ヲタルナイ川の河口に存在したアイヌの集落を指し、この地域は

サケ漁場やアイヌと和人との交易場として利用されていた。18 世紀には場所請負制度が導入され、ヲタルナイ場所に運上屋が設置されたが、ニシン漁の需要が高まると運上屋は現在の堺町付近に移転した。

旧ヲタルナイ場所は、市街地中央を流れるオコバチ川から南東部を流れる新川（銭函３丁目）付近までの範囲にあり、運上屋はその東端に位置していた。ヲタルナイ川は松前藩の場所請負制度の下で、ヲタルナイ場所と東に接するイシカリ場所との境界とされていた。しかし、現在のヲタルナイ川は流路をほとんど失い、河口部分は新川放水路とつながり、新川河口となっている。河口付近にはその痕跡と思われる沼が点在し、周囲には風力発電の風車が建ち並び、波の音と風車が風を切る音が響く場所となっている。

ヲタルナイ場所は、幕末には人口約 2,000 人を数える西蝦夷地屈指の集落に成長し、場所請負制度廃止後も明治 20 年代まで市街地化が進んだ。しかし、明治 32 年（1899 年）の小樽区政開始に伴い、旧ヲタルナイ場所の西端は小樽区に編入され、それ以外の地域は朝里村となった。

運上屋が設置された西端地区（クッタルウシ）は、小樽区として整理され、明治・大正・昭和初期には経済都市として発展を遂げた。一方、ヲタルナイ場所の大部分は朝里村として整理され、特に朝里地区では昭和 10 年代に田園都市構想に基づく都市開発が計画された。朝里地区の海岸線では引き続き漁業が営まれ、ナマコは小樽の特産品として国内外で広く知られるようになった。朝里地区と銭函地区の間の海岸線は建築物が少なく、銭函地区の「恵比寿岩」と呼ばれる巨岩がランドマークとして親しまれ、海岸で行われる漁業の営みは、小樽の原風景の一つである。

銭函地区は戦後、住宅街として急速に発展し、札幌市手稲区と生活圏を共有するようになった。朝里地区と銭函地区は、小樽市中心部とは異なる文化圏を形成し、新興住宅街としての性格を持ちながら、地域神社の祭礼や住民参加型の地域おこし活動が活発に行われている。

このように、旧ヲタルナイ場所は、小樽の中心市街地に見られる運河や銀行街とは異なる特色を持ち、小樽発祥の地として本市の歴史において重要な地域である。

【コラム】：水産加工品

ニシンを求めて移住する人の増加により、元治２年(1865）にオタルナイが村並となった。この頃の主要な産業は漁業とそれを利用した卸売業であり、特に前浜から水揚げされるニシンは、そのおよそ８割が〆粕として肥料にされ、高価で本州各地で取引されたほか、加工食品としても流通した。なかでも「タカシマ産身欠き鰊」はブランド物の扱いを受けた。

また、保存の利く身欠きニシンや塩数の子などの水産加工品は、江戸時代には場所請負人を通して海路で、明治時代に入ってからは汽船や列車によって本州に運ばれた。

明治以降に沖合漁業と北洋漁業が活発になると、漁獲の対象がスケソウダラ、タラ、カレイ、ホッケなどに移り、これらの魚介類を原料とした塩蔵品や塩干品に加え、蒲鉾や甘露煮などの様々な加工品の製造が盛んになったことで小樽の水産加工業の礎が築かれた。

明治 30 年代半ばから昭和初期にかけて、市井の人々の暮らしを記録した「稲垣益穂日誌」を見ると、家庭で正月などに飯寿司が作られていたことがわかる。

また、今も市内で飯寿司を製造する「堀内水産食品」が明治 11 年（1878）に創業し、蒲鉾などを製造する「かま栄」が明治 38 年（1905）に、「かま栄」から独立した「大八栗原蒲鉾店」が大正３年（1914）に創業したことからも、古くから飯寿司や蒲鉾などが市民に親しまれてきたことがうかがえる。

水産加工業を営む企業は最盛期に比べて減ってしまったが、製造される商品は、現在も市民の食生活を支え、全国から高い評価を得ている。近年では、前浜から刺し網漁で漁獲されるシャコや養殖ホタテを原料とした水産加工品のブランド化や新商品の開発、販路拡大に向けた取組が積極的に行われている。

飯寿司

復古版角焼

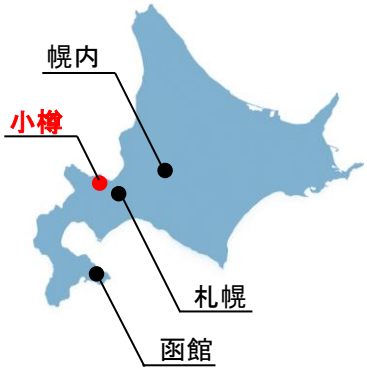
復古版角焼は、初代の栗原八郎氏がつくっていたソウハチガレイを使用した蒲鉾を現代に復刻した商品。

３．まちづくりの変遷にみる歴史的風致

はじめに

明治政府は、明治２年（1869）に開拓使を設け、北海道の本格的な開拓に着手した。同年、小樽に海官所が設置されると、北前船をはじめとする商船の往来が飛躍的に増加した。また、それまで道南の箱館（現函館市）が持っていた北海道の玄関としての機能を開拓使本府として建設が始まった札幌への物資・人材の供給基地となった小樽が担うこととなった。

明治 15 年（1882）に小樽から幌内（現三笠市）まで鉄道が開通し、幌内で採掘された石炭は、鉄道と港を結ぶ拠点である手宮に運ばれた。そこで船に積み込まれた石炭は本州に運ばれ、日本の近代化の原動力になるとともに、小樽が商業都市として発展する基盤を築いた。また、この鉄道は小樽港に入港する船舶で運ばれた人々や商品を内陸部へ輸送することを可能にし、北海道への入植を促進した。



明治 30 年代になると、小樽港の取扱量は函館港を上回るようになる。一方で、汽船会社の台頭により北前船による海運に陰りが見え、その船主たちは小樽や函館の倉庫業へ資本を投じた。小樽では海岸の埋め立てが進み、そこに倉庫が次々と建設された。また、それらの商取引の急増に伴い、取引決済のために多くの銀行が小樽へ進出し、大正末期には色内地区を中心とした銀行街が形成された。

小樽では水産業や商業のほか、食品製造業や製缶業、木材加工業などが発展し、豊富な水源を活用した醸造やゴム製品の製造も盛んに行われた。小樽の経済都市としてのピークは大正末期から昭和初期であり、戦後も復興拠点として本州への石炭や食料供給を担い、新たに都市銀行が進出する動きも見られたが、昭和 30 年代半ばには太平洋航路の増加や北海道経済の札幌集中化などの影響を受け、小樽の経済は衰退した。

この状況を打開するため、昭和 41 年（1966）に運河を埋め立てて道路を整備する都市計画が決定するが、計画が進められる中で、有幌地区の倉庫群が解体される様子を目の当たりにした市民が強い危機感を覚え、昭和 48 年（1973）に「小樽運河を守る会発起人会」が発足する。その後、市民らの間で歴史的景観の価値を見直す動きが強まり、約 10 年にわたる運河保存運動が展開された。この運動は単なる景観や建造物の保存にとどまらず、地域のアイデンティティを守るための重要な活動となり、市民の郷土愛や協働の精神を育む大きな原動力となった。

保存派と推進派による市内を二分した論争を経て、現在の運河周辺の景観が創出されたが、この論争を通じて、歴史的景観の価値や魅力が再認識され、それらを活用することで小樽は観光都市としての歩みを進めることとなった。また、運河保存運動の原動力となった市民の郷土愛や協働の精神は、今も市民に根付いており、往

時の繁栄を物語る歴史的建造物やまちなみとともに、本市のまちづくりの礎となっている。

（１）港と鉄道を背景としたまちづくりにみる歴史的風致

① 概要

江戸時代、大坂（現大阪）から瀬戸内を経て、北陸や東北の日本海側を経由し、松前に至る西回り航路は、日本の経済を支える大動脈であった。この航路で活躍した商船はのちに北前船と呼ばれ、小樽港にも明治初頭から明治 30 年代にかけて多くの北前船が往来した。これにより開拓物資の移入や海産物などの移出が行われ、財を築いた北前船主たちは、海岸付近の埋立地に木骨石造（もっこつせきぞう）の営業倉庫を建て、商業活動を活発化させた。

明治初頭に幌内で発見された豊富な埋蔵量を誇る良質な石炭を運ぶため、官営幌内鉄道の整備が始まり、明治 13 年（1880）には北海道初の鉄道が手宮－札幌間で部分開通し、明治 15 年（1882）には幌内までの全線が開通した。港と鉄道が結びついた小樽は、石炭の積み出し港として日本の近代化に貢献するとともに、鉄道の延伸に伴い道内各地へ物資を供給し、入植者の生活を支え、道内で産出される農産物などを本州に提供する役割を担った。

小樽港は、明治 22 年（1889）に特別輸出港、明治 32 年（1899）に国際貿易港に指定され、さらに明治 41 年（1908）には日本初の外洋防波堤が完成し、港湾都市としての発展を加速させた。港と鉄道を有する小樽は、北海道の玄関としての地位を確立し、物流の中心地として発展を遂げた。

多くの船舶が集まる小樽港では、港湾荷役の効率化が求められ、埠頭式と運河式のどちらを採用するかで議論が起こり、防波堤建設の中心人物であった廣井勇が、小樽港の貨物の種類や積み下ろしの将来を考えれば埠頭式が優れているが、艀（はしけ）を中心とした荷役のシステムの現状を考えて、運河式の方が現実的な対応と提案し、運河式で進められることとなった。大正 12 年（1923）、小樽港の沖合が埋め立てられ、艀を航行するための運河が完成した。その埋立地には製缶業の施設群や木骨石造の倉庫などが建てられ、艀を活用した荷物の積み下ろしが盛んに行われた。

一方で、昭和 11 年（1936）には埠頭の整備が始まり、運河が担っていた役割が次第に埠頭へ移るとともに、港湾貨物の取り扱いが太平洋側で増加したことに伴い、役目を終えた運河を埋め立てて道路を整備する都市計画が昭和 41 年（1966）に決定した。その後、運河の保存を求める市民らと行政による約 10 年にわたる論争を経て、運河の再整備が行われた。

現在の運河に艀の姿はないが、運河沿いでは製缶業が営まれ、当時の姿を残す倉庫の前を遊覧船が航行し、北側の運河には遊漁船や作業船が並ぶ。運河の役割や港の物流形態は変化したものの、小樽運河周辺では今も倉庫業を営む地元企業が本市の物流機能の一端を担っている。

運河とともに、工場や倉庫群が織りなす情緒あふれる風景は、物流拠点として繁栄した歴史を物語る景観の一つであり、水辺に親しんできた市民にとってその重要性は今も変わらない。また、小樽は北海道における鉄道発祥の地であり、市民と鉄道の関わりは深い。散策路となった旧国鉄手宮線をはじめ、鉄道遺産が日常生活に溶け込み、市民らによって大切に受け継がれている。小樽の港と鉄道を背景としたまちづくりは、地域の歴史や文化を尊重しながら、新たな価値を創出する取組として現在も続けられている。

② 建造物等

（ア）旧小樽倉庫（市指定歴史的建造物）

旧小樽倉庫は、『日本近代建築総覧』（日本建築学会 平成６年（1994）発行）によると、明治 23 年（1890）から明治 27 年（1894）の建築とされている。北前船主の西谷庄八（にしやしょうはち）と西出孫左衛門（にしでまござえもん）によって建てられた北海道で最初の営業倉庫である。正面に向かって右側の倉庫が最初に建てられ、明治 26 年（1893）の盛大な開業式の写真が残されている。

旧小樽倉庫

増築により、二つの中庭を持つ大倉庫となるが、倉庫内に保管した商品の情報を遮断するために荷捌きの場所を中庭に設けたといわれている。石造りとレンガの建物の屋根に鯱をのせた和洋折衷のデザインが特徴である。木骨レンガ造２階建の事務所を中心に木骨石造平屋建の倉庫が左右対称に展開されている。明治 40 年頃の写真に、倉庫の姿とその先の岸壁に並ぶ艀や小舟から物資が荷揚げされる様子が残されている。

旧小樽倉庫（明治 40 年頃）

昭和 58 年（1983）、市が土地・建物を取得し、昭和 60 年（1985）に、小樽市指定歴史的建造物に指定された。現在は、小樽市総合博物館運河館のほか、物販や飲食の店舗として活用されている。

（イ）旧北海製罐倉庫（株）（市指定歴史的建造物）

旧北海製罐倉庫㈱は、運河沿いの東側埋立地に施設群（令和３年（2021）に第３倉庫（以下「旧第３倉庫」という。）を小樽市へ譲渡）を建設した。『小樽市の歴史的建造物』（小樽市教育委員会　平成６年（1994）発行）によると、大正 11 年（1922）から昭和 10 年（1935）にかけて建てられた鉄筋コンクリート造であり、大正時代に建てられた第２倉庫（大正 11 年（1922））と旧第３倉庫（大正 13 年（1923））は、小樽の鉄筋コンクリート造では初期の建物とされていて、当時の埋立地の形状に合

第２倉庫

わせ、外壁が一部曲面となっている。旧第３倉庫は、建築当初から荷物を揚げ降ろしするためのエレベーターや製品を運河へ搬出するためのスパイラルシュートが設置されるなど機能的に設計されている。昭和６年（1931）に竣工した工場棟は、柱と梁の骨組に窓を組み込んだシンプルな外観とし、昭和 10 年（1935）に竣工した事務所棟は、横長の連続窓が近代建築の特徴を表している。

平成 24 年（2012）、４棟の施設群が小樽市指定歴史的建造物に指定された。

第３倉庫

工場棟

事務所棟

（ウ）運河周辺に位置する主な倉庫

運河周辺には、明治 20 年代から昭和 10 年代にかけて建てられた倉庫が建ち並んでいる。木骨石造や木骨レンガ造のほか、大正期には、鉄筋コンクリート造の倉庫が建築されている。

運河周辺に位置する主な倉庫一覧

番号	建造物名称	外観	所在地	所有者	建設年代	構造・階数	建設年代根拠	現在の用途
1	旧右近倉庫		色内3	民間	明治27年（1894）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	倉庫
2	旧広海倉庫		色内3	民間	明治22年（1889）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	倉庫
3	旧増田倉庫		色内3	民間	明治36年（1903）	木骨石 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会 平成6年（1994））	倉庫
4	旧日本郵船株式会社小樽支店輸出倉庫		色内3	公共	明治31年（1898）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	遊具施設
5	旧日本石油㈱倉庫		色内3	公共	大正9年（1920）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	休憩施設

番号	建造物名称	外観	所在地	所有者	建設年代	構造・階数	建設年代根拠	現在の用途
6	旧日本郵船株式会社 小樽支店残荷倉庫		色内3	民間	明治39年 （1906）	石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	倉庫
7	旧渋澤倉庫		色内3	民間	明治25年 （1892）頃	木骨石 1階	古写真等	ライブハウス 飲食店
8	旧北海製罐倉庫㈱ 第2倉庫		色内3	民間	大正11年 （1922）	鉄筋 コンクリート 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	倉庫
9	旧大家倉庫		色内2	民間	明治24年 （1891）	木骨石 1階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会　平成6年（1994））	倉庫
10	旧磯野支店倉庫		色内2	民間	明治39年 （1906）	レンガ 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	飲食店
11	旧小樽倉庫		色内2	公共	明治23年 （1890）～ 明治27年 （1894）	木骨石 1階 木骨レンガ 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会　平成6年（1994））	博物館 物販店 飲食店
12	旧北海製罐倉庫㈱ 第3倉庫		港町4	公共	大正13年 （1924）	鉄筋 コンクリート 4階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	倉庫
13	旧北日本汽船倉庫		港町5	民間	昭和3年 （1928）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	飲食店
14	旧篠田倉庫		港町5	民間	大正14年 （1925）	木骨レンガ 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	飲食店
15	旧小樽倉庫（1番庫・2番庫）		港町5	民間	大正13年 （1924）	鉄筋 コンクリート 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	飲食店
16	旧渋澤倉庫（小樽B号倉庫）		港町5	民間	大正14年 （1925） 以前	鉄筋 コンクリート 2階	古写真等	集会所 駐車場
17	旧渋澤倉庫（小樽C号倉庫）		港町5	民間	昭和16年 （1941）	木 2階	古写真等	飲食店
18	旧浪華倉庫		港町6	民間	大正14年 （1925）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	美術館 （小樽芸術村）
19	旧高橋倉庫		色内1	民間	大正12年 （1923）	木骨石 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	美術館 （小樽芸術村）
20	旧嶋谷倉庫		色内1	民間	明治25年 （1892）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	飲食店

（エ）小樽運河

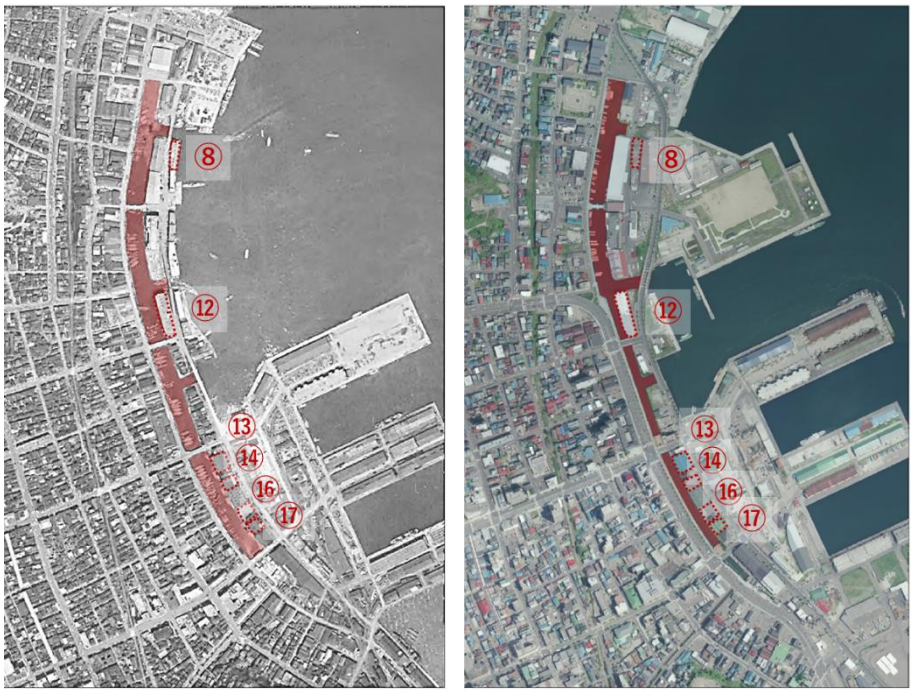
小樽運河は、明治後半に小樽港の貨物取り扱いが増加する中、課題となっていた荷役作業の効率化を図るためにつくられた艀を航行するための水路である。『小樽築港修築史』（大正 13 年（1924））によると、大正３年（1914）に、四つの工区の北側から工事が始まり、大正 12 年（1923）に埋立地と運河が完成した。

小樽運河（大正 15 年）

大正 15 年（1926）に撮影された航空写真には、運河に並ぶ多くの艀と北日本随一の経済都市と称された頃のまちの様子が残されている。

昭和後期に展開された運河論争を経て、運河の幅員を 40 mから 20mに縮小して道路が整備されたが、北側の運河は、現在も当初の幅員が維持されている。また、海側の護岸は、艀の航行のために一部が曲面となっており、埋立地に建つ一部の倉庫に、この形状に合わせて外壁を曲面としたものが見られる。これらが現在も見ることができるほか、海側の護岸工事では、一部に山側の石を補修に使用しているが、多くは当時の石がそのまま積まれている。時間の経過により、表面が植物に覆われている部分が見られるなど、長年の風雪に耐え、景観を保っている様子がうかがえる。昭和 61 年（1986）に道道臨港線の運河に係わる部分が完成し、その後、平成２年（1990）に運河北端部の散策路の整備が完成したことにより、現在の運河の景観が形成された。

海側の護岸と
旧第３倉庫の外壁



小樽運河の航空写真と運河沿い海側の倉庫
左：昭和 36～44 年（1961～1969）　右：平成 20 年（2008）

⑧旧北海製罐倉庫㈱第２倉庫

⑫旧北海製罐倉庫㈱第３倉庫

⑬旧北日本汽船倉庫

⑭旧篠田倉庫

⑯旧渋沢倉庫（Ｂ号倉庫）

⑰旧渋沢倉庫（Ｃ号倉庫）

（オ）旧手宮鉄道施設（重要文化財）

旧手宮鉄道施設

手宮は、明治 15 年（1882）に全線開通した官営幌内鉄道の起点であり、石炭の集積・出荷基地であった。また、その後継である北海道炭礦（たんこう）鉄道の操車場や工場なども建てられ、鉄道を基盤として発展した地域である。

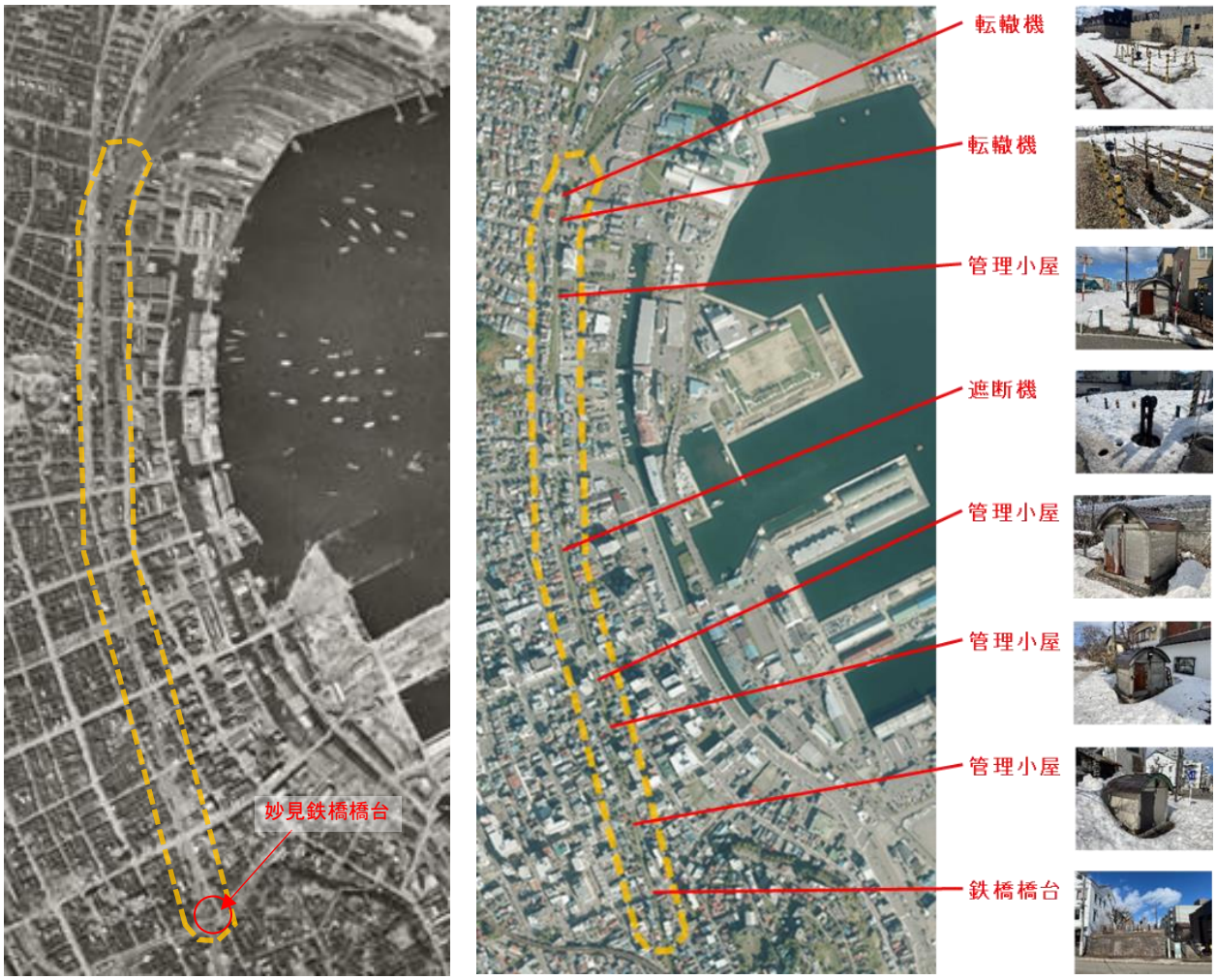
旧手宮鉄道施設は、手宮駅などの跡地（小樽市総合博物館構内）に残る一連の鉄道遺産群である。機関車庫、危険品庫、貯水槽、転車台、および石炭専用の高架桟橋に続く引き込み線の擁壁から構成されており、蒸気機関車が主流であった時代の鉄道システムを現在に伝えている。平成 13 年（2001）、重要文化財に指定された。

機関車庫３号は現存する国内最古の機関車庫であり、明治末期に造られた機関車庫１号（一部復原）及び転車台は、現在も蒸気機関車の運行に活用されている。

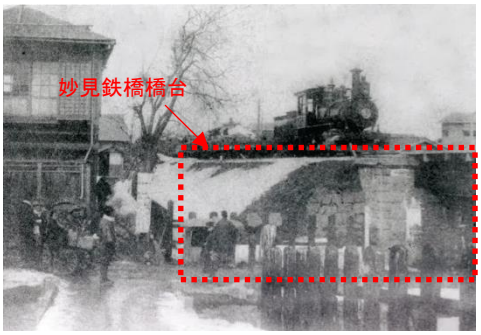
（カ）旧国鉄手宮線

旧国鉄手宮線

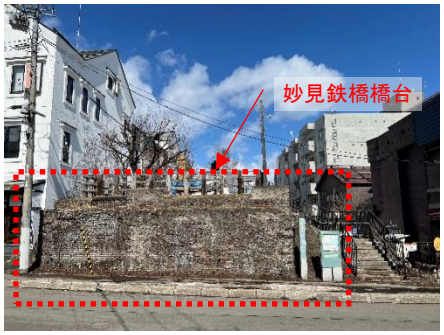
旧国鉄手宮線は、明治 15 年（1882）に開通した官営幌内鉄道のうち、南小樽（当初は「小樽」）から手宮までのおよそ３㎞の区間が、国有化後の明治 42 年（1909）に分離されて手宮線となった。（一部は明治 37 年（1904）に付替え）昭和 37 年（1962）に旅客営業が廃止となり、その後も日本の近代化を支えた空知の石炭を昭和 42 年（1967）まで運び続けたが、昭和 60 年（1985）に廃線となった。廃線後は、小樽市が手宮地区から市内中心部までの区間（延長 1,670m）の用地を取得し、市民の意見を取り入れながら、路盤やレール、転轍機、遮断機、管理小屋などの付属施設を残して散策路の整備が行われ、航空写真から線形が変わっていないことや、明治 30 年代の写真から石とレンガを積み上げた橋台が健在であることが確認できる。現在、市民が通勤、通学、散歩やランニングなどに使用しているほか、様々なまちづくり活動にも利用されており、観光客にも人気が高い場所となっている。



航空写真の比較（点線は旧国鉄手宮線散策路の範囲と現存する工作物）
左：昭和 23（1948）年　右：令和３（2021）年



明治 30 年代　妙見鉄橋橋台



令和７年（2025）　妙見鉄橋橋台

（キ）北海道鉄道開通起点（市記念物）

北海道鉄道開通起点

北海道鉄道開通起点は、北海道初の鉄道である官営幌内鉄道の建設のために、この場所を基点に測量調査が行われたことを記念し、昭和 17 年（1942）に顕彰された場所である。鉄道の「起点」とは、路線の始点のことであり、始点からの距離を測定するための表示（木や石の標柱）が置かれるが、始点は０kmの表示となり、通称「０キロ（マイル）ポイント」と呼ばれている。詳細は明らかではないが、明治 13 年（1880）に手宮に停車場が設置された時点で、鉄道建設や営業に必要不可欠であった「０キロ（マイル）ポイント」が設けられたと考えられている。

昭和 41 年（1966）、顕彰碑は国鉄（当時）の準鉄道記念物に指定され、さらに「０キロ（マイル）ポイント」をはじめ、貯炭場を含めた旧手宮駅構内は、北海道鉄道発祥の地として、市記念物（史跡）に指定された。

（ク）北海道鉄道発祥驛の石碑

北海道鉄道発祥驛の石碑

北海道鉄道発祥驛の石碑は、北海道の鉄道発祥の地として、手宮駅の由来と戦時中に国策として旅客取り扱いが廃止となり、終戦後に復活の請願を続け、昭和 23 年（1948）に復活に至った際の功績を称えて建立された。石碑には、「昭和二十四年十一月十八日　建之」と刻まれている。

（ケ）ＪＲ小樽駅（国の登録有形文化財）

ＪＲ小樽駅

小樽駅は、明治 36 年（1903）に「小樽中央停車場」として開業して以来３代目の駅舎として、昭和９年（1934）に建てられた。国内に現存する数少ない昭和初期の鉄筋コンクリート造の近代駅舎で、急傾斜の高低差を解消するため、本屋背面の２階にプラットホームを設けている。中央の吹き抜けのホールには、創建時にトップライトが設置されていた。外観は、左右を２階建、両端を平屋建とする左右対称のデザインとなっており、昭和７年（1932）に完成した東京の上野駅など、大正後期から昭和初期の鉄道省が設計した主要駅にみられるデザインの特徴を有している。平成 18 年（2006）、国の登録有形文化財に登録された。

③ 活動

（ア）運河周辺の産業の営み（倉庫業・製缶業）

明治 15 年（1882）に全線開通した官営幌内鉄道の存在は、多くの船舶が小樽港への入港を選ぶ要因となった。港と鉄道が結びつき、物流拠点としての役割を担うようになった小樽では、倉庫業が重要な産業の一つとなり、経済の成長に大きく寄与した。平地が少ない小樽では、幕末から海岸の埋め立てが行われ、明治 22 年（1889）までに入船川から手宮桟橋に至る海岸が埋め立てられ、その埋立地には北前船主が荷物を保管するための倉庫が建設された。

小樽倉庫は、明治 23 年（1890）から明治 27 年（1894）にかけて建設された倉庫で、小樽を代表する歴史的建造物の一つである。明治 28 年（1895）には会社設立登記が行われ、当時の農商務大臣である榎本武揚の許可を得て法人倉庫会社となり、近代的な物流形態を持つ北海道初の営業倉庫として運営を開始した。当時の営業倉庫は、単に荷物を保管するだけではなく、倉庫内の商品に対して債権を発行し、それを売買・流通させる金融業のような役割も担っていた。その中でも小樽倉庫は、群を抜く存在感を示していた。現在は、小樽市総合博物館運河館及び飲食及び物販の店舗として使用されているが、小樽倉庫株式会社は、運河の近くに社屋と倉庫を構え、現在も本市の物流機能の一端を担っている。

明治 28 年（1895）
設立認可証

また、明治 20 年代以降に北前船主が建設した木骨石造倉庫も健在であり、地元企業が倉庫として使用している。さらに、この地域では、木骨石造倉庫が倉庫や店舗として活用され、複数の地元企業が倉庫業や運送業を営んでいる。

倉庫が建つ通りを歩くと、外壁に使用された軟石の色や表面のざらつきと斜めに入ったツル目模様が重く暗い印象を与える一方で温かみも感じさせる。また、アーチ型の開口部や腰屋根、５寸勾配の屋根などが、かつての物流拠点の面影を感じさせる。これらの倉庫の情緒あふれる佇まいは、本市を象徴する景観の一つであり、歴史的なまちなみを形成している。

明治後半から大正初期にかけて、小樽港に入港する船が増加し、岸壁は沖合から荷物を運んでくる艀（はしけ）などで渋滞が続いていた。解決策として埠頭式と沖合を埋め立てる運河式が検討され、議論の末に運河式が採用された。四つに分けられた工区では、大正３年（1914）に工事が始まり、北側から順に造成が進められ、大正 12 年（1923）には艀を航行するための運河が完成した。埋立地には、北海製罐倉庫株式会社（現北海製罐株式会社）の施設群（現存の第２倉庫、第３倉庫、工場棟、事務所棟）のほか、木骨石造倉庫などが建設された。

小樽港では艀荷役の効率化が図られ、荷物を保管するための倉庫が次々と建設されたことにより、入港する船舶が飛躍的に増加した。これらの倉庫群は、この地区

の歴史的なまちなみを形成し、その中でも北海製罐株式会社の施設群は、今もなお独特の存在感を示している。

北海製罐株式会社は、大正 10 年（1921）に北海製罐倉庫株式会社として小樽で創業し、食品缶詰用空缶の製造、販売及び倉庫業を開始した。小樽での創業には、石炭を安価に入手でき、漁場のカムチャッカに近く、埋め立てられた倉庫用地があったことが要因としてあげられる。現在は、食品缶のほかに、プラスチック容器や美術缶なども製造している。

美術缶

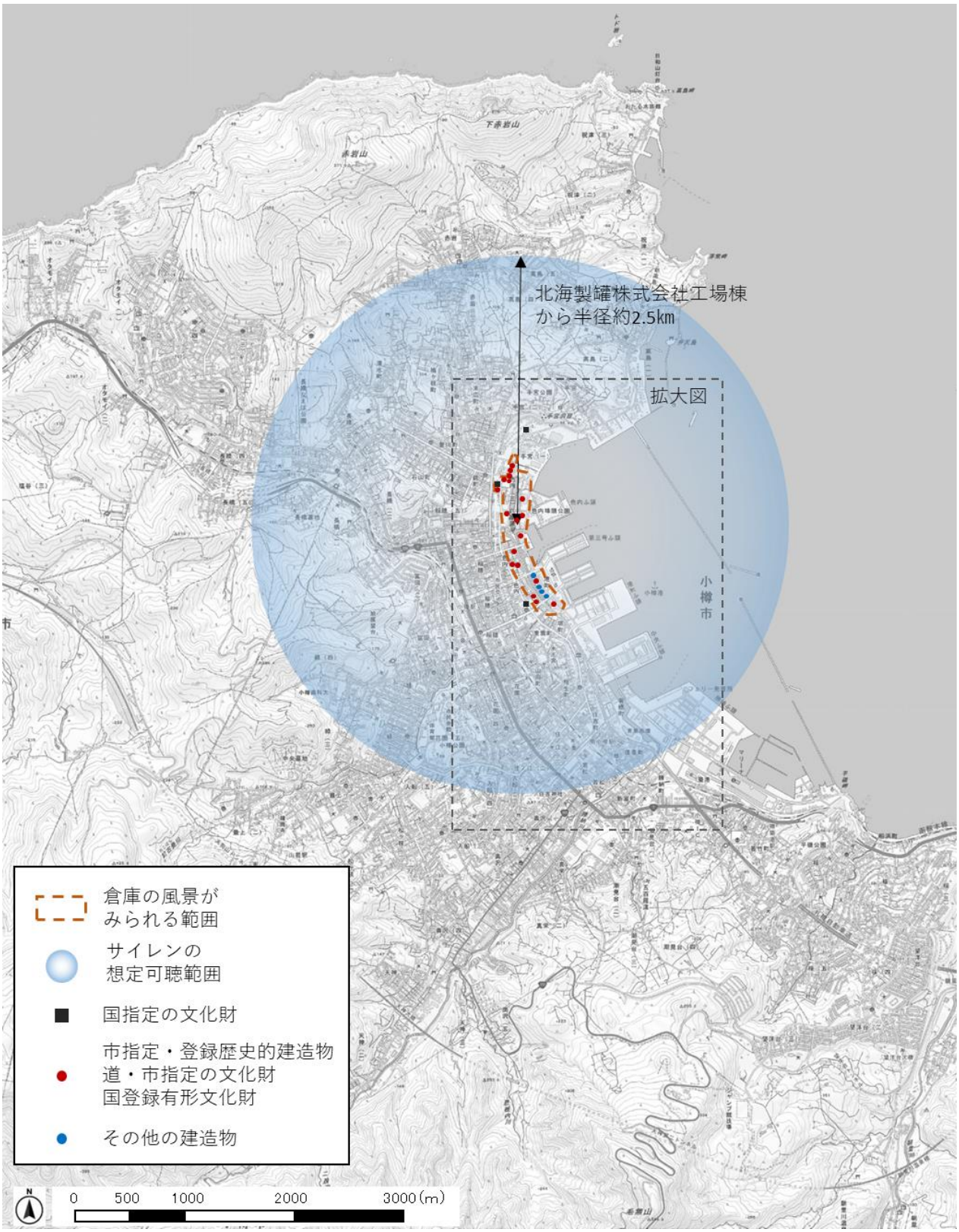
大正 13 年（1924）に竣工した旧第３倉庫は、近年の解体危機を乗り越え、現在は小樽市が所有している。この建物には、竣工当初からエレベーターが設置され、運河側の外壁面には、屋外階段のほか、スパイラルシュートやリフトが設置されるなど、機能性と近代的な設備を備えた倉庫であった。作家の小林多喜二が小説の中で軍艦を思わせると表現したように、大きく、独特の外観が北運河地区のシンボルとして市民に親しまれている。

旧第３倉庫（運河側）

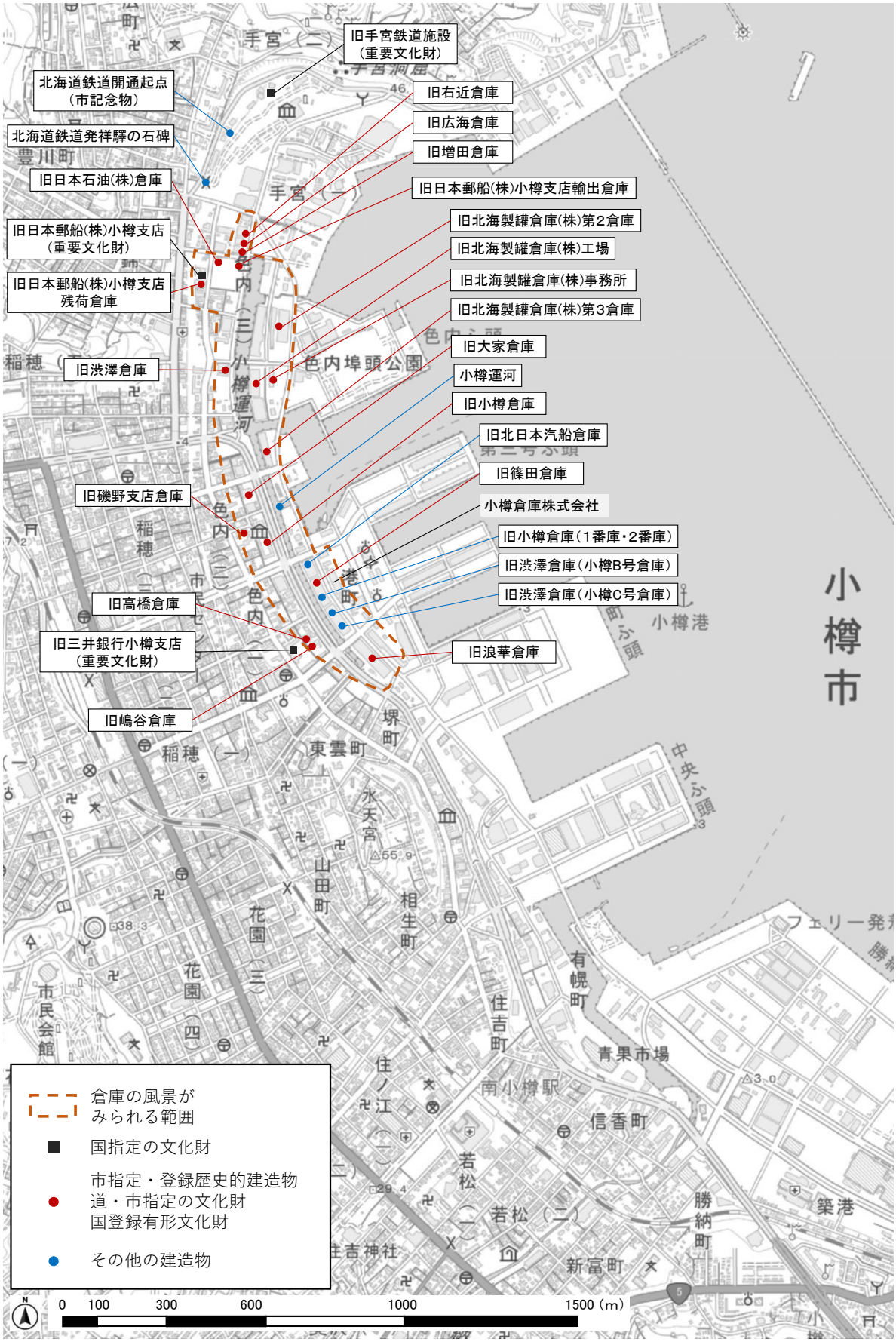
また、昭和６年（1931）に竣工した工場棟の屋上には、完成当初からサイレンが設置され、そのサイレンの音は、社員に就業時間の区切りを伝えてきた。現在では、そのサイレンが朝７時 30 分と８時、昼 12 時と 13 時、夕方５時の１日５回、各 30 秒間鳴らされており、空気を震わせるように響き渡るサイレンの音は、運河沿いの倉庫群、さらには近隣の住宅街などにも届くことから、その日常的に耳にする音は、市民に「北海製罐のポー」と親しみを込めて呼ばれている。早朝の通勤や通学の道を急ぐ人々の耳に届くサイレンの音は、予定より遅れていれば足を速める合図となり、昼には昼食の時間、夕暮れ時には、忙しい一日の終わりを告げ、徐々にまち全体が静けさを帯びていく。一方で、市外から訪れる人々は、不意に耳にするサイレンの音に驚きの表情を見せるが、運河沿いに佇む倉庫の風景とサイレンの音が混じり合うにつれ、懐かしさなどの感情が沸き上がってくる。

北海製罐倉庫㈱工場棟（運河側）

物流の一大拠点であった小樽において、運河はその中心地であり、市民にとって特別な存在である。また、身近な存在でもあり、多くの絵画や写真にその姿が残されるなど、その水辺に親しんできた。運河周辺では、変わらぬ産業の営みと情緒あふれる独特の景観によって当時の息遣いを感じることができる。



北海製罐株式会社のサイレンが聞こえる想定の範囲



運河周辺の主な倉庫の位置図

（イ）鉄道にまつわるまちづくり

明治時代の幕開けとともに、北海道の近代化が進められた。明治初頭、内陸部の幌内（現三笠市）で発見されたエネルギー資源である石炭を輸送するため、開拓使によって北海道初の鉄道整備が進められた。着工からわずか 11 か月後の明治 13 年（1880）には、小樽港に近い手宮を起点に札幌までの区間が開通し、その２年後には幌内までの全線が開通した。

この官営幌内鉄道の開業を皮切りに、道内では鉄道網の拡大と産炭地の開発が進められた。明治 22 年（1889）に資本力を有する北海道炭礦鉄道に譲渡されると、道央に位置する空知地方の炭鉱開発が進み、石炭の輸送量が増大した。これにより、石炭の集積地及び積み出し港としての手宮の役割は大きくなり、石炭及び鉄道関連の施設が建設された。

当時の手宮地区の中心は手宮構内であり、官営幌内鉄道の工場や石炭の積み出し施設が完成すると、手宮地区には港湾、運輸、石炭などに関連する事業所が集まり、鉄道や港湾に関係する職業の人々が多く暮らすようになった。また、鉄道工場の下請けから始まり、販路を広げていった鉄工場が多く活動していたこともあり、手宮地区は「鉄道のまち」として発展した。

手宮高架桟橋

また、北海道の近代化を進める上で主要都市を結ぶ鉄道網の構築は不可欠であったため、北海道庁は函館から小樽を結ぶ鉄道計画を示し、1901（明治 34）年に、北海道鉄道株式会社が函館-小樽間の建設工事を開始した。明治 36 年（1903）に小樽中央駅（現小樽駅、現在の駅舎は三代目）が完成し、蘭島－小樽間が部分開通した。明治 37 年（1904）には函館までの区間が全通し、その翌年には二つの鉄道を結ぶ連絡線も開通した。その後、明治 39 年（1906）に北海道炭礦鉄道の路線が国有化され、明治 42 年（1909）には手宮線（手宮－小樽（現南小樽）間）、函館本線、幌内線に区分された。

北海道鉄道開通起点標

手宮の鉄道施設が実用的機能を発揮したのは大正期までであり、昭和２年（1927）に小樽築港で新たな鉄道基地が整備されると、手宮はその分庫として扱われ、石炭輸送の役割は後退した。そのような中、官営幌内鉄道の起点として手宮で行われた測量調査を記念するとともに、北海道鉄道発祥の地として顕彰するため、昭和 17 年（1942）に北海道鉄道開通起点標が設けられた。また、戦時中に国策で手宮線の旅客営業が休止された際に、地元有志が「手宮駅旅客取扱復活期成同盟会」を結成し、国へ手宮線復活の請願を続けた。その熱意が実を結び、旅客営業が再開されると、昭和 24 年（1949）、その功績をたたえるため、北海道鉄道発祥驛の石碑が設けられ

た。これらの石碑を目にした人々には、鉄道の歴史や先人の偉業を深く実感させる。

昭和 38 年 北海道鉄道記念館開館の様子

戦後の復興期、国策として進められた石炭の増産により、小樽築港や手宮の石炭桟橋などは一時活況を呈したが、昭和 30 年代に入り、国のエネルギー政策が石油に転換されると、これらの施設の役割は次第に失われていった。一方で、鉄道施設や鉄道車両を保存・展示することにより、その価値を伝えていく動きが始まった。昭和 37 年（1962）、当時の国鉄は、日本の鉄道開業 90 周年に合わせ、手宮駅構内の機関車庫を利用した北海道鉄道記念館を開館した。実質的な開館日となった翌年の写真には、石炭輸送のため、明治 18 年（1885）にアメリカから輸入された蒸気機関車「しづか号」とその公開に集まった多くの人々の姿が見られ、市民の鉄道に対する思いや地域とのつながりが伺える。

昭和 49 年 市民ボランティアによる清掃の様子

当時を知る者に聞き取りをしたところ、昭和 49 年には、展示車両や構内の維持管理の一部が市民ボランティアによって行われており、黒色のコールタールを染み込ませ、油雑巾と呼ばれた布で鉄道車両を丹念に磨きあげ、汗を流しながら周囲の雑草を刈り取る市民の姿が見られたとのことであった。

鉄道車両の維持管理

また、同じころ、10 月 14 日の「鉄道の日」に関連した事業の一環として、小樽築港にあった保線区の作業員の間で労働歌として歌われた「保線搗き固め音頭」が構内で披露されてきた。線路保守が機械化される前に人力で行われていた保線作業は、単調で過酷な作業の繰り返しであったため、作業員全員が呼吸を合わせ、声を掛け合って作業することが重要であった。この労働歌は、現在も「保線搗き固め音頭保存会」によって継承されており、披露される際には、制帽、法被、ゲートル、地下足袋という明治時代の衣装を身にまとい、１列に４名が並んで抑揚のある音頭で調子を合わせ、力強くビーターを振り下して行われる。その姿を見ると当時の重労働であった作業の様子が目に浮かび、先人の功績に思いを馳せることができる。

保線搗き固め音頭の披露

北海道の近代化が始まり 100 周年を迎えた昭和 43 年（1968 年）には、北海道の大地を初めて走った蒸気機関車「義経号」が保存先の兵庫県神戸市の鷹取工場から故郷である小樽に運ばれた。構内では煙を吐きながら自走し、「しづか号」と対面する姿は、走行していた当時の様

義経号としづか号の対面の様子

子を彷彿とさせ、集まった人々から大きな喝采を浴びた。「義経号」は、その後も小樽を訪れ、二度目は、北海道鉄道開通 100 周年に当たる昭和 55 年（1980）、地元青年会議所の発案で実現し、北海道鉄道開通 100 年記念行事協賛会から小樽市へ北海道鉄道記念館整備資金が寄付された。三度目は、平成 14 年（2002）に小樽市市制施行 80 周年及び旧手宮鉄道施設が重要文化財に指定されたことを記念して実施され、その対面を目にした市民に、鉄道発祥地であることを実感させた。

かつて手宮駅や石炭の積み出し施設があった場所には、現在、小樽市総合博物館本館（建設当初は小樽交通記念館）が建っている。その構内及び館内には、明治から大正時代にかけて建設された機関車庫三号及び一号、転車台、危険品庫、貯水槽のほか、50 両もの鉄道車両、蒸気機関車の関係工具などの貴重な資料が保存・展示されている。また、敷地付近には石炭の積み出し施設の一部が残り、石炭輸送の象徴であった高架桟橋に至る引き込み線のレンガ積みの擁壁と海面から顔を覗かせている石炭ローダー（石炭の積み込み用の施設）の基礎が石炭と小樽の関係を雄弁に物語っている。

石炭ローダー基礎

平成８年（1996）に小樽交通記念館が開館した際には、北海道鉄道発祥地の歴史を受け継いでいくため、蒸気機関車アイアンホース号が構内を走り始めた。現在は、小樽市総合博物館本館がこれらの役割を引き継ぎ、構内の機関車庫と転車台が蒸気機関車アイアンホース号の運行に活用されている。煙を吐きながら構内を走行するアイアンホース号に乗車できるほか、転車台による方向転換や客車との連結・切り離しの音が響く中、その様子を間近に見ることができる。この車両の運行には、市民ボランティアが関わっており、大きな補修の際には寄付金が活用されている。全国的にも数少ない貴重な動態展示は、市民をはじめ、多くの人々に支えられている。

旧手宮鉄道施設の動態保存

小樽市総合博物館では、平成 19 年度（2007）からボランティア制度を導入し、その活動の一つとして、鉄道車両の錆落としや塗装による補修、展示車両の冬囲い、構内の除草や清掃などがボランティアによって行われている。これらは、昭和 40 年代頃から行われてきた市民による鉄道車両や構内の維持管理を受け継ぐものである。また、平成 20 年（2008）に設立された「NPO 法人 北海道鉄道文化保存会」は、設立前年から展示車両の補修に関わり、元国鉄機関士が車両の補修を行い、設立後は、市内の機械工場や塗装会社に勤めていた人々がそのキャリアを生かし、ボランティアとして参加している。

鉄道車両の補修作業

手宮線は、昭和 37 年（1962）に旅客営業が廃止となり、昭和 60 年（1985）には手宮－南小樽間が廃止され、開業から 105 年の歴史に幕を閉じた。しかし、同年には市民を中心とする「旧国鉄手宮線打合せ会議」が発足し、跡地利用の検討が始まった。平成８年（1996）には、旧国鉄手宮線の線路を活用した路面電車の走行実現を目指す「軌道輸送系」と、散策路を基本として早期利用を実現する「オープンスペース系」の２案が提案され、実現に向けての具体的な検討が進められた。

市は住民アンケートの結果などを踏まえ、平成 13 年（2001）から平成 28 年（2016）にかけて、段階的に用地を取得し、既存の鉄道施設を保全しながら、線路の残る散策路として整備を行った。北海道初の鉄道に対する市民の思いが形となり、かつて人々や物資を運んだ鉄路には、通勤や通学、散歩などに利用する市民の姿が日常の風景として見られるようになった。また、その歴史や情緒を体感するために多くの観光客が足を運び、郷愁に浸っている。

旧国鉄手宮線の花壇整備

散策路となった旧国鉄手宮線では、地域住民やボランティア団体が花壇の整備や清掃を行い、色鮮やかな花々で訪れる人々をもてなしている。また、イベント会場としても活用され、冬のイベント「小樽雪あかりの路」では、市民を中心とした多くのボランティアがロウソクに火を灯し、淡い灯りで幻想的な風景を創り出し、訪れる人々に昼とは異なる表情を見せている。また、夏のイベント「小樽がらす市」では、線路沿いに並ぶ風鈴の涼やかな音色が訪れた人々を清々しい気持ちにさせる。

雪あかりの路
旧国鉄手宮線会場

小樽がらす市
旧国鉄手宮線会場

さらに、「NPO 法人北海道鉄道文化保存会」は、この鉄道が果たした功績や歴史を後世に伝えるため、年に数回、かつて鉄道車両が走行したレールを使い、足漕ぎ軌道自転車（トロッコ）を運行する「レールカーニバル in おたる」を開催し、鉄道の歴史や魅力を伝えながら多くの人々を楽しませている。乗車する人々やその様子を見る人々は、レールの上を走行する姿に当時の鉄道車両の姿を重ね、鉄道発祥地の歴史に触れることとなる。

レールカーニバル in おたる

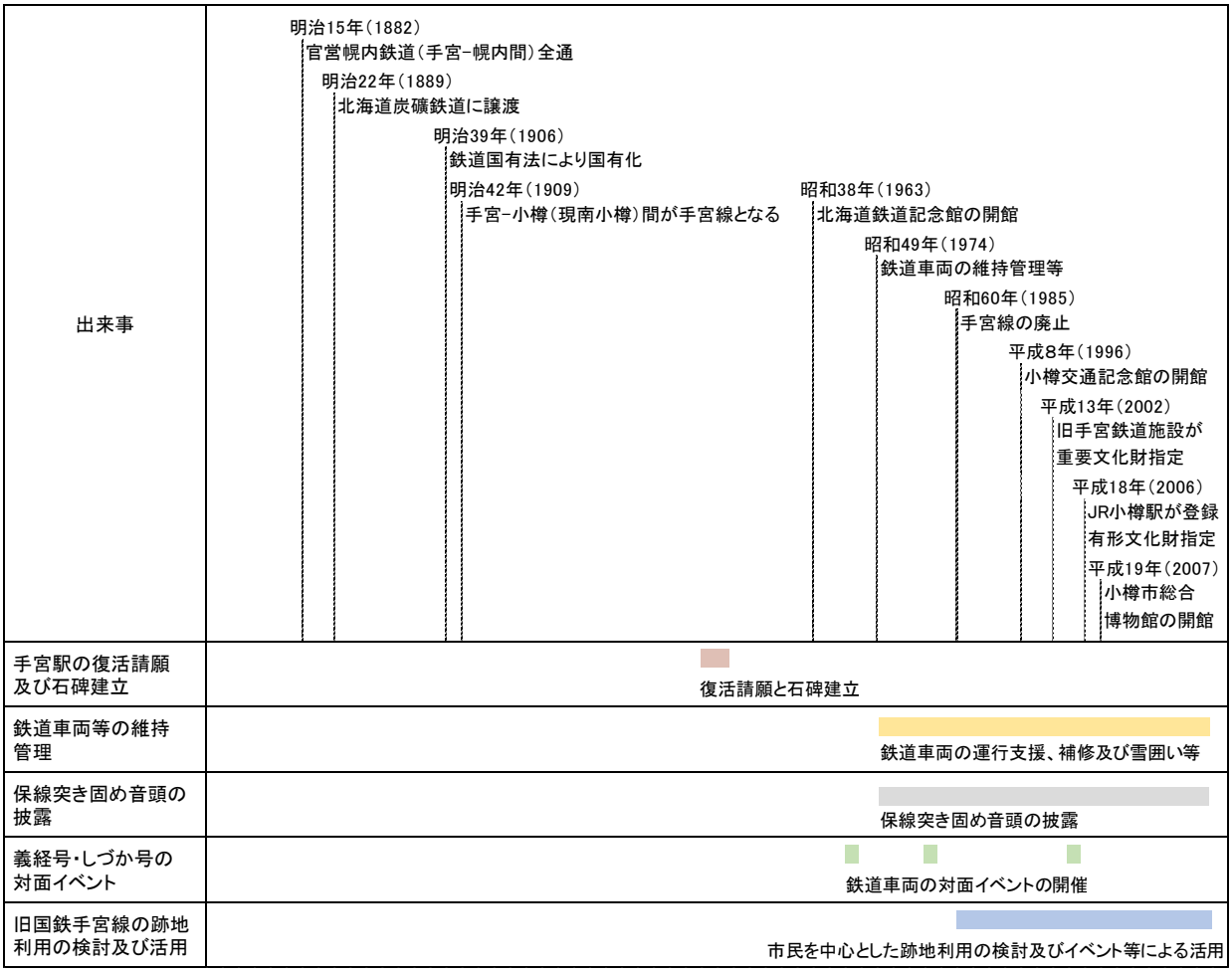
また、JR 小樽駅では、平成 11 年（1999）に駅舎の高窓を塞いでいた大型広告の撤去などを行い、地元ガラス製造業者の寄付により、合計 333 個のランプが設置された。そのランプによる光の演出は乗降客に小樽の玄関口としてふさわしい潤いとロマンを与え、外部に漏れる光は、夜間に訪れる人々を柔らかな光で迎え、小樽らしさを感じさせる。同時期に、明治から昭和 40 年（1965）頃まで列車到着の予報としてホームで打ち鳴らされた「むかい鐘」が駅舎正面入口前に移設され、その鐘の音はかつての出迎え人や行商人の活気に満ちあふれた往時への思いを巡らせる。

北海道鉄道発祥の地として、これらの鉄道遺産は市民にとって深い関わりを持ち、大切に継承されてきた。本来の役割を終えた今でもその存在は身近にあり、生きた遺産として日常生活の中に溶け込んでいる。

ランプの灯りにより
演出された JR 小樽駅

むかい鐘

鉄道にまつわるまちづくり活動年表



鉄道にまつわるまちづくり活動がみられる範囲

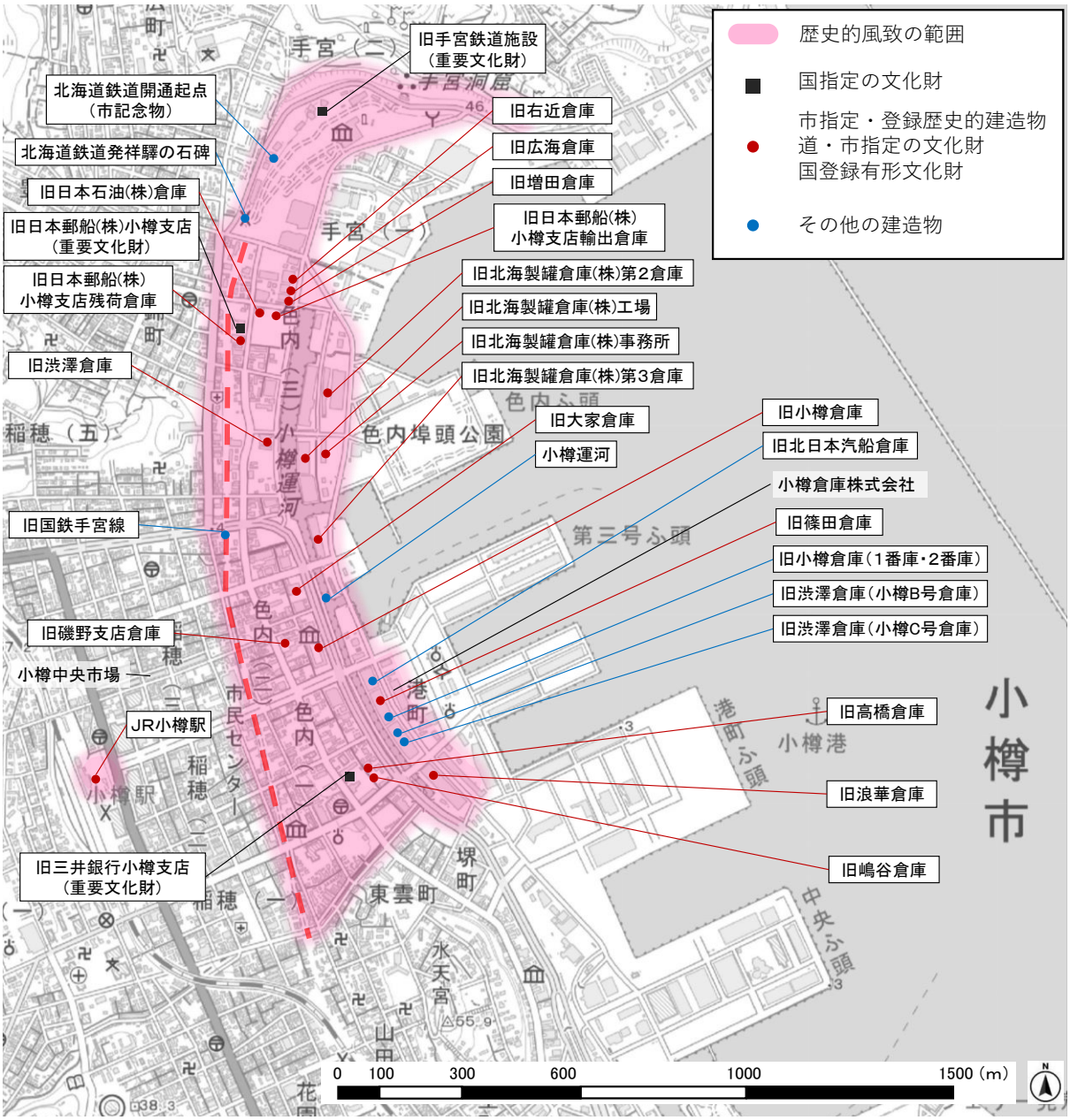
④ まとめ

本市は、明治初期に港と鉄道の整備が進み、幌内から運ばれる石炭の積み出し港として日本の近代化に貢献した。また、北海道開拓の物流拠点として道内各地に物資を供給し、入植者たちの生活を支えるとともに、本州に農産物などを提供する役割を果たした。その結果、急速に発展し、大正時代には「北日本随一の経済都市」と称されるようになった。

現在も運河周辺には、木骨石造倉庫や鉄筋コンクリート造の大規模倉庫などが建ち並んでいる。多くは物販店や飲食店などに活用され、新たな価値が見出されているが、依然として情緒ある景観を創出している。港や運河の周辺では、倉庫業や製缶業の営みが続き、水辺に調和した歴史的建造物が文化的価値を維持する役割も果たしている。このような歴史的景観は、地域の歴史と産業の結びつきを象徴するものとして、市民に親しまれている。

鉄道遺産については、北海道鉄道発祥の地としての誇りを持ち、大切に継承されてきた。かつて手宮駅や貯炭施設のあった場所に建つ小樽市総合博物館本館では、重要文化財である旧手宮鉄道施設の機関車庫と転車台が蒸気機関車の動態保存のために使用されている。また、鉄道車両は、市民ボランティアによって補修や維持管理が行われている。昭和 60 年（1985 年）に廃止された手宮線については、市民が中心となって跡地利用の検討が行われ、その結果、線路や付属施設が残る散策路として生まれ変わった。

本市の文化遺産は、市民の日常生活に溶け込み、イベント等にも活用され、現代の生活と融合している。また、歴史ある産業の営み、歴史的建造物や鉄道遺産など、様々な要素が組み合わさることで、地域のアイデンティティが形成されている。さらに、運河周辺に残る物流拠点の面影は、かつての繁栄を今に伝えており、市民生活に根付いた文化とともに、独自の歴史的風致を形成している。



港と鉄道を背景としたまちづくりにみる歴史的風致の範囲

【コラム】勝納川流域の産業

勝納川の豊富な水源は、さまざまな面で活用され小樽の人々の生活を支えた。勝納川の水源を最初に産業に利用したのが精米業者たちであった。明治10年代半ば頃からは、勝納川沿いの中流地域、現在の奥沢、真栄地区で精米業が行われ始めた。当時の奥沢周辺は、市街地に隣接する畑作地域で、勝納川の細長い河岸段丘が続く比較的平坦な土地が多い場所であり、精米工場建設に適していた。この地区の代表的な精米工場として、共成株式会社が挙げられる。明治24年（1891）に、勝納川と朝里村（現朝里地区）を流れる朝里川に水車を設け、操業を開始している。共成株式会社の事務所（現小樽オルゴール堂）は入船地区に現存している。

勝納川流域では、醸造業も発展した。明治16年（1883）からは一時期北海道を代表する醸造所であった石橋醤油醸造所が、明治32年（1899）からは同醸造所から独立した野口酒造（後に北の誉酒造）が奥沢に開業した。いずれも伏流水の水質の良さと安定した水量が大きな魅力となった。醸造業で財を成した野口家は、勝納川の対岸にも工場を設けた。

野口家は、大正11年（1922）に和館と洋館からなる居宅「和光荘」を建築した。改修を施し、最先端のデザインであったアール・デコの幾何学文様、ステンドグラスを配したダイニング、噴水のあるリビングなど、近代の邸宅として全国的に注目される建物である。

和光荘

昭和初期には、北の誉酒造周辺だけでも 20 を超える醸造所や関連の工場が建ち並んだ。石橋醤油醸造所の工場の一部は後に北の誉酒造が使用し、勝納川河畔に現存している。

加えて、明治大正期には、製紙業、ゴム製品製造業が興り、勝納川沿いに大手企業が工場を構えた。この地域では、現在もゴム長靴の製造が行われるなど、産業の営みが続いている。

【コラム】鉄道車両の保存・展示

「鉄道の町」であった小樽を象徴するものが、手宮地区に所在する小樽市総合博物館（本館）構内に保存・展示されているおよそ 50 両の鉄道車両である。保存車両は蒸気機関車、ディーゼル機関車、気動車、客車、貨車、除雪車など様々な種類がある。北海道の近代化に大きな働きをしてきた鉄道の歩みを伝える貴重な空間となっている。

中でも、北海道で初めての鉄道「官営幌内鉄道」で使用された「しづか号」（1884 年：米国製造）は、国内他地域とは異なり、米国人技師の指導によってつくられた北海道の鉄道の特異性を伝える資料である。

構内の重要文化財「旧手宮鉄道施設」の一つである機関車庫三号に保存されている大勝（たいしょう）号は、国産二号機（現存車両では最古）である。これは、現在総合博物館の敷地となっている、北海道炭礦（たんこう）鉄道手宮工場で製造された車両で、製造された場所で保存している。この国産車両は、日本の近代史の中でも初期の重工業製品を生産する技術が誕生したことを伝える貴重な資料と言える。

これらの貴重な車両群を単に保存するだけではなく、動態保存している蒸気機関車（しづか号と同じ米国 PORTER 社製）は重要文化財の機関車庫や転車台を活用し、、かつて蒸気機関車が主流であった、日本の鉄道システムの一端を体験できる施設として、おおくの市民、観光客に親しまれている。

これら大型の鉄道車両の保存には、多くの市民ボランティアによって支えられている点も特筆すべきである。

蒸気機関車　しづか号

蒸気機関車　大勝号

蒸気機関車　アイアンホース号

ディーゼル機関車 DD14

特急専用気動車　キハ 82

蒸気機関車 C12

（２）運河保存運動をはじめとするまちづくりにみる歴史的風致

① 概要

小樽港は、明治から大正期を通じて係船岸壁を持たなかったことから、船舶からの貨物の積み下ろしは艀（はしけ）によって行われていた。多くの船舶が集まる小樽港では、港湾荷役の効率化が求められ、沖合を埋め立てて運河がつくられた。

大正 12 年（1923）に運河が完成し、埋立地には製缶業の工場や大規模倉庫、木骨石造倉庫などが建設された。物流拠点としてさらに発展した小樽は、大正時代には「北日本随一の経済都市」と称されるようになり、その当時に建設された建造物は、今もなお情緒あるまちなみを形成している。

第二次世界大戦中、他都市に比べ空襲などの戦災が少なかった小樽港は、戦後の復興の中で国策として石炭の増産が行われたことで、その取扱量が増加し、小樽築港や手宮の石炭桟橋などは一時活況を呈した。しかし、昭和 30 年代に入ると国のエネルギー政策が石油に転換したことや、港湾貨物の取り扱いが太平洋側にシフトするなどの変遷を経て、港勢は次第に減衰した。昭和 30 年代後半には、大手の石炭、貿易、船舶関係の企業が撤退し、多数の商社が札幌に移転すると、それに伴って都市銀行も相次いで撤退し、港と石炭輸送で栄えた小樽の経済は衰退の道をたどり、「斜陽の街」と称されるようになった。

交通渋滞の解消などを目的とし、運河を埋め立てて道路を整備する都市計画が昭和 41 年（1966）に決定し、翌年には道道臨港線の工事が始まった。昭和 47 年（1972）の『北海タイムス』では、有幌（ありほろ）地区の倉庫群約 30 棟が取り壊し直前であることが報じられた。

保存派によるチラシ

工事が進行する中で、有幌地区の石造倉庫群が解体されるのを目の当たりにした市民は、先人たちの貴重な遺産である運河や石造倉庫群を守ろうと立ち上がり、昭和 48 年（1973 年）に「小樽運河を守る会」発起人会が結成された。当初 24 人の有志が中核メンバーとなって始まった運河保存運動は、その後、約 10 年にわたり、運河と石造倉庫群を保存し、活用するか否かを争点として展開されていった。

やがて運動の反響は多くの市民や道内、道外の人々にも広がりを見せ、北海道はもとより中央省庁をも動かし、国会の場での議論にまで発展していった。この間、運動そのものの姿は、紆余曲折を経ながらも、市民にとって、歴史的景観の持つ価値とは何か、それらを保存する意味とは何かを問いかける得がたい契機となった。

その結果の一つとして挙げられるのは、全国的にもまだ一般的ではなかった「まちづくり」という言葉の概念を市民に浸透させたことである。これは、運河保存運動から始まったまちづくりが、かつて衰退のシンボルとも言われた運河などの古いものをめぐり、市民や行政などの様々な主体が関わり、議論し、対立し、あるいは協力しながら、結果的には運河やその周辺の歴史的景観を保存し、活用するという

目的に向かって力を合わせて働いた協働という成果をもたらしたといえる。運河保存運動以降、市は観光都市としての歩みを進め、歴史を生かしたまちづくりの推進に舵を切ることとなった。

このようにして新たな価値を得て保存された運河や周辺の歴史的建造物は、かつての小樽の最盛期を物語る文化遺産であり、この運動の底流をなす協働の文化は、小樽の文化遺産の精神的な基盤を形成している。運河保存運動を経て、多くのまちづくり団体などが設立され、歴史的建造物の利活用が繰り返し行われている。また、現在では、運河周辺をはじめ、市内の各地域においても歴史文化を守り育てる様々な活動が展開されている。

昭和初期（完成直後）の運河

昭和 40 年代の運河

現在の運河

② 建造物等

（ア）小樽運河

P. 91、P. 92 参照

（イ）旧国鉄手宮線

P. 95 参照

（ウ）旧小樽倉庫（市指定歴史的建造物）

P. 91 参照

（エ）旧北海製罐倉庫（株）第３倉庫（市指定歴史的建造物）

P. 92 参照

（オ）旧日本郵船株式会社小樽支店（重要文化財）

旧日本郵船株式会社小樽支店

日本郵船株式会社小樽支店の２代目の社屋として、佐立（さたち）七次郎（しちじろう）の設計により、明治 39 年（1906）に建てられた。石造２階建、近世復興様式が採用されている。昭和 29 年（1954）まで小樽支店として営業していたが、事務所移転に伴い、昭和 30 年（1955）に市が譲り受け、翌年には小樽市博物館に活用されている。昭和 44 年（1969）、重要文化財に指定された。施設の老朽化に伴い、昭和 59 年（1984）から保存修理工事が行われ、その際に小樽市博物館が移転し、その後は見学施設として一般公開されてきた。令和２年（2020）から耐震性の向上を含む保存修理工事が行われ、令和７年（2025）に公開を再開している。

（カ）旧安田銀行小樽支店（市指定歴史的建造物）

旧安田銀行小樽支店

旧安田銀行小樽支店は、『日本近代建築総覧』（日本建築学会　平成６年（1994）発行）によると、昭和５年（1930）に鉄筋コンクリート造２階建で建てられた。安田銀行営繕課の設計であり、正面外観の中央に円柱を建て、その柱間に窓を設け、両脇に壁を設けた昭和初期の典型的な銀行建築である。平成 13 年（2001）の道路拡幅事業の際に、解体せずに建物が斜め後方に曳き家され、同時に外観も修復されている。平成２年（1990）に小樽市指定歴史的建造物に指定された。

昭和 45 年（1970）に銀行としての役割を終え、その後、新聞社として使用され、平成 18 年（2006）からは飲食店として活用されていた。コロナ禍により閉店となっていたが、現在、再び飲食店としての活用が計画されている。

（キ）旧小樽商工会議所（市指定歴史的建造物）

旧小樽商工会議所

旧小樽商工会議所は、土肥秀二（どひひでじ）の設計であり、『日本近代建築総覧』（日本建築学会　平成６年（1994）発行）によると、昭和８年（1933）に鉄筋コンクリート造３階建で建てられた。外壁に石川県産千歳石で彫刻が施され、正面玄関には、土佐産の大理石が用いられている。昭和 60 年（1985）に小樽市指定歴史的建造物に指定された。

平成 21 年（2009）に小樽商工会議所が移転して活用が待たれていたが、耐震補強などの改修を施すとともに新築棟が建設され、令和４年（2022）からホテルとして活用されている。

（ク）旧三井銀行小樽支店（重要文化財）

旧三井銀行小樽支店

旧三井銀行小樽支店は、曾禰達蔵（そねたつぞう）が主宰を務めた曾禰中條（そねちゅうじょう）建築事務所の設計により、昭和２年（1927）に建てられた。鉄骨鉄筋コンクリート造２階建、花崗岩を積み上げ石造を模した外壁とし、ルネサンス風のデザインを取り入れた装飾、鉄骨で支えられた営業室の大空間と吹き抜けの回廊など、翌年に完成した本店（東京）とよく似たスタイルで建てられており、大金庫室や地下の貸し金庫室など、銀行営業当時の雰囲気をよく残している。令和４年（2022）に重要文化財に指定された。

平成 28 年（2016）から美術館「小樽芸術村」の施設の一つとして一般公開されている。

（ケ）旧北海道拓殖銀行小樽支店（市指定歴史的建造物）

旧北海道拓殖銀行小樽支店

旧北海道拓殖銀行小樽支店は、大蔵省（当時）に属した矢橋賢吉（やばしけんきち）らの設計であり、『日本近代建築総覧』（日本建築学会　平成６年（1994）発行）によると、大正 12 年に鉄筋コンクリート造４階建で建てられた。すっきりとした外観にまとめ、室内のホールを２階までの吹き抜けとし、カウンターに沿って建つ円柱が印象的である。平成３年（1991）に小樽市指定歴史的建造物に指定された。

ホテルや美術館での活用を経て、平成 28 年（2016）から「小樽芸術村」を構成する施設の一つとして活用されている。

（コ）旧北海道銀行本店（市指定歴史的建造物）

旧北海道銀行本店

旧北海道銀行本店は、『日本近代建築総覧』（日本建築学会　平成６年（1994）発行）によると、明治 45 年（1912）の建物とされている。日本銀行旧小樽支店の設計に携わった長野宇平治（ながのうへいじ）の設計であり、石造２階建で外観はルネサンス様式が採用され、アーチを描く窓や玄関周りの石積みが特徴といえる。昭和 60 年（1985）に小樽市指定歴史的建造物に指定された。昭和 40 年（1965）に北海道中央バスの本社となり、平成８年（1996）からワイン＆カフェレストランとして活用されている。

（サ）旧三井物産小樽支店（市指定歴史的建造物）

旧三井物産小樽支店

旧三井物産小樽支店は、松井貴太郎（横河工務所）の設計により、事務所ビルとして建てられた。『日本近代建築総覧』（日本建築学会　平成６年（1994）発行）によると、昭和 12 年（1937）に鉄筋コンクリート造５階建で建てられた。黒御影石が貼られた玄関や１階の壁と２階以上の白色系の壁が鮮やかなコントラストを見せている。内部に２基のエレベーターが設置され、階段室やトイレなどを各階の中央に集約配置している。平成３年（1991）に小樽市指定歴史的建造物に指定された。

（シ）旧小樽地方貯金局

旧小樽地方貯金局

旧小樽地方貯金局は、郵政建築部設計課長の小坂秀雄（こさかひでお）の設計により、昭和 27 年（1952）に建てられ、竣工して間もない頃の写真が残されている。鉄筋コンクリート造３階建、外観は四角形を基調とし、合理主義に基づいて統一されている。

昭和 51 年（1976）から市の分庁舎として活用され、昭和 53 年（1978）に文学館、昭和 54 年（1979）に美術館が開館している。

（ス）旧三菱銀行小樽支店（市指定歴史的建造物）

旧三菱銀行小樽支店

旧三菱銀行小樽支店は、『日本近代建築総覧』（日本建築学会　平成６年(1994)発行）によると、大正11年(1922)の建築とされている。１階に銀行、２階に鉱業、３階に商事会社が入る鉄筋コンクリート造４階建の三菱系のビルとして建てられた。建築当初は、外壁にレンガ色のタイルが張られていたが昭和 12 年（1937）に現在の色調に変更されている。平成２年（1990）に小樽市指定歴史的建造物に指定された。

平成 18 年（2006）から「北海道中央バス小樽運河ターミナル」として活用されている。

（セ）旧第一銀行小樽支店（市指定歴史的建造物）

旧第一銀行小樽支店

旧第一銀行小樽支店は、中村達太郎（なかむらたつたろう）と田辺淳吉（たなべじゅんきち）による中村田辺建築事務所の設計であり、『日本近代建築総覧』（日本建築学会　平成６年（1994）発行）によると、大正 13 年（1924）に鉄骨鉄筋コンクリート造４階建で建てられた。創建時には、道路側２面に３階通しの円柱を建て、壁面に彫刻が施されていた。平成３年（1991）に小樽市指定歴史的建造物に指定された。

小樽支店の廃止に伴い、昭和 43 年（1968）に市が譲り受け、おたる潮まつりの事務所として使用された後、昭和 46 年（1971）から紳士服の製造工場として活用されている。

（ソ）日本銀行旧小樽支店（市指定有形文化財）

日本銀行旧小樽支店

日本銀行旧小樽支店は、日本近代建築の先駆者である辰野金吾（たつのきんご）の指導のもと、長野宇平治（ながのうへいじ）、岡田信一郎の設計により、明治 45 年（1912）にレンガ造２階建で建てられた。外壁にモルタルを塗り、石造のような外観としており、尖塔を四隅に配し、海側には望楼を設けている。鉄骨構造の小屋組やモルタルなどの当時の最先端材料と技術を集結させた旧色内銀行街を代表する建造物である。平成 14 年（2002）に小樽市指定有形文化財に指定された。平成 15 年（2003）から「日本銀行旧小樽支店金融資料館」として活用されている。

（タ）旧木村倉庫（市指定歴史的建造物）

旧木村倉庫は、ニシン漁場の倉庫として建てられた。『小樽市の歴史的建造物』（小樽市教育委員会　平成６年（1994））によると、明治 24 年（1891）に木骨石造２階建で建てられた。

旧木村倉庫

内部は中央廊下を挟んで二つに分けられ、その廊下には、港から引き込まれたトロッコのレールが残されている。平成３年（1991）、小樽市指定歴史的建造物に指定された。

昭和 58 年（1983）に、倉庫の内部空間を生かしたガラス製品の販売店舗として活用されたことが、本市の観光拠点としての礎を築き、その後の歴史的建造物の活用を促進させた。

（チ）歴史的建造物の利活用とまちづくり活動の範囲に位置する歴史的建造物

色内（いろない）、港町、堺町、入船、住吉町、信香（のぶか）町、東雲町、相生町、稲穂は、明治から昭和前期にかけて建設された建造物が数多く所在する地域である。新たな価値や役割を得て利活用されている歴史建造物をまちづくりに活用し、さらに、それらの建造物をおたる案内人などの観光ガイドが案内して、本市の歴史や文化を伝えている。これらのまちづくり活動の範囲に位置する歴史的建造物は、以下のとおりである。

歴史的建造物の利活用とまちづくり活動の範囲に位置する歴史的建造物一覧

番号	建造物名称	外観	所在地	所有者	建設年代	構造・階数	建設年代根拠	現在の用途
1	旧右近倉庫		色内3	民間	明治27年（1894）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	倉庫
2	旧広海倉庫		色内3	民間	明治22年（1889）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	倉庫
3	旧増田倉庫		色内3	民間	明治36年（1903）	木骨石 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会 平成6年（1994））	倉庫
4	旧日本郵船株式会社小樽支店輸出倉庫		色内3	公共	明治31年（1898）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	遊具施設
5	旧日本石油㈱倉庫		色内3	公共	大正9年（1920）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	休憩施設
6	旧日本郵船株式会社小樽支店		色内3	公共	明治39年（1906）	石 2階	重要文化財	見学施設
7	旧日本郵船株式会社小樽支店残荷倉庫		色内3	民間	明治39年（1906）	石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	倉庫
8	旧渋澤倉庫		色内3	民間	明治25年（1892）頃	木骨石 1階	古写真等	ライブハウス飲食店
9	田中酒造店		色内3	民間	昭和2年（1927）	木 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	物販店
10	旧北海製罐倉庫㈱第2倉庫		色内3	民間	大正11年（1922）	鉄筋コンクリート 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	倉庫

番号	建造物名称	外観	所在地	所有者	建設年代	構造・階数	建設年代根拠	現在の用途
11	旧北海製罐倉庫㈱ 工場		色内3	民間	昭和6年 （1931）	鉄筋 コンクリート 5階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	工場
12	旧北海製罐倉庫㈱ 事務所		色内3	民間	昭和10年 （1935）	鉄筋 コンクリート 3階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	事務所
13	旧大家倉庫		色内2	民間	明治24年 （1891）	木骨石 1階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会平成6年（1994））	倉庫
14	旧早川支店		色内2	民間	明治37年 （1904）	木骨石 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会平成6年（1994））	物販店
15	旧前堀商店		色内2	民間	昭和初期	木骨鉄網 コンクリート 一部木骨石 3階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	住宅
16	旧磯野支店倉庫		色内2	民間	明治39年 （1906）	レンガ 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	飲食店
17	旧小樽倉庫		色内2	公共	明治23年 （1890）～ 明治27年 （1894）	木骨石 1階 木骨レンガ 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会平成6年（1994））	博物館 物販店 飲食店
18	旧横浜正金銀行 小樽出張所		色内2	民間	昭和2年 （1927）	木 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	事務所
19	旧安田銀行小樽支店		色内2	民間	昭和5年 （1930）	鉄筋 コンクリート 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会平成6年（1994））	飲食店
20	旧北海製罐倉庫㈱ 第3倉庫		港町4	公共	大正13年 （1924）	鉄筋 コンクリート 4階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	倉庫
21	旧北日本汽船倉庫		港町5	民間	昭和3年 （1928）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	飲食店
22	旧篠田倉庫		港町5	民間	大正14年 （1925）	木骨レンガ 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	飲食店
23	旧小樽倉庫（1番庫・2番庫）		港町5	民間	大正13年 （1924）	鉄筋 コンクリート 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	飲食店
24	旧渋澤倉庫（小樽B号倉庫）		港町5	民間	大正14年 （1925） 以前	鉄筋 コンクリート 2階	古写真等	集会所 駐車場
25	旧渋澤倉庫（小樽C号倉庫）		港町5	民間	昭和16年 （1941）	木 2階	古写真等	飲食店

番号	建造物名称	外観	所在地	所有者	建設年代	構造・階数	建設年代根拠	現在の用途
26	旧浪華倉庫		港町６	民間	大正14年（1925）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成６年（1994））	美術館（小樽芸術村）
27	旧第四十七銀行小樽支店		色内１	民間	昭和11年（1936）	木 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会平成６年（1994））	物販店 事務所
28	旧梅屋商店		色内１	民間	明治39年（1906）	木骨石 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成６年（1994））	物販店
29	旧塚本商店		色内１	民間	大正９年（1920）	木骨鉄網コンクリート 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成６年（1994））	飲食店 物販店
30	旧小樽商工会議所		色内１	民間	昭和８年（1933）	鉄筋コンクリート 3階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会平成６年（1994））	ホテル
31	旧越中屋ホテル		色内１	民間	昭和６年（1931）	鉄筋コンクリート 4階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会平成６年（1994））	ホテル
32	旧荒田商会		色内１	民間	昭和10年（1935）	木 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成６年（1994））	美術館（小樽芸術村）
33	旧高橋倉庫		色内１	民間	大正12年（1923）	木骨石 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成６年（1994））	美術館（小樽芸術村）
34	旧通信電設浜ビル		色内１	民間	昭和８年（1933）	鉄筋コンクリート 4階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成６年（1994））	飲食店 物販店
35	旧嶋谷倉庫		色内１	民間	明治25年（1892）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成６年（1994））	飲食店
36	旧三井銀行小樽支店		色内１	民間	昭和２年（1927）	鉄骨鉄筋コンクリート 2階	重要文化財	美術館（小樽芸術村）
37	旧北海道拓殖銀行小樽支店		色内１	民間	大正12年（1923）	鉄筋コンクリート 4階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会平成６年（1994））	美術館（小樽芸術村）
38	旧三菱銀行小樽支店		色内１	民間	大正11年（1922）	鉄筋コンクリート 4階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会平成６年（1994））	バス ターミナル
39	旧第一銀行小樽支店		色内１	公共	大正13年（1924）	鉄筋コンクリート 4階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会平成６年（1994））	縫製工場
40	旧北海道銀行本店		色内１	民間	明治45年（1912）	石 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会平成６年（1994））	飲食店 事務所

番号	建造物名称	外観	所在地	所有者	建設年代	構造・階数	建設年代根拠	現在の用途
41	旧三井物産小樽支店		色内1	民間	昭和12年 （1937）	鉄筋 コンクリート 5階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会 平成6年（1994））	事務所
42	旧小樽地方貯金局		色内1	公共	昭和27年 （1952）	鉄筋 コンクリート 3階	「小樽地方貯金局五十年史」昭和41年（1966）	文学館 美術館
43	日本銀行旧小樽支店		色内1	民間	明治45年 （1912）	レンガ 2階	小樽市文化財	資料館
44	旧名取高三郎商店		色内1	民間	明治39年 （1906）以降	木骨石 2階	古写真等	物販店
45	旧百十三銀行 小樽支店		堺町1	民間	明治41年 （1908）頃	木骨石 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会 平成6年（1994））	物販店
46	旧金子元三郎商店		堺町1	民間	明治20年 （1887）頃	木骨石 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	物販店
47	旧岩永時計店		堺町1	民間	明治30年 （1897）代	木骨石 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会 平成6年（1994））	物販店
48	旧第百十三国立銀行 小樽支店		堺町1	民間	明治28年 （1895）	木骨石 1階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会 平成6年（1994））	物販店
49	旧北海雑穀㈱		堺町1	民間	明治42年 （1909）以前	木骨石 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	物販店
50	旧久保商店		堺町4	民間	明治40年 （1907）	木 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	飲食店
51	旧木村倉庫		堺町7	民間	明治24年 （1891）	木骨石 2階	古写真等	物販店
52	旧戸出物産小樽支店		入船1	民間	大正15年 （1926）	木 一部レンガ 3階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	物販店 飲食店
53	旧中越銀行小樽支店		入船1	民間	大正13年 （1924）	鉄筋 コンクリート 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会 平成6年（1994））	物販店
54	旧上勢友吉商店		入船1	民間	大正10年 （1921）	石 3階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会 平成6年（1994））	物販店
55	旧共成㈱		住吉町4	民間	大正4年 （1915）	レンガ 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会 平成6年（1994））	物販店

番号	建造物名称	外観	所在地	所有者	建設年代	構造・階数	建設年代根拠	現在の用途
56	旧魁陽亭		住吉町４	民間	明治29年（1896）以降	木 ２階	古写真等	―
57	猪股邸		住吉町４	民間	明治39年（1906）	木 ２階	古写真等	住宅
58	旧小堀商店		住吉町14	民間	昭和７年（1937）	木骨鉄網コンクリート ２階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成６年（1994））	物販店
59	旧作左部商店蔵		住吉町15	民間	明治初期	土蔵 ２階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成６年（1994））	倉庫
60	旧岡崎倉庫		信香町	民間	明治38年（1905）～明治39年（1906）	木骨石 １階 一部２階	古写真等	物販店
61	旧光邸		東雲町	民間	昭和12年（1932）	木 ２階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成６年（1994））	保養施設
62	旧板谷邸		東雲町	民間	大正15年（1926）～昭和２年（1927）	木 １階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成６年（1994））	ホテル
63	旧寿原邸		東雲町	公共	大正元年（1913）	木 ２階	古写真等	見学施設
64	小樽聖公会		東雲町	民間	明治40年（1907）	木 １階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会平成６年（1994））	教会
65	水天宮本殿、拝殿		相生町	民間	大正８年（1924）	木 １階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成６年（1994））	神社
66	旧向井呉服店支店倉庫		稲穂１	民間	明治40年（1907）	レンガ ４階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成６年（1994））	―
67	旧松村商店		稲穂１	民間	明治32年（1899）	木骨石 １階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成６年（1994））	物販店

③ 活動

（ア）運河保存運動

大正 12 年（1923）に運河は完成したが、間もなく船舶の大型化や貨物量の増加に伴い、より効率的な荷役方法への転換が求められるようになった。昭和７年（1932）に堺町岸壁が完成し、その４年後には北海道初の突堤式埠頭（ふ）である第１号埠頭の整備が始まるなど、運河の役割は次第に薄れていった。昭和 40 年代に「斜陽の街」と称された頃の運河には、雑草が生い茂った艀（はしけ）が横たわり、溜まったヘドロと悪臭が漂っていた。

昭和 41 年（1966）、交通渋滞の解消などを目的とし、本来の役割を終えた運河を埋め立てて道路を整備する都市計画が決定し、翌年から工事が始められた。

『小樽運河保存の運動』（小樽運河問題を考える会 昭和 61 年（1986））によると、工事の進捗に伴い、工区上にある有幌（あり ほろ）地区の石造倉庫群が解体されるのを目の当たりにした市民は、運河とその周辺の石造倉庫群を守ろうと立ち上がり、昭和 48 年（1973）12 月４日、多様な職業の市民 24 名が集まり、「第１回小樽運河を守る会発起人会」を開催し、同年 12 月６日の北海道新聞において、発起人会の様子が報道されている。発起人会の発足直後から陳情、交渉、集会を重ね、昭和 50 年（1975）６月 24 日の「小樽運河を守る会設立総会」の時点で会員 1,200 人の市民団体となっていた。同日の北海道新聞では、設立総会が催されたことが報道されている。

小樽の運河残そう
「守る会」が第一回発起人会

第１回小樽運河を守る会
発起人会掲載記事

約 10 年にわたる運河保存運動では、小樽市、北海道及び文化庁への陳情をはじめ、水質調査や運河周辺の清掃、企画展やポートフェスティバルの開催、街角での紙芝居の上演、全国町並みゼミを誘致して全国から集まった参加者へ町並み保存を訴えるなど、その活動は多岐にわたった。

昭和 53 年（1978）７月８日と９日に開催された「第１回ポート・フェスティバル・イン・オタル」は、小樽を愛する若者たちが企画・主催した手作りの祭りであり、北海製罐株式会社の第３倉庫（現在小樽市が所有）横の広場のほか、運河周辺の石造倉庫、道道及び市道と艀を含む運河一体を会場とした。広場に設置された特設ステージでは、フォークやロックのコンサートなどが行われ、会場周辺にその音楽が響き渡った。また、石造倉庫は劇場となり、映画、落語、演劇などが行われ、運河に浮かぶ艀は、フォークとジャズのコンサート会場となったほか、水上ビアガーデンとしても使用された。さらに、運河沿いでは、市民が手作りした商品を並べた約 100 店もの出店が並び、商品を手に取って買い物を楽しむ人々の姿が見られた。夜間には、この出店の裸電球の灯りとともに、照明で照らされた運河や倉庫の姿が水面に浮かび、昼間とは違う表情を見せる運河周辺の姿に訪れた人々は魅了された。

この祭りには２日間で約 10 万人が訪れ、老若男女を問わず、多くの人々が水辺に親しみ、祭りの賑わいに酔いしれた。

運河や石造倉庫といった小樽独自の環境を生かして開催された祭りは、市民に運河や石造倉庫の存在意義を再認識させるとともに、小樽のまちづくりの方向性を具体的に示すこととなった。また、この祭りで確かな手応えを感じ、自信を深めた若者たちは、「小樽・夢の街づくり実行委員会」を結成し、その熱意は「小樽運河を守る会」の活動に活気を与えた。また、「第１回ポート・フェスティバル・イン・オタル」の様子は、昭和 53 年（1978）７月 11 日の北海道新聞で報じられている。

ポート・フェスティバル終わる

主催者も驚くほどの人出

運河、倉庫の"価値"訴える

新しい町づくり運動の序曲？

第１回ポートフェスティバル・イン・オタル掲載記事

これらのほかにも、各界の専門家を招き、市民を交えた総合的な学習・研究の場を創出することを目指した「小樽運河研究講座」が開催されるなど、運河保存運動は、小樽のまちづくり運動へと発展していった。

運河保存運動は、全国的に見ても、まちづくりにおける市民運動の先駆けとなり、昭和 40 年代から 50 年代にかけて社会情勢が大きく変化する中で注目を集めた。結果として、運河の全面保存は実現せず、昭和 59 年（1984）に「小樽運河を守る会」の活動は幕を閉じるが、運河保存運動が示したまちづくりの理念は、その後の市民活動や本市のまちづくりに大きな影響を与えることとなった。

市は、昭和 58 年（1983）に北海道初の景観条例となる「小樽市歴史的建造物及び景観地区保全条例」を制定し、平成４年（1992）には歴史的建造物の実態調査が日本建築学会北海道支部によって行われた。運河周辺の歴史的建造物や景観の保全に取り組むようになり、論争の舞台となった運河は、水辺に親しめる散策路やガス灯などが整備され、現在では、運河に架かる橋の上からの眺めが小樽のシンボルの一つとなり、そこには多くの人が訪れ、水辺の情緒ある景観に親しむ姿が見られ運河保存運動の成果を感じることができる。

（イ）歴史的建造物の利活用とまちづくり

小樽が経済都市として発展できた最大の要因は、港と鉄道を介した物資の集積地になったことであり、このことを背景に、明治から昭和前期に建てられた建造物が今も本市の歴史的なまちなみを形成している。また、これらの歴史的建造物は、時代の変遷の中で新たな価値や役割を見出されながら受け継がれてきた。

昭和 31 年（1956）、旧日本郵船株式会社は小樽市博物館となり、昭和 40 年代には、旧北海道銀行本店は地元企業の社屋、旧安田銀行小樽支店は新聞社、市所有の旧第一銀行小樽支店は紳士服の製造工場として活用されている。また、運河保存運動が展開されていた昭和 50 年代には、質屋のレンガ造の蔵が喫茶店となり、市は、旧小樽地方貯金局を分庁舎として活用し、運河沿いの旧小樽倉庫を保存・活用するために取得している。

石油ランプや漁業用の浮き球などを製造していた株式会社北一硝子は、明治期に漁業用倉庫として建てられた堺町に位置する旧木村倉庫を譲り受け、昭和 58 年（1983）、窓が少なく光が入らない倉庫の特徴を生かし、ガラス製品の販売店舗をオープンした。本市の産業を象徴する倉庫とガラスが融合した店舗は、その独特の趣から人気を博し、この界隈では購入した商品を入れた紙袋を持つ人が多く見られるようになった。

市民運動組織「フォーラム」
小樽の再生願い発足

小樽再生フォーラム
設立総会掲載記事

こうした歴史的建造物の利活用が進む中で、この店舗は本市の観光拠点としての礎を築き、市内の歴史的建造物の利活用を促進させる契機となった。その後、堺町や色内、その周辺を含めた地域では、明治から昭和前期に建設された倉庫、銀行、商店、事務所などは、その価値を生かした改修により、商業・観光施設、美術館やホテルなどに生まれ変わっていった。

このように多くの歴史的建造物が繰り返し利活用され、その中で維持保全が図られてきたことが本市の特徴といえる。

一方で、運河保存運動以降、多くのまちづくり団体等が設立され、歴史・文化を生かした様々なまちづくり活動が展開されてきた。

昭和 60 年（1985）には、「小樽運河を守る会」の後継組織として「小樽再生フォーラム」が設立され、昭和 60 年（1985）10 月 30 日の北海道新聞では、設立総会の様子が報じられている。歴史的なまちなみの保存・活用に向けた活動が始まり、公開シンポジウムや地域懇談会の開催、行政に対する提言など多様な活動が展開され、まちづくりの学習機会の一つとして企画したスケッチ会では、参加者が運河の散策路付近で腰を下ろし、運河と倉庫群をじっくり眺めながら筆を走らす姿が見られた。

冬のイベント「小樽雪あかりの路」は、運河保存運動に参加した市民を含む小樽観光誘致促進協議会の会議の場で立案された。小樽観光の弱点とされていた「冬」と「夜」を克服するため、身近にある降り積もる雪と、地元でつくられたガラス製の浮き球やロウソク、そして、歴史的な遺産を活用する市民らによる手作りのイベントが企画され、その名称は、伊藤整の詩集『雪明りの路』にちなんで「小樽雪あかりの路」と名付けられた。

小樽運河
（小樽雪あかりの路）

平成 11 年（1999 年）に始まった「小樽雪あかりの路」では、厳しい寒さの中でも人々の温かい心が感じられ、運河や旧国鉄手宮線を中心に、旧三井銀行小樽支店や天狗山、商店街、各家庭や学校など、市内各地がロウソクの柔らかな灯りで照らされ、幻想的な風景が広がる。また、『小樽雪あかりの路 20 周年記念誌』（小樽雪あ

かりの路実行委員会 平成 30 年(2018))では、第１回小樽雪あかりの路のポスターなどが確認できる。

近年の開催期間は８日間であるが、準備期間を含め、市民をはじめとする多くのボランティアの協力によって支えられている。ロウソクを設置するスノーキャンドルやオブジェは、市民ボランティアのほか、学生やこのイベントに参加するために来日した韓国や台湾からのボランティアなどの協力によって制作される。

第１回 小樽雪あかりの路
ポスター（平成 11 年）

ロウソクを入れるワックスボウルは、約２か月前から手作業で一つずつ丁寧につくられるが、鍋でロウを溶かし、水を入れた風船を 100 回ほど出し入れする地道な作業を繰り返すことで完成する。開催日が近づくと、寒空の下でボランティアたちがスノーキャンドルやオブジェなどを制作し、開催期間中は、昼頃から会場の準備を始め、ロウソクを一つずつ設置して点灯し、開始時刻の 17 時には訪れる人々を温かな灯りで迎える。しかし、強風や大雪の日には、すぐにロウソクの灯りが消えてしまうため、手作業で何度も火を灯し、雪に埋もれたオブジェを修復する作業に追われる。会場に訪れた人は、そこで目にした幻想的な風景とともに、ボランティアたちが協力して灯りを守り続ける姿に心を打たれる。

ロウソクに火を灯す
ボランティア

参加した人々の間には自然と交流が生まれ、地域に貢献する喜びも実感できる貴重な経験となる。こうした積み重ねが「小樽雪あかりの路」の魅力をより一層深め、市民にとって大切な冬の風物詩となった。

平成 18 年（2006)、小樽の観光産業を支える人材の育成と市民レベルでのホスピタリティ意識の醸成を目的とし、産学官の連携により小樽観光大学校が設立された。同校では、小樽の文化・歴史に関する知識を深めるための講座の開催や「おたる案内人」検定試験の実施および資格認定を行っている。

おたる案内人
（令和元年（2019））

おたる案内人制度は、小樽の歴史や文化に関する幅広い知識を持ち、地域に誇りを抱く市民や観光産業従事者の育成を目的としており、資格は２級・１級・マイスターの三段階に分かれ、上級資格取得者はより専門的な解説が可能となる。同校が認定した「おたる案内人」の合格者は、令和７年（2025） ４月１日時点で 1,483 人となり、その中には小学生の合格者も含まれている。また、

おたる案内人ジュニア
（令和６年（2024））

平成 23 年（2011）から小学５・６年生を対象とした「おたる案内人ジュニア育成プログラム」が実施され、おたる案内人から総合的な学習の時間（年間 50 時間以上）に小樽の歴史などを学ぶ。その成果を発表する場となる運河では、緊張した表情を浮かべながら解説を行い、終了時には達成感に満ちた児童の姿が見られた。「おたる案内人」が活動している様子は令和元年（2019）の写真で確認できるほか、「おたる案内人ジュニア」については令和６年（2024）の写真から活動の様子がうかがえる。また、「おたる案内人」は、地域のイベントにも参加している。「小樽雪あかりの路」でバックヤードツアーを行い、小樽の歴史や歴史的建造物の解説とともに、準備作業の様子などを参加者に伝えている様子が折々に見られる。

市内には、「おたる案内人」による観光ガイド団体のほか、二つの団体が活動しており、青や緑のユニフォームを着たガイドが運河や旧銀行街、その周辺の地域に集積する歴史的建造物を案内し、解説を行っている。そのほか、色内や港町周辺の歴史的建造物の前では、日焼けした人力車の車夫が乗車した観光客に対して解説を行う姿が日常的に見られる。これらのガイドは、小樽の魅力を発信する役割を果たしているが、単なる観光ガイドにとどまらず、小樽のまちと人をつなぐ地域の語り部としての役割を担っている。

本市では、日本銀行小樽支店が廃止を表明した際には署名活動が行われ、そのほかの歴史的建造物が解体危機にあった際には、市民団体や日本建築学会北海道支部の有志らによって、保存の要請が行われた。

令和２年（2020）には、地元企業の北海製罐株式会社から小樽市に対して、所有する第３倉庫（以下「第３倉庫」という。）の解体方針が示された。この動きが報道されると、市民の間で広く関心を集めることとなり、市は、第３倉庫が今後の小樽の歴史・文化を生かしたまちづくりや観光戦略にとって重要な北運河地区のシンボル的存在であることから、保存・活用を検討するための時間的猶予を求め、その結果、１年間の猶予が与えられた。

第３倉庫の保存・活用は、小樽全体で考えていくべき重要な課題であるという市の要請に応え、令和３年（2021）１月、小樽商工会議所と小樽観光協会を主体とした民間組織「第３倉庫活用ミーティング」が発足した。この組織は、建築や文化財の専門家、まちづくり団体などの 12 名で構成され、北海製罐株式会社や市の職員も参画する中で幅広く検討が行われた。

第３倉庫への理解と関心を高めることを目的とした見学会には、200 人を超える申し込みがあり、第３倉庫の保全・活用の意見を聞く機会として開催した勉強会では、100 件を超える提案が寄せられた。そのほか、運河側の外壁面でライトアップ、「月刊おたる」に掲載された第３倉庫に関連する表紙絵などの展示、ラジオでの発信やシンポジウムの開催、ガバメントクラウドファンディングによる寄付金を活用したコンクリートの劣化調査など多様な

市とＮＰＯ法人の連携協定

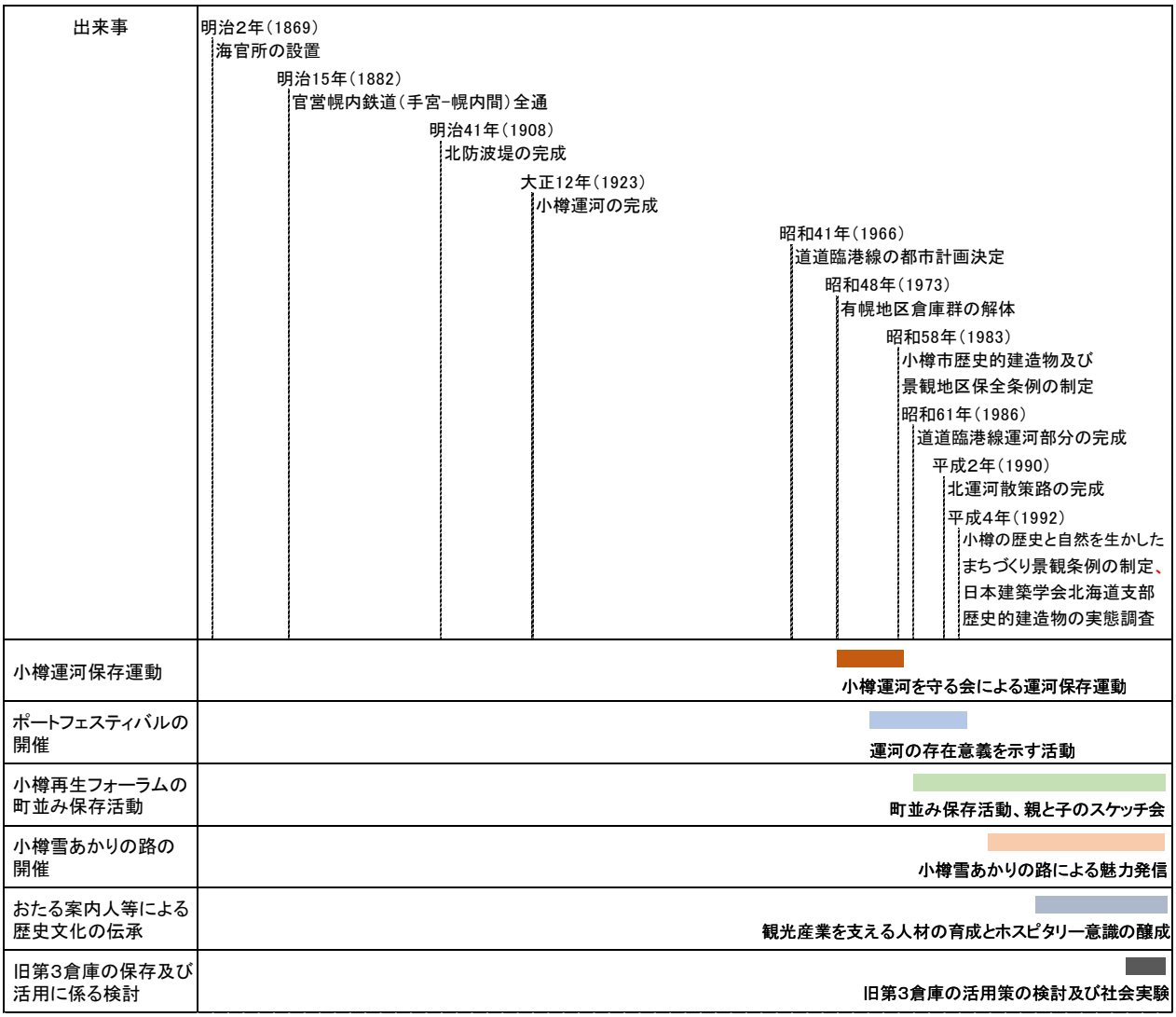
活動が行われ、令和３年（2021）９月、市へ保全・活用に向けた提言書が提出された。その後、市は提言書などを踏まえ、第３倉庫を無償で譲り受けることとなった。

現在は、「第３倉庫活用ミーティング」の後継組織である「ＮＰＯ法人ＯＴＡＲＵ ＣＲＥＡＴＩＶＥ ＰＬＵＳ」が市と連携協定を締結し、第３倉庫の保存・活用に向けた検討や社会実験などに取り組んでいる。

そのほか、令和５年（2023）には、小樽運河 100 周年を契機に若者が中心となって活動するまちづくり団体「Ｏｔａｒｕ Ｎｅｘｔ １００」が誕生し、運河周辺を中心に、小樽のまちを盛り上げる活動を展開している。

これらのように市民が関わり、歴史的環境を活かしたまちづくりを行うとともに大きな問題を解決する協働の精神は、本市の歴史の中で脈々と受け継がれている。

運河保存運動をはじめとするまちづくりの活動年表



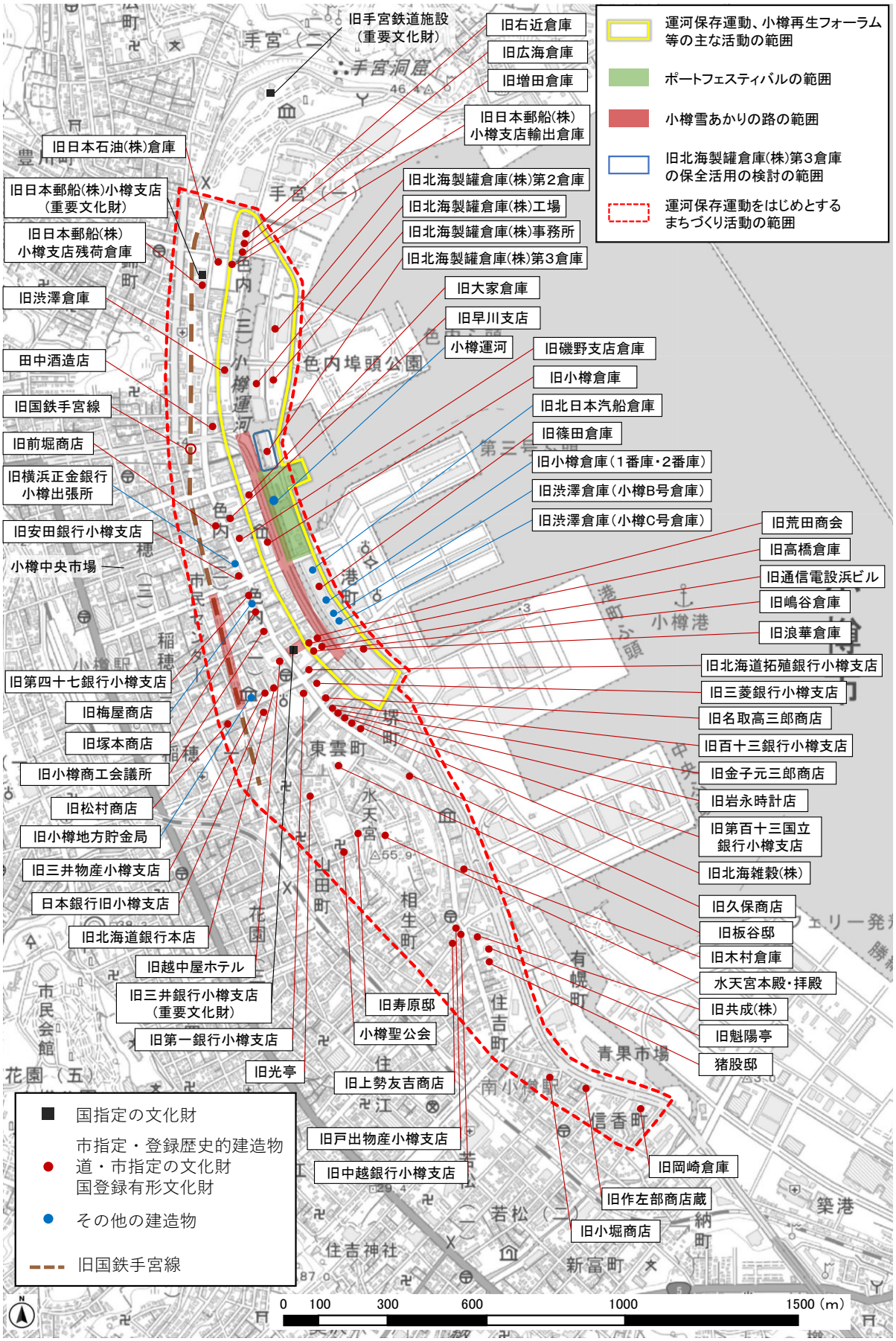
④ まとめ

本市の特徴として、地域住民が主体となってまちを動かしてきた数多くの事例が挙げられる。「民の力」、すなわち住民が主体となった活動は、地域社会を形成する上で欠かせない要素となっており、明治中期から後期にかけて行われた先駆的な社会福祉活動や、昭和後期に約 10 年にわたり展開された運河保存運動はその代表例である。

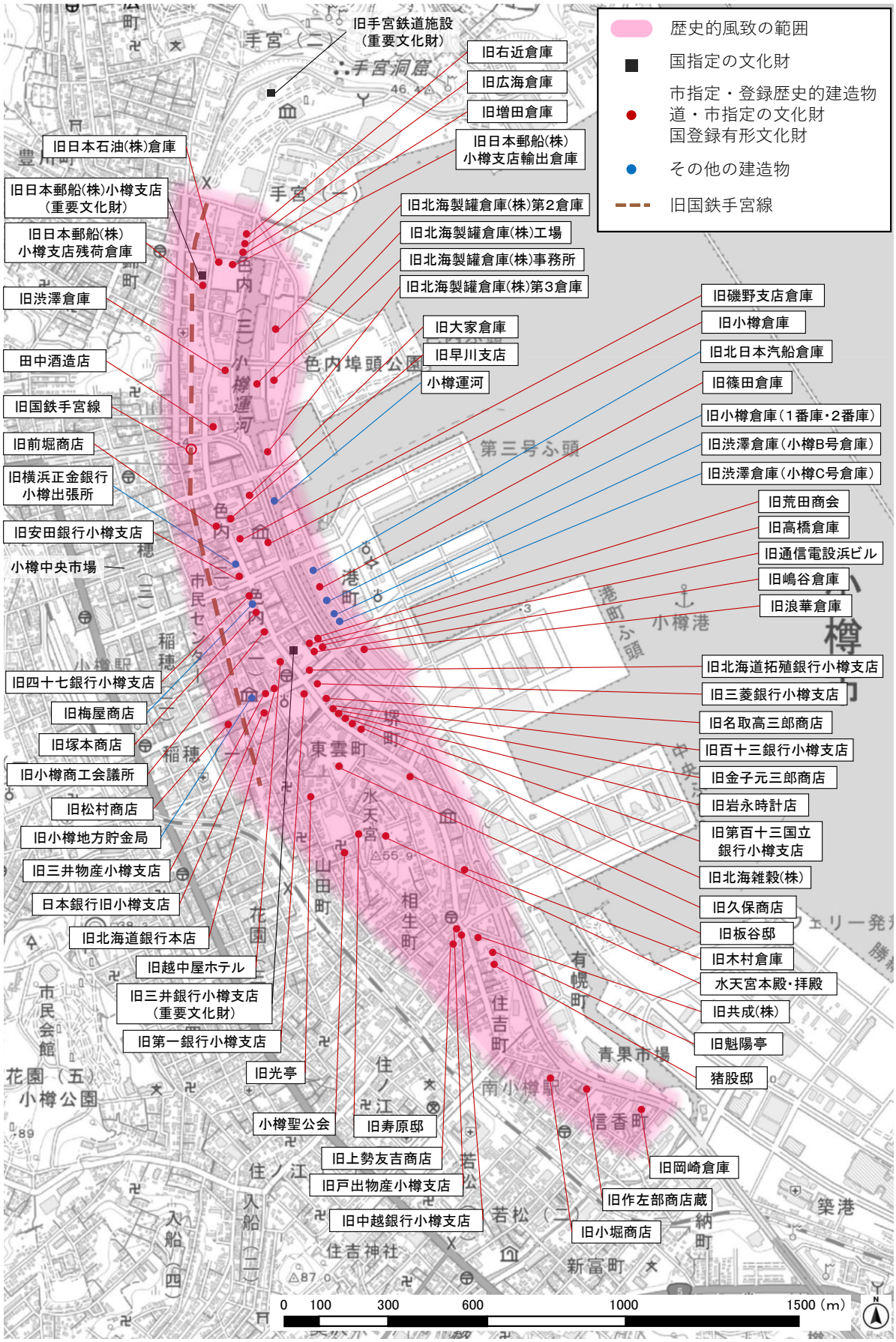
これらの活動には、住民が積極的に関与し、地域の未来を切り開こうとする意識が根底にある。また、これらの活動の背景にあるのは、移住者たちが助け合う互助の精神や、大きな問題をともに考えて解決に向かう協働の精神であり、まちの発展と衰退の歴史において、地域社会を支え合う文化が築かれてきた。

「斜陽の街」と称された時期に展開された運河保存運動では、まちづくりの方向性の違いから保存派と推進派で対立することとなったが、結果として、歴史的景観の価値が広く認知され、本市はその環境を生かした観光都市へと歩みを進めることとなった。

運河保存運動の根底にあったまちへの思いや協働の文化は、歴史を生かしたまちづくりの精神的基盤となり、今日の経済界・行政が一体となった様々なまちづくり活動に大きな影響を与え、地域の歴史を尊重しながら新たな価値を創造する力となっている。また、先人たちが残した貴重な文化遺産を背景に、脈々と受け継がれてきた「民の力」は、まちづくりや市民活動において重要な役割を果たし、現代の「民の力」として若い世代にも引き継がれている。



運河保存運運動をはじめとするまちづくりの活動範囲



運河保存運動をはじめとするまちづくりにみる歴史的風致の範囲

おわりに

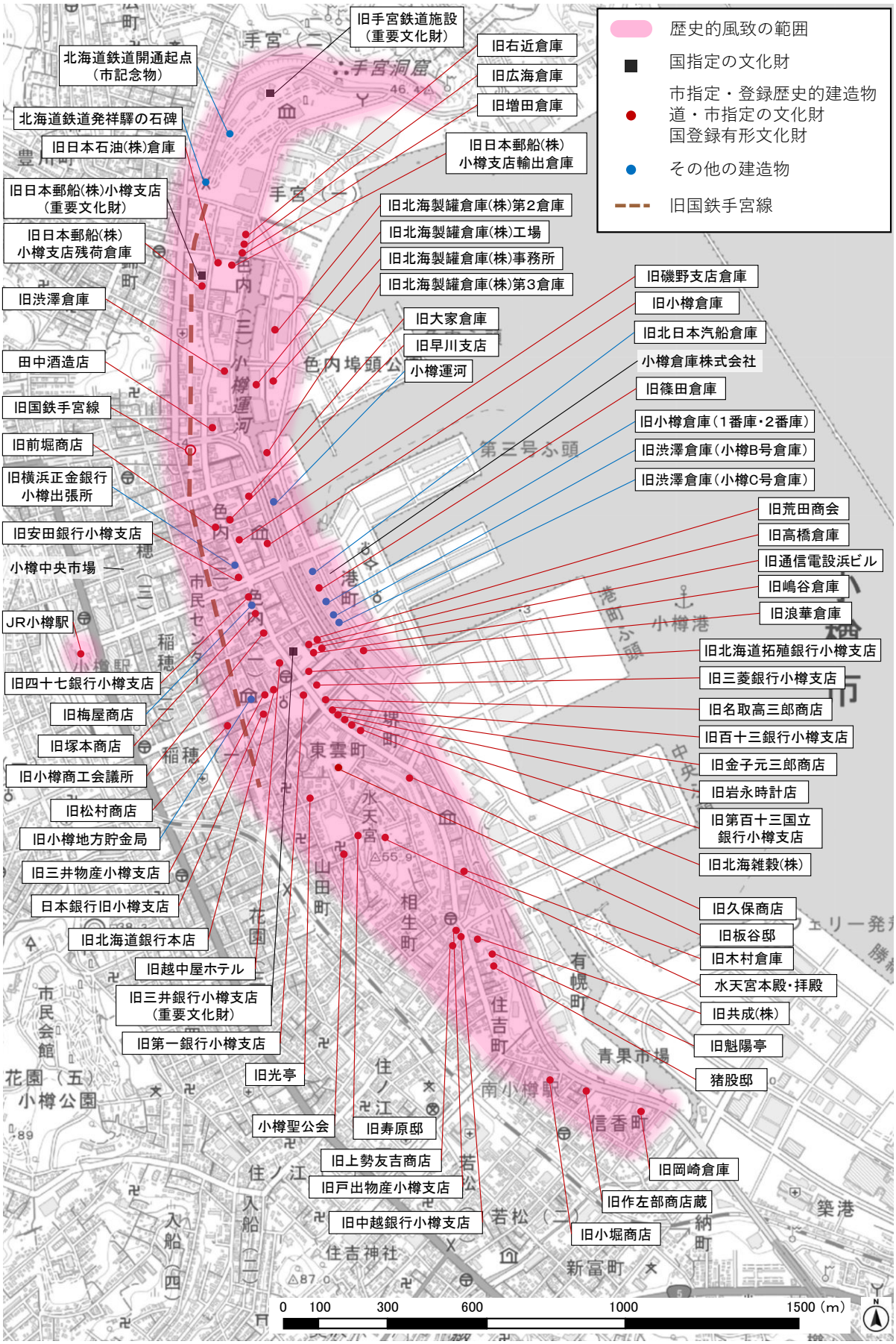
本市は、北海道の中でも重要な港町として発展してきた。明治時代には、北前船をはじめとする多くの商船が小樽港を往来し、物資の移出入が行われ、その交易は小樽の豊かな文化を形成する一因にもなった。

明治15年（1882）に小樽－幌内（ほろない）間で鉄道が開通すると、港と鉄道の双方を有する小樽は、石炭をはじめとする物資の集積地としての役割が強まり、手宮には貯炭場や石炭の積み出し施設が設けられ、海岸の埋立地には次々と倉庫などが建設された。さらには、北海道経済の中心地として金融機関や商社が集積し、都市としての機能が拡大していった。その発展の過程でつくられた近代の建造物は、現在も特徴的なまちなみを形成し、まちの記憶を人々に伝えている。

しかし、戦後の経済変動や物流の変革に伴い、港湾機能は衰退し、小樽のまちづくりは新たな方向性を模索する必要に迫られた。都市開発の一環として、運河を埋め立てて道路を整備する計画が進められたが、市民らの間で運河やその周辺の石造倉庫群の保存を求める声が高まり、約10年にわたる運河保存運動が展開された。保存派と推進派による論争を経て、運河は石畳の散策路やガス灯などの環境整備が行われ、本市を代表する観光地として再生した。

運河保存運動は、小樽の歴史と風土を重視したまちづくりの転換点となり、市民参加によるまちづくりの重要性を示すこととなった。運河保存運動以降、多くのまちづくり団体が生まれ、運河や旧色内銀行街の周辺では、歴史や文化を活用した多様なまちづくり活動が行われている。また、歴史的建造物の実態調査が行われ、その価値を活かした利活用が活発となり、銀行や倉庫などの歴史的建築物が次々とリノベーションされ、物販店や飲食店、美術館などに活用されることによって、新たな都市の魅力が創出されている。

このように、本市のまちづくりは、港町としての歴史を尊重し、時代の変化に対応しながら、未来へと継承するかたちで進化を遂げてきた。市民によるまちづくりが様々なかたちで展開されてきたことが本市の特徴であり、近代の歴史的建造物や歴史ある営みとともに独自の歴史的風致を形成している。



まちづくりの変遷にみる歴史的風致の範囲

【コラム】全国町並みゼミ

全国町並みゼミは、全国から集まった参加者がまちなみ保存に関する議論や各地の事例を学ぶ場として、昭和 53 年（1978）から全国各地で開催されてきた。

NPO 法人全国町並み保存連盟と開催地の実行委員会が協力して開催し、本市では三度開催されている。

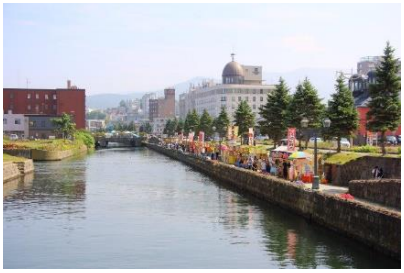
最初の大会は、運河保存運動が展開されていた昭和 55 年（1980）、当時「小樽運河を守る会」の会長であった峯山冨美が誘致し、全国からの参加者に対して運河の全面保存を訴えた。二度目は、本市が観光都市として発展していた平成 13 年（2001）、歴史文化を守り育てるまちづくりの重要性を参加者に伝えた。三度目は、運河竣工 100 周年及び「小樽運河を守る会」設立 50 周年の節目となる令和５年（2023）、運河保存運動後に生まれた世代が実行委員会の中枢を担い、官民協働で開催準備や大会運営が進められた。この大会では、「小樽運河 100 年の歴史から考える～今、ふるさとの魅力を未来へ～」をテーマに、将来のまちづくりについて活発な議論が交わされた。

市庁舎議場で行われた全国町並みゼミ小樽大会の様子（令和５年）

【コラム】サマーフェスティバル

昭和 61 年（1986）、地元青年会議所を中心に、旧銀行街をライトアップするイベント「オタルサマーフェスティバル」が開催された。このイベントは、夜の小樽や旧銀行街の魅力を発信するもので、平成６年（1994）まで続けられた。

さらに、小樽市市制施行 100 周年を迎えた令和４年（2022 年）には、旧銀行街と運河沿いを会場として再び開催され、今後の活用が期待されている市所有の旧第３倉庫を含めて大いに賑わいを見せた。



サマーフェスティバルの様子（令和４年）
左：日銀通り会場　右：運河会場

【コラム】日本銀行小樽支店の存続活動

平成 12 年（2000）、日本銀行は、業務量の減少が続いていた小樽支店の廃止を表明した。日本銀行小樽支店をまちのシンボルと考えていた市民らは、存続を願う署名活動を行い、その署名数は当時の人口の半分を超える９万人に達した。

結果として小樽支店は廃止となったが、建物は引き続き日本銀行が所有することとなり、平成 14 年（2002）に小樽市指定有形文化財に指定し、平成 15 年（2003）から日本銀行の広報施設である「日本銀行旧小樽支店金融資料館」として活用が開始された。

日本銀行旧小樽支店

【コラム】運河の清掃活動

平成 23 年（2011）、一人の小樽商科大学ＯＢが運河の清掃活動を始めたことが契機となり、現在では、運河の景観保護に取り組むボランティア団体「カナル・クリーン・チーム」が引き継ぎ、毎週土曜日の早朝に運河の清掃を行っている。

週末の運河では、胴長とゴム手袋を身に着けた 10～20 名程度の参加者が河口に入り、溜まったごみを網ですくい上げる姿が見られる。

運河の清掃活動　たまったごみをすくい上げる様子

【コラム】子どもたちが選ぶ「ふるさと１００選」小樽散策マップ

本市が市制施行 100 年を迎えた令和４年（2022 年)、小樽市教育委員会が市内の全小中学校の子どもたちを対象とし、改めて自分たちの地域を見つめ直し、ふるさと小樽の素晴らしさを伝え合う事業を企画した。

子どもたちは、自分たちの学校区にあるおすすめの場所を５つ選び、それらの写真撮影や紹介文の作成を行い、令和５年（2023）１月に開催された、子どもたちが選ぶ「ふるさと 100 選」発表会では、市内 29 校の代表児童生徒によって、それぞれのおすすめの場所が紹介された。また、その発表内容については、冊子「小樽散策マップ」としてまとめられている。

「小樽散策マップ」の例

４．祭りの賑わいにみる歴史的風致

はじめに

小樽では、初夏から初秋にかけて多くの祭りが市内各地で行われる。戦没者や郷土の発展に貢献した功労者を慰霊する招魂祭のほか、神社の例大祭、多くの市民が参加するおたる潮まつりなどが次々と行われる。開催目的、経緯が異なる多様な祭りが毎週のように執り行われ、市民はそれぞれの地域で開催される祭りを通して、自らの幼い頃を懐かしみ、生まれ育った郷土を感じる。

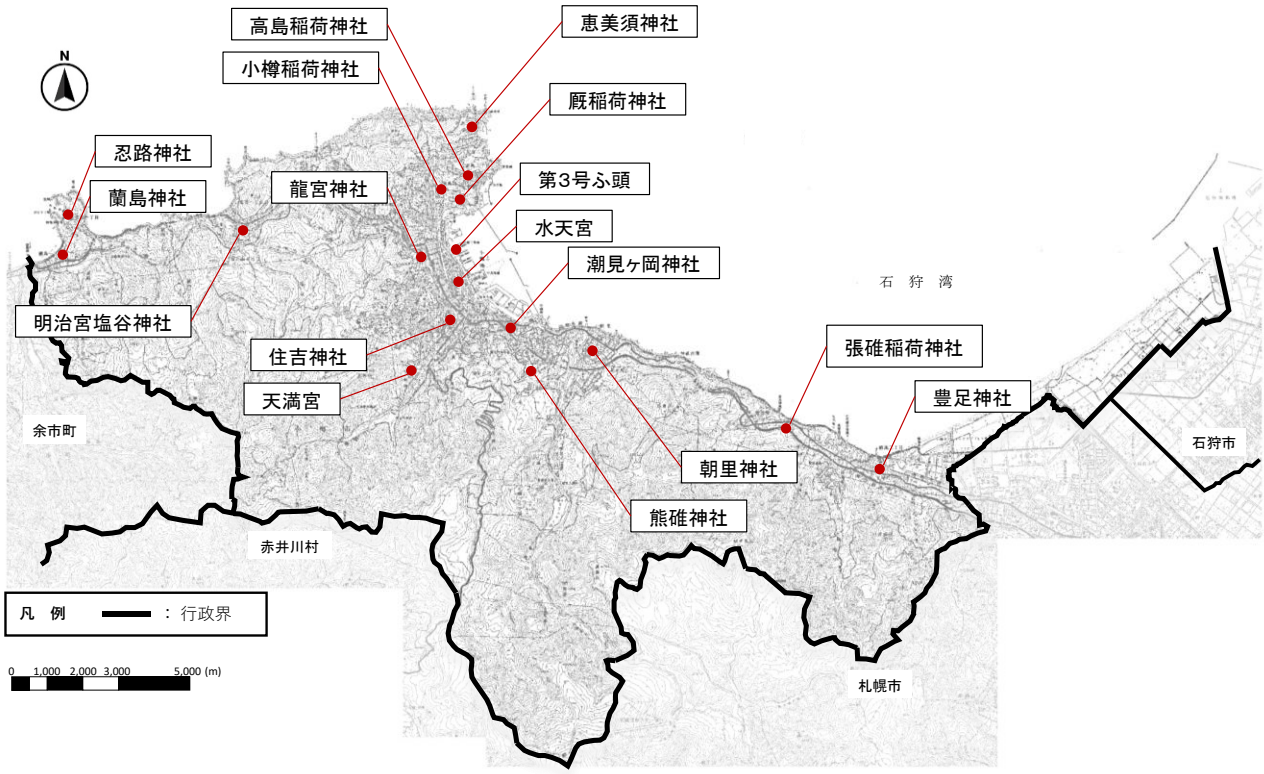
小樽市内の神社では、それぞれの神社で行われる祭りなどを通じて地域社会と関わりが持たれてきた。中心市街地の数社では、明治期から昭和期にかけて撮影された写真が多数保存されており、例大祭については、各神社とも昭和 30 年（1955）頃がもっとも盛んに行われていたことが確認できる。

近年は、車を使った神輿渡御も見られるが、祭りの賑わう光景は、今も変わらず小樽の暮らしを彩っている。

また、神社の祭りのほか、7 月下旬には、市内外から多くの人が訪れる「おたる潮まつり」が開催される。地域の祭りが毎週のように市内各所で続く様子は、かつて経済の隆盛を極めた歴史を反映した小樽の文化であり、小樽市民の誇りにもなっている。

番号	開催日		開催場所	所在地	内容
1	6月	6月1日～6月2日	潮見ヶ岡神社	若竹町	例大祭
2		6月2日	厩稲荷神社	手宮2丁目	例大祭
3		6月7日～6月9日	小樽稲荷神社	末広町	例大祭
4		6月8日～6月9日	張碓稲荷神社	春香町	例大祭
5		6月14日～6月16日	水天宮	相生町	例大祭
6		6月15日～6月16日	蘭島神社	蘭島1丁目	例大祭
7		6月20日～6月22日	龍宮神社	稲穂3丁目	例大祭
8		6月21日～6月23日	恵美須神社	祝津3丁目	例大祭
9		6月22日～6月23日	豊足神社	銭函2丁目	例大祭
10	7月	7月6日～7月7日	熊碓神社	桜5丁目	例大祭
11		7月6日～7月7日	忍路神社	忍路1丁目	例大祭
12		7月6日～7月7日	高島稲荷神社	高島3丁目	例大祭
13		7月13日～7月14日	明治宮塩谷神社	塩谷2丁目	例大祭
14		7月14日～7月16日	住吉神社	住ノ江2丁目	例大祭
15		7月26日～7月28日	第3号ふ頭	港町	おたる潮まつり
16	8月～9月	8月24日～8月26日	天満宮	天神1丁目	例大祭
17		8月31日～9月1日	朝里神社	新光2丁目	例大祭

令和６年（2024）　小樽市内の初夏から初秋に行われる主な例大祭



令和６年（2024）　小樽市内の主な祭りの開催地

（１）潮見ヶ岡神社の例大祭にみる歴史的風致

① 概要

市内において、初夏から初秋かけて行われる例大祭は、６月上旬に行われる潮見ヶ岡神社の例大祭が最初となるため、この例大祭により、地域住民をはじめ、市内の人々は一連の祭りの始まりと夏の訪れを感じる。例大祭では、境内や町内において幟が立ち、参道には提灯が吊るされ、神社周辺の沿道では露店が軒を連ねる。また、若竹町では、露店が並ぶ沿道の中、威勢のよいかけ声が響き渡る神輿渡御や子供たちによる四ヶ散米行列が行われ、本殿では松前神楽が奉奏される。

② 建造物等

（ア）潮見ヶ岡神社本殿・幣殿・拝殿

『北海道神社庁誌』（北海道神社庁　平成 11 年（1999））によると、天保 13 年（1842）の創建とされており、大正８年（1919）、汐見台町官有地境内地に本殿の造営が許可され、同年に竣工を届け出て遷座される。大正 13 年（1924）に穂垂稲荷神社から潮見ヶ岡神社に改称し、昭和 18 年（1943）に社殿を造営する。その後、平成 16 年（2004）に社殿の改築を行い、現在の社殿と境内の構成となった。参道の入り口に建つ石柱の表側に「潮見ヶ岡神社」、裏側には「昭和十七年十月」と刻まれている。

潮見ヶ岡神社社殿

③ 活動

（ア）潮見ヶ岡神社の例大祭

例大祭では、境内や町内に幟が立ち、参道には提灯が吊るされ、神社周辺の沿道には露店が軒を連ねる。また、若竹町では、露店が並ぶ沿道の中を威勢のよいかけ声が響き渡る神輿渡御や衣装を身に着けた子供たちによる四ヶ散米（しかさご）行列が行われるほか、本殿においては、厳かな雰囲気の中で松前神楽が奉奏される。

昭和 41 年の潮見ヶ岡神社例大祭
（お稚児さんと機関車）

潮見ヶ岡神社の例大祭における神輿渡御の行列は、猿田彦、祭典役員、笛や太鼓を演奏する伶人（れいじん）などで構成される。神輿を車両に乗せた一行は幟が立つ社殿を出発し、笛や太鼓で松前神楽を奉奏しながら、神社周辺を中心に介護施設、総合市場、大型商業施設までの広い範囲を渡御する。

近年は神輿会である小樽北海睦（ほっかいむつみ）会を中心とした人力による渡御が両脇を提灯で飾り付けた参道を抜け、鳥居をくぐり出社する。若竹町の沿道は祭礼期間に限り、車両の通行を禁止しており、片側に露店が所狭しと軒を連ね、露店と見物客の間を威勢のよいかけ声を発しながら神輿が通る。その様子を見た人々には、次週から毎週のように開催されるお祭りへの期待感を抱かせるとともに、市内で最初に行われる例大祭は、夏の訪れを感じさせる。

軒を連ねる露店と見物客

昭和 41 年（1966）に撮影された写真より古くから稚児行列が盛んに行われ、その伝統は子どもが主体となる今日の四ヶ散米（しかさご）行列などに受け継がれている。

また、この地域には昭和後期まで、国鉄築港機関区と石炭積み出し施設があり、その労働者のための宿舎も多くあった。特に機関区では、機関車の新規配置などの行事ごとに、潮見ヶ岡神社による催事が行われてきたこともあり、現在でも、かつて機関区の存在した跡地に立つ市場で祈願祭が執り行われたあと、市場の中を猿田彦や獅子舞が練り歩き、地域に根差したお祭りとして、人々に愛されている様子が見られる。

例大祭の宵宮祭では、神社内に厳かな雰囲気が漂う中で松前神楽が奉奏され、その場の見物客は神楽の舞や笛の音色、太鼓の音などの親しみある楽器を見聞きし、過ぎ去った幼い頃の懐かしそうにしている様子が見られる。また、潮見ヶ岡神社の本祭では、大人中心の神輿渡御の行列に、児童による四ヶ散米行列が随行し、随所で松前神楽を披露することにより、人々は地域の活性化や将来の担い手の存在を間近で感じる。『松前神楽（国記録選択無形民俗文化財調査報告書）』（北海道教育委員会平成 29 年（2017））によると、小樽における松前神楽の一般公開は、主に潮見ヶ岡神社、小樽稲荷神社及び龍宮神社の例大祭での奉奏、おたる潮祭りでの披露、市内や後志管内のほか、せたな町や小平町での合同公演で広く行われる。このうち、

例大祭での奉奏に際しては、各神社の協力のもとで松前神楽小樽保存会が行っており、会員は神社神職から社会人や小・中学生まで多岐にわたる。

例大祭に向けた練習会は、近隣の小学校にも参加を募集しつつ、主に潮見ヶ岡神社や龍宮神社で行われ、松前神楽の舞や衣装、道具が持つ華やかな印象から、参加を希望する児童も多い。また、特に児童はその家族や祖父母も毎回の練習を観覧し、練習会後も自宅で一緒に練習するなど、松前神楽を通して、夏の訪れを象徴する潮見ヶ岡神社例大祭が近づいていることを肌で感じる。

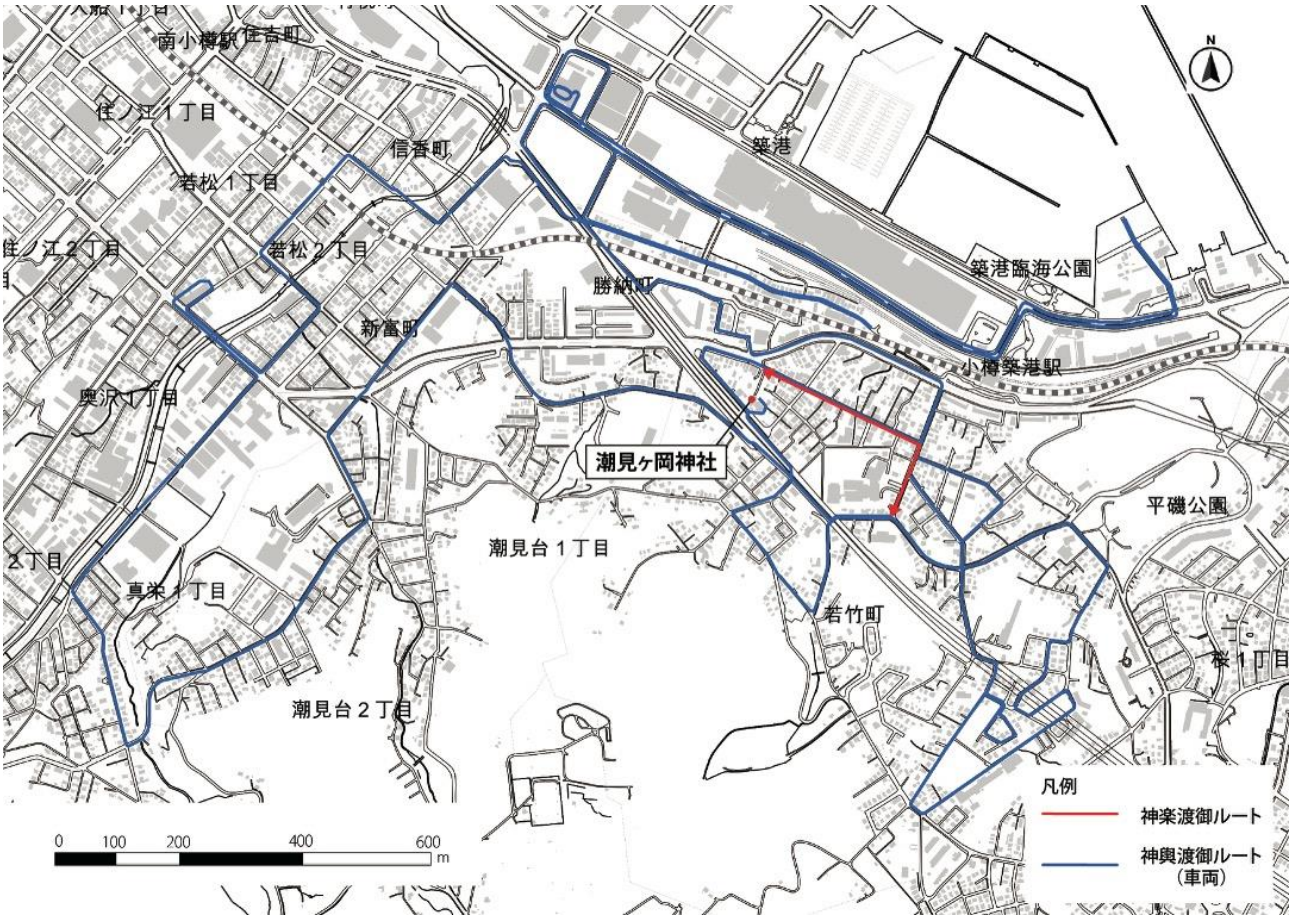
このように、小樽市における松前神楽は親子参加型、地域密着型で伝承されており、親子の絆の強化や郷土の愛着を促進するとともに、例大祭や文化財を通して、地域の活性化や世代間のつながりを深める特性を持っている。

松前神楽の練習会

例大祭宵宮祭での松前神楽

神輿渡御に随行する四ヶ散米行列

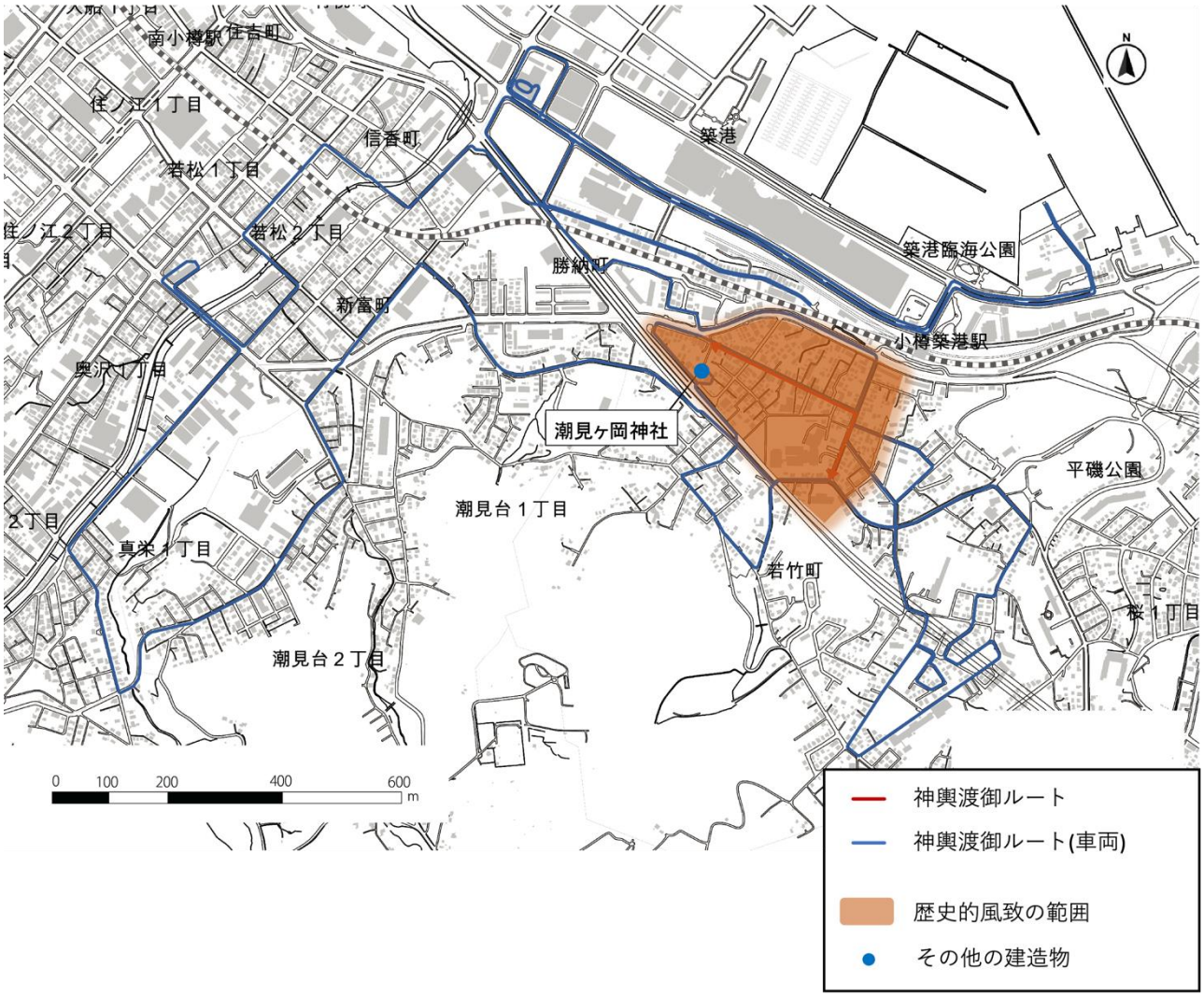
例大祭本祭での松前神楽



潮見ヶ岡神社の神輿渡御の経路

④ まとめ

潮見ヶ岡神社は、大正期から地元住民や旧国鉄築港機関区と密接な関係があり、その名残は少なくとも神輿渡御の行列からもうかがい知ることができる。また、社殿が現在地に移った後も地域の人々の信仰のみならず、町内会イベントの開催地、小樽に伝わる民俗芸能を後世に継承する重要な拠点となっている。例大祭では、重要無形民俗文化財である松前神楽が奉奏され、境内や周辺で行われる神輿渡御や四ヶ散米行列は、周辺地域の賑わいを創出している。人々に夏の到来を告げる潮見ヶ岡神社の例大祭は、社殿及び社務所をはじめ、関連する石造の灯籠や石柱が創出する趣のある景観とともに、この地域の歴史的風致を形成している。



潮見ヶ岡（しおみがおか）神社の例大祭にみる歴史的風致

【コラム】四ヶ散米（しかさご）行列

四ヶ散米行列は、松前神楽の演目の１つである四ヶ散米舞に関連するもので、神輿渡御や遷宮祭の際に随行し、道を清める露払いを行いながら行進する民俗芸能とされている。現在と同じ形態か定かではないが、江戸時代から、現在の福島町や知内町の神社で行われていたとされている。

小樽では平成元年（1989）頃に、潮見ヶ岡神社神職が奥尻町の澳津神社例大祭での四ヶ散米行列を拝観したことをきっかけに、「神社のお祭りを盛り上げたい」という想いから、平成２年（1990）頃から潮見ヶ岡神社でも行われるようになった。

行列は、主に小学生で構成されている。道具や衣装、四ヶ散米舞の曲に合わせて舞うことなどから、松前神楽との関係を示している。一方、神事の際に社殿で厳かに奉奏される松前神楽と比べて、行列の順序や舞振などは習得しやすい形で伝承されており、地元住民が担い手として参加・伝承しやすい民俗芸能といえる。

また、小樽では伝承者となる子供が身につける道具や衣装の華やかさ、例大祭というハレの日での発表の機会が親子参加型の伝承を促し、それが親子の絆や郷土への愛着に繋がる特性をもっている。

このことから、四ヶ散米行列は、先人のたゆまぬ努力により今日まで伝承された確かな歴史的背景に加えて、親子と地域の結びつきを強める、身近で貴重な民俗芸能といえる。

潮見ヶ岡神社での四ヶ散米舞

潮見ヶ岡神社での四ヶ散米行列

（２）水天宮の例大祭にみる歴史的風致

① 概要

水天宮は小樽港やその先の石狩湾を望む高台に建ち、境内から海を一望できる眺望のほか、春に咲くソメイヨシノやヤエザクラは、市民のみならず、観光客にも親しまれている。水天宮で行われる例大祭は、「小樽三大祭り」の一つであり、大正後期から昭和初期に撮影された写真では、山車を先導する芸者衆が手古舞の装束で賑やかに歩く姿が確認できる。例大祭では、屋根の中央に金色の鳳凰（ほうおう）が飾り付けられた神輿の鳳輦（ほうれん）及び牛車を車両に載せて渡御が行われるほか、参道脇の鳥居の近くにかけて、軒を連ねた露店に市民等が集まり、賑わいを見せている。

② 建造物等

（ア）水天宮 本殿・拝殿（市指定歴史的建造物）

水天宮社殿

『北海道神社庁誌』（北海道神社庁　平成 11 年（1999））によると、安政６年（1859）の創祀とされている。明治 27 年（1894）の台風で社殿が破壊され、明治 33 年（1900）に再建されている。

『小樽市の歴史的建造物』（小樽市教育委員会　平成６年（1994））によると、現在の社殿は、大正８年（1919）に建てたとされている。市内の多くの社寺を手がけた伊久治三郎によって建てられ、本殿、中殿、拝殿が連結する屋根は銅板葺きである。本殿は流造で置千木、かつお木を上げている。拝殿は入母屋造で正面屋根に千鳥破風、向拝屋根上に小さい千鳥破風２個を飾っている。

（イ）旧寿原邸（市指定歴史的建造物）

旧寿原邸

旧寿原邸は、『北海道の近代和風建築』（北海道教育委員会平成 19 年（2007））によると大正元年（1912）の創建とされている。小豆将軍と呼ばれた雑穀商の高橋直治（なおじ）によって創建され、その後、小樽を代表する実業家である寿原家の邸宅となった。水天宮北側の急な傾斜地に建てられ、主屋から上手に二つの接客棟を連ねている。庭園は、斜面を三段に地割りし、上段には和室に面して池を配した日本庭園があり、中段には洋間に六角雪見灯籠を配し、下段においては、小樽港を見下ろすことができる。

（ウ）小樽聖公会（市指定歴史的建造物）

小樽聖公会

小樽聖公会の最初の会堂は、明治 28 年（1985）に建設されたが焼失しており、『日本近代建築総覧』（（日本建築学会編）昭和 55 年（1980））によると、明治 40 年（1909）に現在地に再建されたとされている。水天宮の丘の中腹にある急な石段の脇に小樽のまちを見下ろすように建ち、木造下見板張り切妻屋根に鐘撞堂（かねつきどう）をのせている。軒のレース飾り、星形模様のバラ窓、やや幅広の尖頭アーチ窓などが特徴であり、内部は正面に祭壇がある簡素な矩形の平面になっている。

（エ）旧板谷邸（市指定歴史的建造物）

旧板谷邸

旧板谷邸は、『小樽市の歴史的建造物』（小樽市教育委員会 平成６年（1994））によると、大正 15（1926）～昭和２（1927）の建築とされている。海運業などで財をなした板谷宮吉（いたやみやきち）の邸宅であり、東雲町の高台に建つ。現在は、和風の母屋とその北側に続く洋館と背面の石蔵が残されている。木造モルタル塗りの洋館には、銅板で葺いたマンサード屋根がのり、堂々とした雰囲気を醸し出している。

（オ）旧光亭（市指定歴史的建造物）

旧光亭

旧光邸は、『日本近代建築総覧』（（日本建築学会編）昭和 55 年（1980））によると、昭和 12 年（1937）の建築とされている。もとは東京信濃町の料亭「光亭」の小樽店として建てられたもので、主屋の東側に３つの棟を配置し、中央の棟には「茶室」がある。主屋は入母屋妻入りで、外壁を押縁下見板とした和風の外観が特徴となっている。２階の大広間には、座敷飾の床、付書院、地袋棚を備え、それと対面して舞台となる檜の板の間が設けられている。市内に残された本格的な数寄屋建築の料亭建物である。

③ 活動

（ア）水天宮の例大祭

水天宮の例大祭では、大正 12 年（1923）に造られた屋根の中央に金色の鳳凰（ほうおう）が飾り付けられた鳳輦（ほうれん）と、牛車をそれぞれ車両に載せ、神社を中心とした市内中心部において神輿渡御が行われる。令和元年（2019）には、神輿の鳳輦が修復され、担ぎ手による神輿渡御が行われた。特に神社周辺には、旧寿原邸や旧板谷邸といった豪商の邸宅、旧光亭や小樽聖公会など複数の歴史的建造物が残り、神輿渡御はこれらの目前を通りながら進行する。神輿渡御を行う前夜には、本殿においてたいまつを灯し、神輿に御霊を送る神事が厳かに行われる。

昭和初期頃の水天宮例大祭

例大祭は６月 14 日から 16 日にかけて行われ、その準備段階では、近隣の商店街や町内会が年ごとの当番制で、例大祭を構成する宵宮、本祭、神輿渡御、環御祭などの行程を進め、ある者は境内に掲げる提灯への名入れを希望する企業や商店に対して協賛金の集金を行い、ある者は地元商店への出店の呼びかけに奔走する。

例大祭の様子

商店街から急傾斜で伸びる石の階段の脇に掲げられる提灯は、坂のまち小樽に根差してきた祭りを象徴するものであり、その風景を見た人々は、例大祭が間近に迫っていることを感じる。

例大祭での石階段からの風景

また、普段は商店街となっている公園通りにも露店が軒を連ね、さらに地元商店が並ぶ花銀通りは、祭礼期間中の車両通行を禁止し、花銀水天市と称する地元商店街の露店が所狭しと出店される。

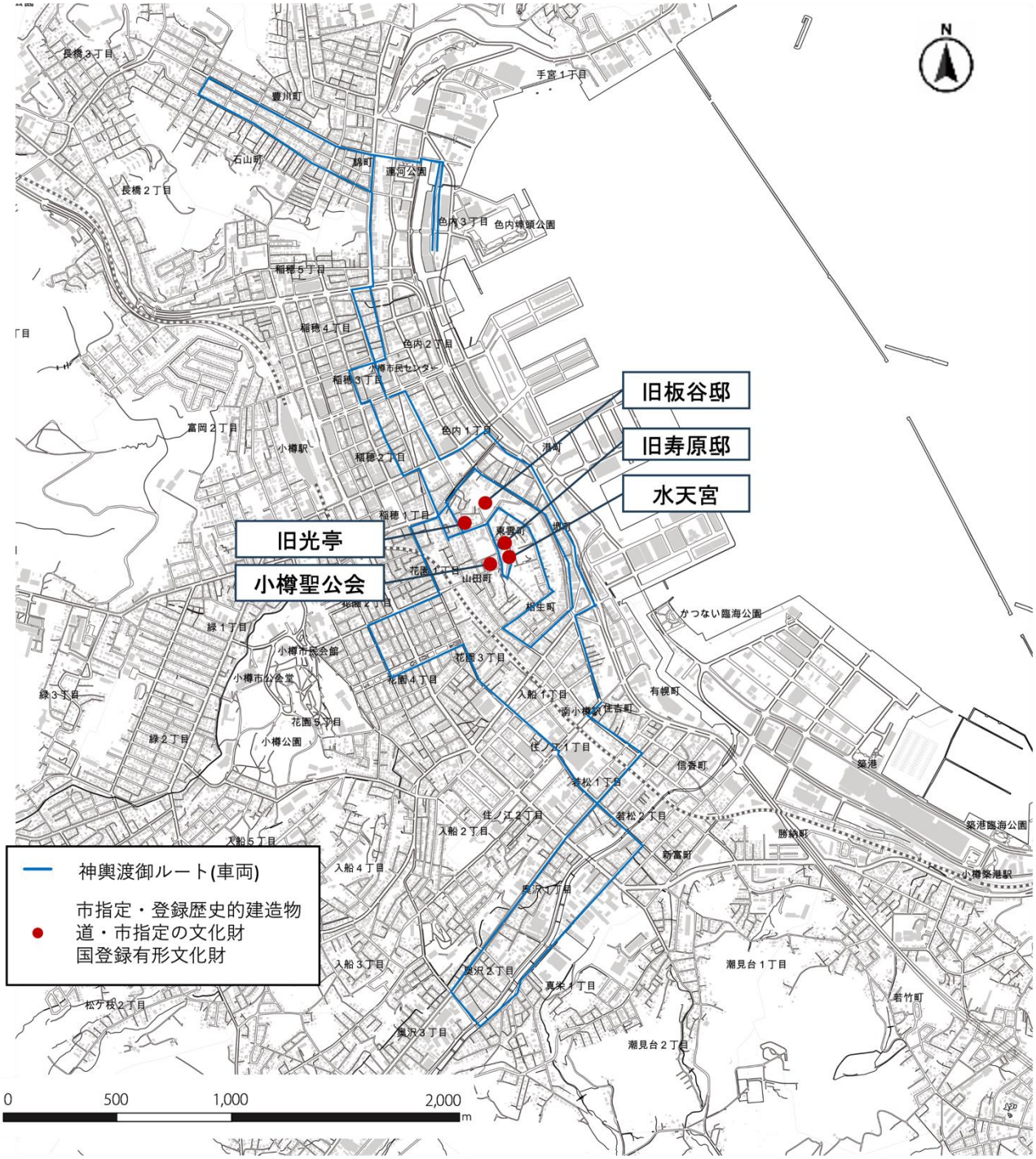
人々は、花銀通り両脇の歩道に陣取る見物客や路上に座り込みながら祭りに興じる人々の姿、笑い声を見聞きすることで、小樽の短い夏の始まりと賑やかな地元の商店街の空気を肌で感じる。

例大祭の当日、朝９時頃に水天宮本殿で渡御の開始を告げる発御祭が執り行われ、その後、神輿の中心的な担い手である地元町内会や商店街の人々が本殿前から、屋形上に金色の鳳凰を飾った鳳輦神輿のほか、牛車をそれぞれ車両に乗せて渡御する。その後、夜８時頃に本殿前で環御祭が開かれ、一連の渡御が終了する。

花園水天市での商店街

現在、鳳輦と牛車は車両による渡御となっているが、50 年以上続く商店が残る花銀通りを大正期から公開され

てきた鳳輦と牛車が渡御することにより、人々には、より活気を呈していた頃の小樽を感じさせるとともに本格的な夏の訪れを感じさせる。



水天宮の神輿渡御の経路

④ まとめ

水天宮界隈には、明治から昭和初期にかけて建てられた資産家の邸宅や教会などが残るとともに、昭和初期にみられる手古舞からも職人が多い地区であった名残が見られ、さらに妙見川（於古発川（おこぱち））周辺には明治期から続く飲食店街も現存しており、往時の小樽の面影を見ることができる。それらを背景に行われる例大祭では、大正期に造られた鳳輦などの渡御が行われ、高台から下る坂道に沿って建ち並ぶ露店が昔ながらの賑わいを今に伝え、坂のまち小樽の祭りらしい歴史的風致を形成している。

水天宮の例大祭にみる歴史的風致

（３）龍宮（りゅうぐう）神社の例大祭にみる歴史的風致

① 概要

龍宮神社の例大祭は、「小樽三大祭り」の一つであり、昭和 34 年（1959）に撮影された写真では、龍宮通りの沿道に並ぶ多くの市民と、猿田彦の面をかぶり、装束を身につけた者が先導する神輿渡御の様子が確認できる。

近年は、神輿渡御のほか、隣接する幼稚園の園児と小学生による稚児舞、「松前神楽小樽保存会」によって伝承されている松前神楽が奉奏されている。参道に建ち並ぶ露店が国道５号を超え、近隣の梁川商店街に至る風景は、龍宮神社の歴史と現代の営みが融合した中心市街地ならではの例大祭といえる。

② 建造物等

（ア）龍宮（りゅうぐう）神社本殿・幣殿・拝殿

『北海道神社庁誌』（北海道神社庁　平成 11 年（1999））によると、明治２年（1869）、現在の小樽駅周辺の国有地の払い下げの折、榎本武揚は、小祠を設け榎本家の遠祖である桓武天皇を奉仕し、移民の安意を図るため、「北海鎮護」の額を献納した。明治 31 年（1898）に大和田津美神社から龍宮神社に改称し、昭和 16 年（1941）に社殿が改築された。

龍宮神社社殿

現在の社殿は、『小樽市の歴史的建造物』（小樽市教育委員会　平成６年（1994））によると、昭和初期に建てたとされている。本殿は神明造で、拝殿は切妻造平入の正面中央間に切妻造の向拝を付した形態となっている。屋根は銅板葺で「龍宮神社」の御神額には、龍神の一刀彫りが施されている。大床の階段は、１段目が螺鈿（らでん）を施した御影石、２段目以降は１本もので造られている。

（イ）神輿渡御のルート沿いの建造物

旧渡邊酒造店（市指定歴史的建造物）

旧渡邊酒造店は、『小樽市の歴史的建造物』（小樽市教育委員会　平成６年（1994））によると、昭和５年（1930）の建築とされている。梁川通りの角地に建つ木造３階建の店舗建築であり、この地区のランドマークとなっている。外壁に褐色のタイルを張り、軒先には雷文や卵と槍の模様をつけ、２階窓上には酒樽の看板を掲げている。内部には、天井に模様を型押しした金属板を張り、壁に鏡を飾るなど、昭和初期のモダンなデザインを伝えている。

旧渡邊酒造店

（ウ）旧第 21 区火災予防番屋（市登録歴史的建造物）

旧第 21 区火災予防番屋は、『小樽市の歴史的建造物』（小樽市教育委員会　平成６年（1994））によると大正 12 年（1923）の建築とされている。火災予防番屋として建てられた木造２階建の建築であり、現在は町内会館として使われている。マンサード屋根にドーマ窓風の装飾を付け、消防にちなむ模様をあしらっている。外壁はモルタル塗りで、２階正面の上げ下げ窓にはアーチの欄間飾りを施し、正面左脇に火の見櫓を立て、半鐘を吊り下げた消防予防番屋らしい形態を残している。

旧第 21 区火災予防番屋

③ 活動

（ア）龍宮神社の例大祭

例大祭の儀式であり、神様が神輿に乗り地域を廻る神幸祭（神輿渡御）では、宮司が神馬に乗って行列とともに地域を廻る。戦前は神輿を船に乗せ、龍神旗をはためかせながらの海上渡御も行っていた。

また、かつては稲穂・色内町を中心に 500 軒以上の露店が立ち並んでいた。近年、規模は縮小しているが、地域の有志が結集する「小樽龍祭會」という神輿会が 30 年以上、担ぎ手を担っている。

昭和 34 年の龍宮神社例大祭

例大祭を迎えるにあたり、神社を中心に氏子会、龍祭會、商店街や町内会の人々が祭典委員会を組織し、祭典の準備を進める。委員会の担当者は寄付を集め、社殿に神幕を張り、提灯や幟を立て、祭りが来ることを皆に知らせる。また、神職は宵宮祭や本祭の神事を厳かに行うため、社殿の清掃や装飾を行う。

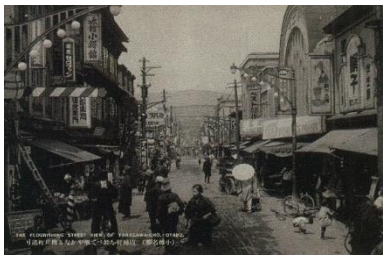
神輿渡御と通りの露店・参加者

神輿行列が通る龍宮通り、梁川通り、中央通りなどには、幟旗、軒花などが掲げられ、町内でも準備に追われる人たちの声が通りに響き渡るため、人々は地域に根差した人情味あふれる龍宮神社の例大祭が近づいていることを感じる。

また、車道である梁川通りや龍宮通りの一部は、車両の通行を禁止して、露店を楽しむ歩行者の専用道路となる。特に梁川通り・都通りでは、地元の商店街が中心となって屋外模擬店を展開している。そこでは行きつけの

例大祭での松前神楽奉奏

客や、最近ではインバウンドの観光客らでごった返し、祭りと商店街が織りなす「伝統と生活感の混在」という特有な情景を形成する。

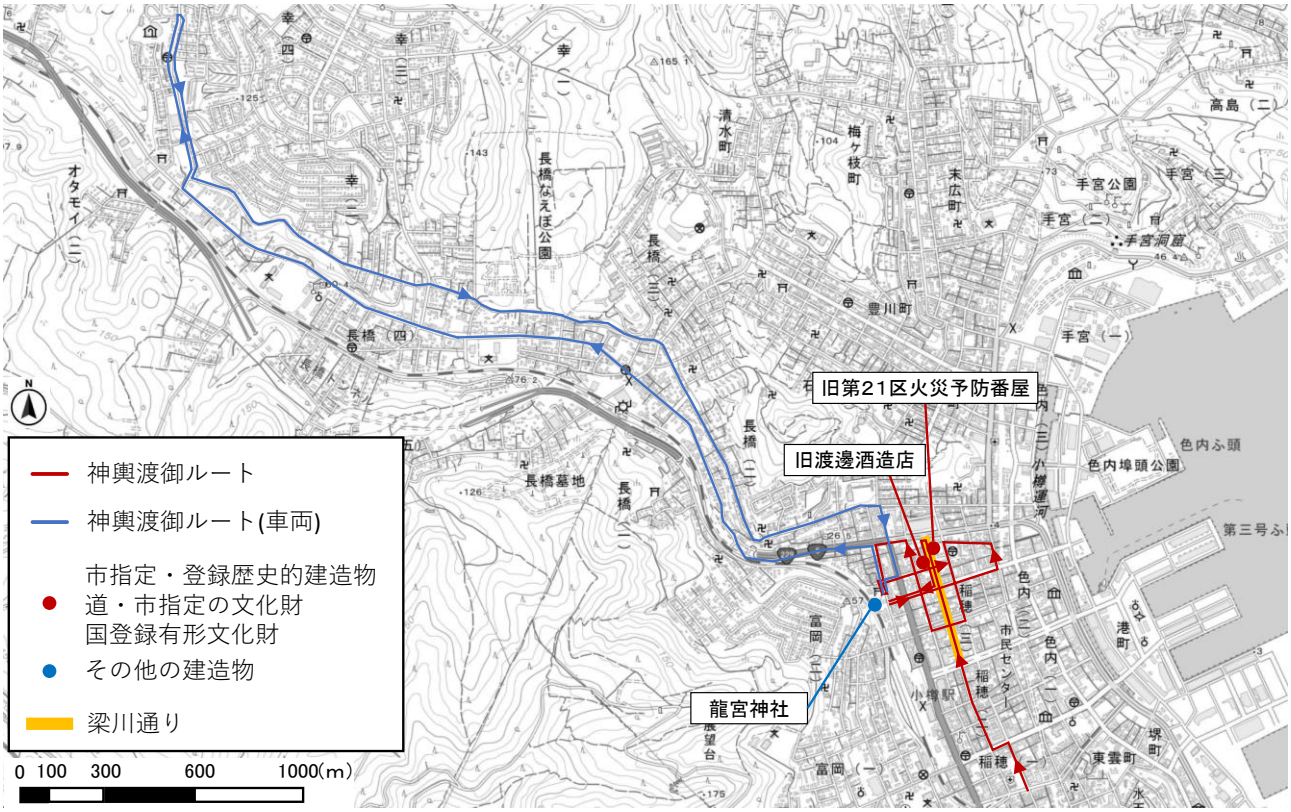

大正後期から昭和初期頃の梁川通り

例大祭の本祭日は6月21日夏至の日の朝8時から執り行われ、その後、神輿渡御の一行は神社を出発して、旧渡邊酒造店や旧第21区火災予防番屋が建ち並び、多くの露店で賑わう梁川通りを廻り、稲穂・色内・富岡からオタモイに至るまで、太鼓と神楽の音色を奏でながらゆったりと廻る。昭和34年（1959）の例大祭の様子が写真に収められている。また、多くの露店が賑わう梁川通りを通り、三ツ山病院や育成院などの施設、都通りで稚児舞や獅子舞などの神楽を披露する。

奉納行事では、子供たちによる稚児舞、松前神楽小樽保存会による松前神楽の奉奏、よさこいソーラン、空手演舞、こどもダンスなど、伝統の民俗芸能から現代ダンスまで、各種イベントが執り行われ、世代を超えて多くの人々が祭りに酔いしれ、賑わいを楽しむ。

祭りのハイライトは、神輿の宮入であり、２基の神輿が神楽に合わせて練り廻る姿に、境内では数百人の人々が熱狂する。その采配は、龍宮神社社中である龍祭會が神様の乗った神輿を担ぎ、宮出しから宮入までを取り仕切る。このように、龍宮神社の例大祭は地域によって受け継がれ、守られている大切な伝統行事である。なお、『近藤鏡次郎「松前神楽」』（松前町教育委員会・松前神楽保存会　昭和39年（1964））によると、古くから龍宮神社が小樽における松前神楽の発祥地のひとつであることが記されている。

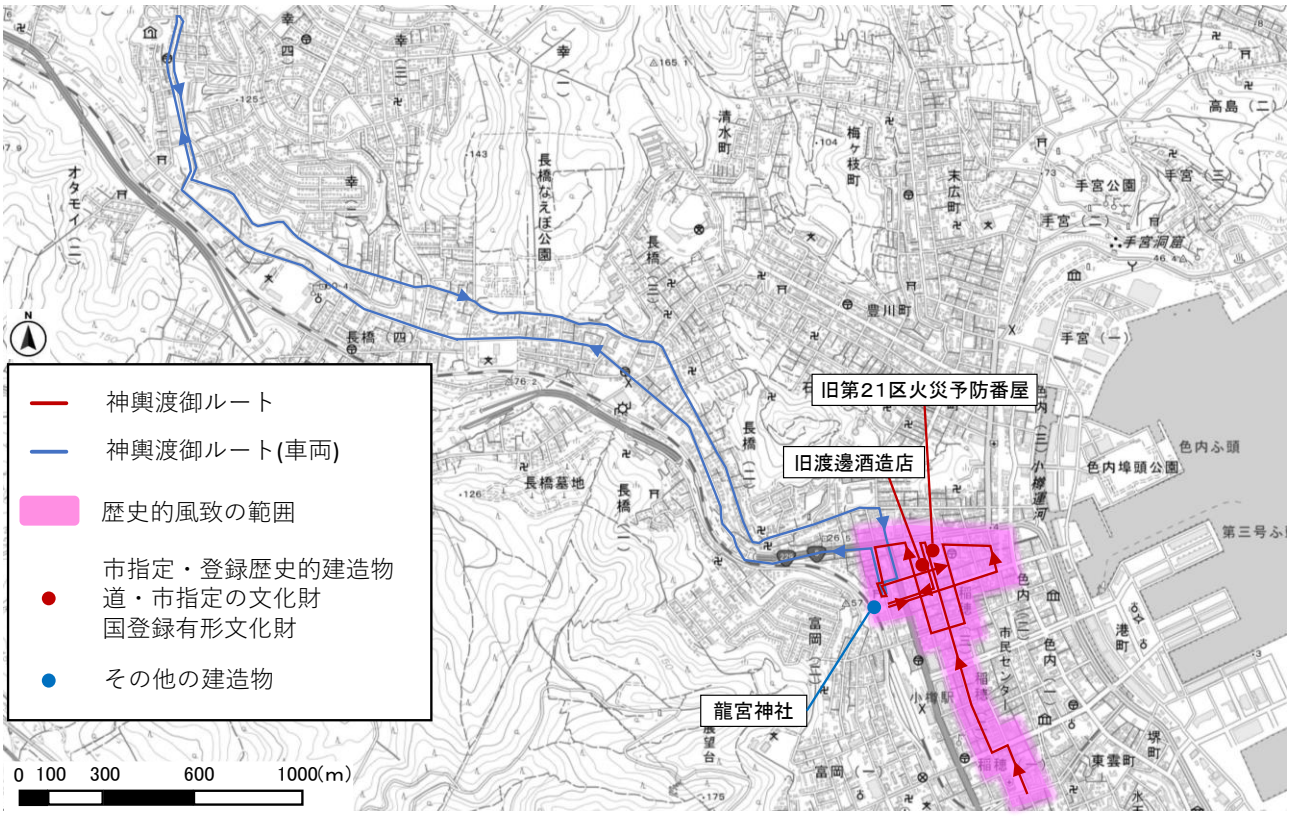
地元住民は、見慣れた通りにところ狭しと建ち並ぶ露店の中で飲み食いする人々や、浴衣を身にまとい、ひしめき合いながら歩く大勢の人たちを見て、かつて活況を極めた商店街の光景を想像することができる。



龍宮神社の神輿渡御の経路

④ まとめ

龍宮神社の例大祭は、市内の例大祭の中では最も小樽駅に近い地域で行われるため、多くの人々が祭りに訪れ、賑わいを見せている。特に、神輿渡御が行われ、多くの露店が建ち並ぶ通りは、榎本武揚にゆかりのある梁川（やながわ）通りとよばれる 100 年以上の歴史がある通りであり、町内会館や元酒造店であった歴史的建造物も残る商店街となっている。歴史ある神社と商店街を中心に行われる伝統的な例大祭は、小樽の夏の風物詩の一つとなっており、歴史的風致を形成している。



龍宮神社の例大祭にみる歴史的風致

（４）住吉（すみよし）神社の例大祭にみる歴史的風致

① 概要

住吉神社の例大祭は、「小樽三大祭り」の一つであり、その中の代表格として、「小樽まつり」とも呼ばれている。祭りは曜日に関わらず、７月 14 日から 16 日にかけて行われる。境内前の国道沿いに提灯が吊るされ、近隣の店舗に「住吉神社例大祭」と書かれた紙が貼られ、市内の広範囲において、「住吉神社例大祭」若しくは町内会の名称が書かれた幟が立てられる。また、国道５号から高台にある社殿までの参道には多くの露店が軒を連ね、大いに賑わう様子に夏祭りの風情を感じる。例大祭では、社殿の中で厳かに行われる太々神楽と、重さのある神輿を担ぐ「百貫神輿」の迫力と、静と動の伝統行事をみることができる。

市内中心部の高台に建つ小樽総鎮守「住吉神社」は、境内から海を一望できる眺望を有し、自然が豊かで、四季折々の景観を楽しむことができる。北前船主が航海の安全を祈願して奉納した「第一鳥居」や「船絵馬」が残されており、北前船の歴史にも触れることができる。

② 建造物等

（ア）住吉神社

住吉神社本殿・拝殿は、昭和 46 年（1971）、鎮座百年を記念して改築された社殿であり、傾斜地にあり高低差のある境内の頂部に建てられている。大阪の住吉大社にみられる「住吉造」と呼ばれる様式に則り、建築された。

住吉神社社務所（市指定歴史的建造物）は、『小樽市の歴史的建造物』（小樽市教育委員会 平成６年（1994））によると昭和９年（1934）の建てたとされている。木造の社務所としては、道内で最大の規模であり、平面は、中央に中庭を設けるロの字形で、本館、客殿、社務所の関係書室で構成されている。車寄せに、唐破風の屋根をかけ、母屋の千鳥破風と対になっている。地元の加藤忠五郎が設計し、大虎が施工している。

住吉神社は、多くの経済人から鳥居や灯籠、手水桶など多くの寄進を受けている。その一つである第一鳥居は、加賀出身の北前船主である廣海二三郎と大家七平から寄進を受けており、二人の名と明治 32 年（1899）の建造であることが刻まれている。

住吉神社本殿

住吉神社拝殿

住吉神社社務所

住吉神社　第一鳥居

（イ）神輿渡御のルート沿いの建造物

住吉神社の車両による神輿渡御は本体と分隊の２班体制で行われる。広範囲に及ぶが、複数の神輿及び楽人を載せた本隊は、歴史的なまちなみが残る市内中心部を巡り、そのルート沿いには、複数の歴史的建造物が点在する。

神輿渡御は、第一鳥居を寄進した北前船主の広海二三郎と一手積契約や汽船運賃積み契約を結ぶなどビジネス面でのつながりがあった旧日本郵船株式会社小樽支店前を通るほか、寄進をした北前船主の倉庫前などを通っている。

本隊による神輿渡御のルート沿いの歴史的建造物は以下のとおり。

本隊による神輿渡御のルート沿いの歴史的建造物一覧

番号	建造物名称	外観	所在地	所有者	建設年代	構造・階数	建設年代根拠
1	龍徳寺本堂		真栄1	民間	明治9年（1876）	木 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
2	旧遠藤又兵衛邸		富岡1	民間	明治44年前（1911）	木 1階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会　平成6年（1994））
3	旧手宮鉄道施設		手宮1	公共	明治18年（1885）～大正8年（1919）	レンガ 1階	重要文化財
4	旧右近倉庫		色内3	民間	明治27年（1894）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
5	旧広海倉庫		色内3	民間	明治22年（1889）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
6	旧増田倉庫		色内3	民間	明治36年（1903）	木骨石 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会　平成6年（1994））
7	旧日本郵船株式会社小樽支店輸出倉庫		色内3	公共	明治31年（1898）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
8	旧日本石油㈱倉庫		色内3	公共	大正9年（1920）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
9	旧日本郵船株式会社小樽支店		色内3	公共	明治39年（1906）	石 2階	重要文化財
10	旧日本郵船株式会社小樽支店残荷倉庫		色内3	民間	明治39年（1906）	石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
11	旧早川支店		色内2	民間	明治37年（1904）	木骨石 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会　平成6年（1994））
12	旧前堀商店		色内2	民間	昭和初期	木 3階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
13	旧磯野支店倉庫		色内2	民間	明治39年（1906）	レンガ 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
14	旧横浜正金銀行小樽出張所		色内2	民間	昭和2年（1927）	木 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
15	旧安田銀行小樽支店		色内2	民間	昭和5年（1930）	鉄筋コンクリート 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会　平成6年（1994））

番号	建造物名称	外観	所在地	所有者	建設年代	構造・階数	建設年代根拠
16	旧第四十七銀行小樽支店		色内1	民間	昭和11年 （1936）	木 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
17	旧梅屋商店		色内1	民間	明治39年 （1906）	木骨石 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
18	旧塚本商店		色内1	民間	大正9年 （1920）	木骨鉄網 コンクリート 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
19	旧小樽商工会議所		色内1	民間	昭和8年 （1933）	鉄筋 コンクリート 3階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会　平成6年（1994））
20	旧越中屋ホテル		色内1	民間	昭和6年 （1931）	鉄筋 コンクリート 3階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会　平成6年（1994））
21	旧三井銀行小樽支店		色内1	民間	昭和2年 （1927）	鉄骨鉄筋 コンクリート 2階	重要文化財
22	旧北海道拓殖銀行小樽支店		色内1	民間	大正12年 （1923）	鉄筋 コンクリート 4階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会　平成6年（1994））
23	旧三菱銀行小樽支店		色内1	民間	大正11年 （1922）	鉄筋 コンクリート 4階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会　平成6年（1994））
24	旧第一銀行小樽支店		色内1	公共	大正13年 （1924）	鉄筋 コンクリート 4階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会　平成6年（1994））
25	旧北海道銀行本店		色内1	民間	明治45年 （1912）	石 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会　平成6年（1994））
26	日本銀行旧小樽支店		色内1	民間	明治45年 （1912）	レンガ 2階	小樽市文化財
27	旧三井物産小樽支店		色内1	民間	昭和12年 （1937）	鉄筋 コンクリート 5階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会　平成6年（1994））
28	旧渡邊酒造店		稲穂4	民間	昭和5年 （1930） ～昭和6年頃 （1931）	木 3階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
29	旧丸ヨ白方支店		稲穂2	民間	明治40年 （1907） ～昭和5年 （1930）	木 3階一部4階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
30	旧塩田別邸		入船2	民間	大正1年頃 （1912）	母屋：木 1階一部2階 蔵：木骨石 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））

番号	建造物名称	外観	所在地	所有者	建設年代	構造・階数	建設年代根拠
31	旧小樽組合基督教会		花園4	民間	大正15年 （1926）	木 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会　平成6年（1994））
32	小樽市庁舎		花園2	公共	昭和8年 （1933）	鉄筋 コンクリート 3階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会　平成6年（1994））
33	旧百十三銀行小樽支店		堺町	民間	明治41年 （1908）	木骨石 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会　平成6年（1994））
34	旧金子元三郎商店		堺町	民間	明治20年 （1887）	木骨石 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
35	旧岩永時計店		堺町	民間	明治29年 （1896）	木骨石 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会　平成6年（1994））
36	旧第百十三国立銀行小樽支店		堺町	民間	明治26年 （1893）	石 1階	北海道住宅都市部「北海道の古建築と街並み」昭和54年（1979）
37	旧北海雑穀㈱		堺町	民間	明治44年以前 （1911）	木骨石 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
38	旧久保商店		堺町	民間	明治40年 （1907）	木 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
39	旧木村倉庫		堺町	民間	明治24年 （1891）	木骨石 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
40	旧戸出物産小樽支店		入船1	民間	大正15年 （1926）	鉄筋 コンクリート 3階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
41	旧中越銀行小樽支店		入船1	民間	大正13年 （1924）	鉄筋 コンクリート 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
42	旧共成㈱		住吉町	民間	大正4年 （1915）	木骨煉瓦 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会　平成6年（1994））
43	旧魁陽亭		住吉町	民間	明治29年 （1896）以降	木 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
44	猪股邸		住吉町	民間	明治39年 （1906）	木 3階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1995））
45	旧小堀商店		住吉町	民間	昭和7年 （1932）	木骨鉄網 コンクリート 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））

番号	建造物名称	外観	所在地	所有者	建設年代	構造・階数	建設年代根拠
46	旧作左部商店蔵		住吉町	民間	昭和7年 （1933）	土 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））
47	旧岡崎倉庫		信香町	民間	1号棟 ：明治38年 （1905） 2・3号棟 ：明治39年 （1906）	木骨石 1階一部2階	登記簿謄本

③ 活動

（ア）住吉神社の例大祭

住吉神社の例大祭は、曜日に関わらず、７月 14 日から 16 日にかけて行われ、大正から昭和初期にかけて撮影された例大祭の写真が残っている。近隣の店舗や住宅には「住吉神社例大祭」と書かれた紙が貼られ、市内の広範囲に「住吉神社例大祭」又は町内会の名称が書かれた幟が立てられる。

大正から昭和初期の例大祭

境内前の国道沿いには提灯が吊るされ、そこから高台に建つ社殿までの参道や周辺の通りには多くの露店が軒を連ね、大いに賑わう様子に夏祭りの風情を感じる。また、社殿の中で厳かに行われる太々神楽と、迫力ある「百貫神輿御幸渡御」といった伝統行事を見ることができる。

『小樽総鎮守住吉神社鎮座百五十年記念誌』（住吉神社　令和６年（2024））によると、百貫神輿は、大正時代の中期に作られた北海道内で最大級の神輿である。住吉神社例大祭に担がれていたが、戦後しばらく使用されず、平成９年（1997）、鎮座 130 年を記念して修復された。

住吉神社「百貫神輿」

渡御は必ず７月 15 日の夜に行われ、拍子木を合図に一斉に神輿が担がれ、百貫神輿の宮出しが行われる。威勢のよいかけ声が響きわたる中、神輿を担いで参道の急な階段を降り、軒を連ねる露店を通り抜けていくと、見物客が取り囲み、大いに盛り上がりを見せる。

神輿渡御（本隊）

また、百貫神輿のほかに、四神神輿など４基の神輿を所蔵しており、車両による神輿渡御が行われる。本体と分隊による２班体制で行われ、本隊は３基の神輿、分隊は２基の神輿の渡御を行うことを基本とする。車両は、先導車、神輿を載せる車、饌米車で構成し、本隊はこれに楽人や子供を乗せる車両などが加わる。楽人による演奏や録音による祭ばやしを流しながら、神社を中心に市内各所を広く回る。

渡御の範囲は、本隊は主に市内中心部を回り、分隊は西はオタモイ方面、東は張碓方面までの広域となる。ルート上には、氏子の会社や自宅などがあり、本隊が回る市内中心部のルート沿いには、鳥居や灯籠などを寄進した北前船や海運業などにより財を成した経済人が建てた歴史的建造物が所在し、これらの地域を渡御することにより、航海の安全や小樽の海運業の発展を祈願してきた。

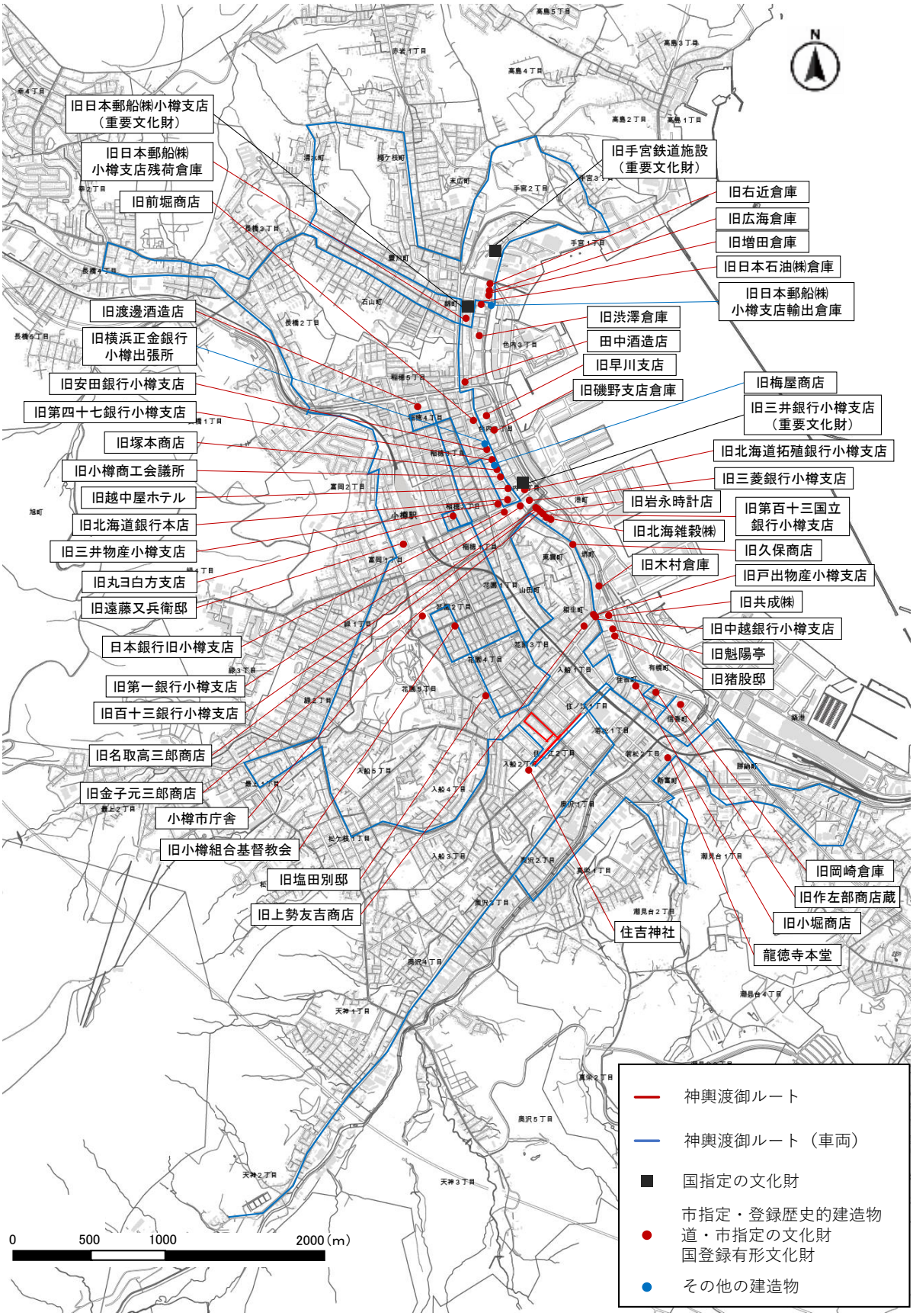
沿道の様子

神輿渡御が行われる地域には、地元町内会などの手により立てられた例大祭の幟が祭の雰囲気を高めている。旧三井銀行小樽支店や旧小樽商工会議所など多くの歴史的建造物の目前で神輿渡御が行われる様子は、沿道の幟や楽人が奏でる笛や太鼓による祭ばやしと相まって、歴史的情緒を感じさせる。

住吉神社の例大祭では、神輿渡御の他に太々神楽の奉奏が行われる。明治 21 年（1888）、神社三代目宮司の星野十九七（つくな）が郷里新潟県三条市の八幡神社楽人を招き、家族と氏子に伝承させ、明治 22 年（1889）に「住吉神社太々神楽」と称し奉奏したのが、この神楽の北海道におけるはじまりである。以来、この神楽は、住吉神社の例大祭をはじめとする祭礼行事において奉奏されている。昭和 44 年（1969）の北海道小樽商業高等学校教諭増田又喜氏の研究資料によると、「明治 21 年（1888）に当時の社司星野十九七氏が故郷の新潟県三条市八幡宮の神楽を氏子有志に習わせたことがはじまり」との記述があり、昭和 44 年段階ですでに詳細な調査が行われている。

太々神楽「福神遊」

太々神楽の構成は、稚児舞、伶人舞、大舞、戦後再興された舞に大別される。例大祭においては、太々神楽は社殿内で 10 座程度が奉奏され、参拝者も見学することができる。

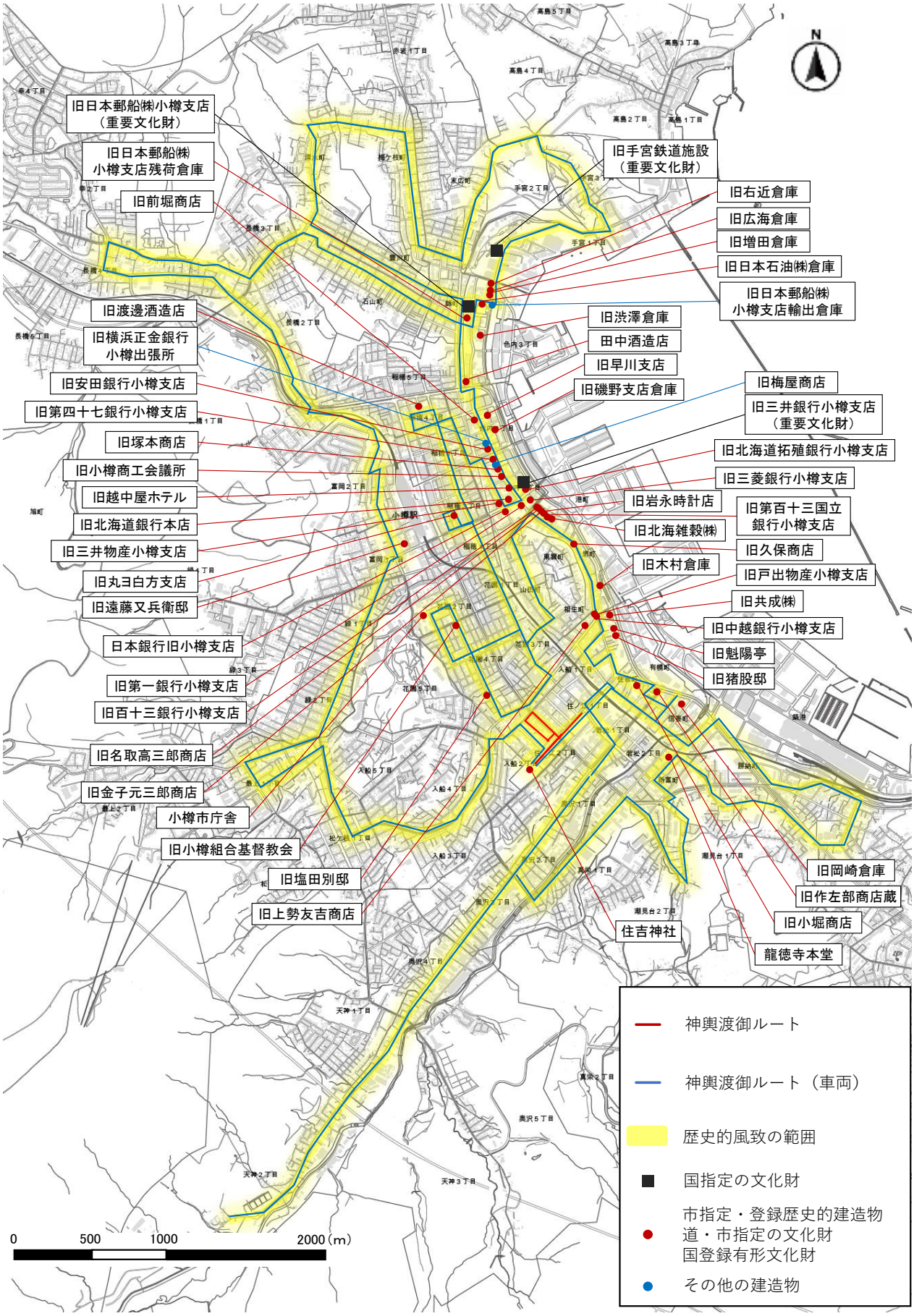


住吉神社の神輿渡御の経路

④ まとめ

「小樽まつり」とも呼ばれる住吉神社の例大祭は、市内の例大祭の中で最も規模の大きな祭りである。かつては、祭の日を休みとする学校や企業もあったほど、広く市民に親しまれてきた例大祭である。この例大祭に呼応するように、町内会でも小さな祭りの催しなどが行われ、広範囲に立てられた幟と、神輿渡御で聞こえてくる祭ばやしにより、市内の広範囲にわたり小樽まつり一色といった雰囲気に包まれる。

歴史ある神社で行われる祭礼行事と、神社の境内及び周辺の露店の賑わい、歴史的建造物が所在する街並みを背景に行われる神輿渡御や地域の催しなど祭りを通した人々の営みが、小樽らしい歴史的風致を形成している。



住吉神社の例大祭にみる歴史的風致

（５）おたる潮まつりにみる歴史的風致

① 概要

昭和 33 年（1958）の北海道博覧会の成功を契機とし、それまで実施されてきた「港まつり」、「競争花火大会」、「北海道工業品共進会」、「見本市」などを統合し、「みなと小樽商工観光まつり」が開催された。昭和 34 年（1959）から昭和 41 年（1966）まで８回開催されたものの、小樽の特徴が生かされていないなどの意見もあり、９名の市民で構成する企画小委員会が設けられ、斜陽といわれ始めていた小樽を元気づけるまつりとして、今日の「おたる潮まつり」が提案された。

昭和 42 年（1967）、「第１回おたる潮まつり」が第３号ふ頭で開催され、第２回から小樽公園に移されたが、昭和 56 年（1981）の第 15 回目から第３号ふ頭に戻り、現在に至っている。

タイトルの「潮」は、海に育ち、海に生きる小樽市民の燃えるような心意気と気概を「潮」のしぶきのイメージで表現したもので、動的な流れ、いわば跳躍する郷土の明日のために考えついた名称である。

おたる潮まつりは、北海道が最も暑くなる時期に、小樽港、運河、歴史的建造物などを背景に市内中心部で行われ、踊り行列や太鼓の演奏、神輿のパレードなど様々な要素が繰り広げられる小樽らしい祭りである。

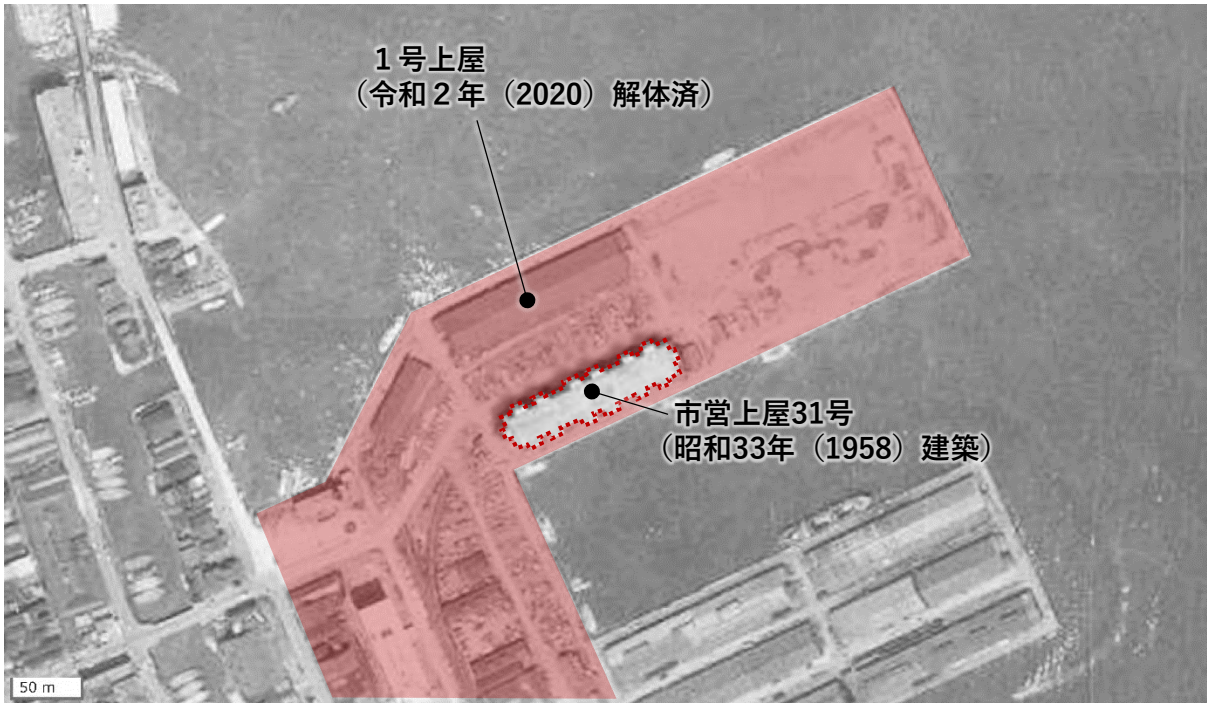
② 建造物等

（ア）第３号ふ頭

第３号ふ頭は、戦後本格的な埠頭（ふ）として段階的に整備され、『小樽港における埋め立ての歴史』（北海道開発局小樽開発建設部　平成３年（1991））によると、昭和 29 年（1954）に基部側の第一期部分、昭和 42 年（1967）に先端側の第二期部分の整備が完了したとされている。整備後は主にヨーロッパ向け製材の積出し埠頭として利用されていた。その後、時代の経過とともに取扱貨物も変化し、現在では飼料原料や完成自動車、水産品等のロシア貿易の貨物が取り扱われているとともに、北海道観光の海の玄関としての役割を担い、大型のクルーズ客船も接岸するふ頭である。ふ頭基部については、おたる潮まつりのほか、様々なイベントなどにも使用される。

第3号ふ頭

なお、埠頭に現存する市営上屋 31 号が昭和 36 年（1961）～昭和 44 年（1969）に撮影された航空写真からも確認できる。また、市営上屋 31 号に面する付近の岸壁は長い間波や風にさらされて相応の年数を経ている様子がうかがえる。



第３号ふ頭の航空写真の比較
上：昭和 36 年（1961）～昭和 44 年（1969）
下：平成 20 年（2008）

（イ）小樽運河

91 ページ参照

（ウ）旧国鉄手宮線

95 ページ参照

（エ）おたる潮まつり開催地周辺の歴史的建造物

おたる潮まつりでは、踊りや神輿パレード、潮太鼓の演奏、花火大会など色々な催しが行われるが、潮音頭による踊り（潮ふれこみ、潮ねりこみ）、潮太鼓、花火大会はまつりの開催当初から行われている。特に、会場周辺に鳴り響く潮音頭に合わせて踊る潮ふれこみ及び潮ねりこみは、歴史的建造物が建ち並ぶ市内中心部を縦横断するルートで行われている。

おたる潮まつり開催地周辺の歴史的建造物

番号	建造物名称	外観	所在地	所有者	建設年代	構造・階数	建設年代根拠	現在の用途
1	旧大家倉庫		色内2	民間	明治24年（1891）	木骨石 1階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会 平成6年（1994））	倉庫
2	旧早川支店		色内2	民間	明治37年（1904）	木骨石 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会 平成6年（1994））	物販店
3	旧前堀商店		色内2	民間	昭和初期	木骨鉄網コンクリート 一部木骨石 3階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	住宅
4	旧磯野支店倉庫		色内2	民間	明治39年（1906）	レンガ 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	飲食店
5	旧小樽倉庫		色内2	公共	明治23年（1890）～明治27年（1894）	木骨石 1階 木骨レンガ 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会 平成6年（1994））	博物館 物販店 飲食店
6	旧横浜正金銀行小樽出張所		色内2	民間	昭和2年（1927）	木 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	事務所
7	旧安田銀行小樽支店		色内2	民間	昭和5年（1930）	鉄筋コンクリート 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会 平成6年（1994））	飲食店
8	旧北海製罐倉庫㈱第3倉庫		港町4	公共	大正13年（1924）	鉄筋コンクリート 4階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	倉庫
9	旧北日本汽船倉庫		港町5	民間	昭和3年（1928）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	飲食店

番号	建造物名称	外観	所在地	所有者	建設年代	構造・階数	建設年代根拠	現在の用途
10	旧篠田倉庫		港町5	民間	大正14年（1925）	木骨レンガ 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	飲食店
11	小樽倉庫（1番庫・2番庫）		港町5	民間	大正13年（1924）	鉄筋コンクリート 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	飲食店
12	渋澤倉庫（小樽B号倉庫）		港町5	民間	大正14年（1925）以前	鉄筋コンクリート 2階	古写真等	集会所 駐車場
13	渋澤倉庫（小樽C号倉庫）		港町5	民間	昭和16年（1941）	木 2階	古写真等	飲食店
14	旧浪華倉庫		港町6	民間	大正14年（1925）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	美術館（小樽芸術村）
15	旧第四十七銀行小樽支店		色内1	民間	昭和11年（1936）	木 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会平成6年（1994））	物販店 事務所
16	旧塚本商店		色内1	民間	大正9年（1920）	木骨鉄網コンクリート 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	飲食店 物販店
17	旧小樽商工会議所		色内1	民間	昭和8年（1933）	鉄筋コンクリート 3階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会平成6年（1994））	ホテル
18	旧越中屋ホテル		色内1	民間	昭和6年（1931）	鉄筋コンクリート 4階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会平成6年（1994））	ホテル
19	旧荒田商会		色内1	民間	昭和10年（1935）	木 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	美術館（小樽芸術村）
20	旧高橋倉庫		色内1	民間	大正12年（1923）	木骨石 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	美術館（小樽芸術村）
21	旧通信電設浜ビル		色内1	民間	昭和8年（1933）	鉄筋コンクリート 4階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	飲食店 物販店
22	旧嶋谷倉庫		色内1	民間	明治25年（1892）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	飲食店
23	旧三井銀行小樽支店		色内1	民間	昭和2年（1927）	鉄骨鉄筋コンクリート 2階	重要文化財	美術館（小樽芸術村）

番号	建造物名称	外観	所在地	所有者	建設年代	構造・階数	建設年代根拠	現在の用途
24	旧北海道拓殖銀行 小樽支店		色内1	民間	大正12年 （1923）	鉄筋 コンクリート 4階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会 平成6年（1994））	美術館 （小樽芸術村）
25	旧三菱銀行小樽支店		色内1	民間	大正11年 （1922）	鉄筋 コンクリート 4階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会 平成6年（1994））	バス ターミナル
26	旧第一銀行小樽支店		色内1	公共	大正13年 （1924）	鉄筋 コンクリート 4階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会 平成6年（1994））	縫製工場
27	旧北海道銀行本店		色内1	民間	明治45年 （1912）	石 2階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会 平成6年（1994））	飲食店 事務所
28	旧三井物産小樽支店		色内1	民間	昭和12年 （1937）	鉄筋 コンクリート 5階	「日本近代建築総覧」（日本建築学会 平成6年（1994））	事務所
29	旧小樽地方貯金局		色内1	公共	昭和27年 （1952）	鉄筋 コンクリート 3階	「小樽地方貯金局五十年史」昭和41年（1966）	文学館 美術館
30	日本銀行旧小樽支店		色内1	民間	明治45年 （1912）	レンガ 2階	小樽市文化財	資料館
31	旧第21区火災予防番屋		稲穂4	民間	大正12年 （1923）	木 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	会館
32	旧渡邊酒造店		稲穂4	民間	明治40年 （1907）	レンガ 4階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	－
33	JR小樽駅		稲穂2	民間	昭和9年 （1934）	鉄筋 コンクリート 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	駅舎
34	旧丸ヨ白方支店		稲穂2	民間	明治40年 （1907）～ 昭和5年 （1930）	木 3階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	－
35	旧向井呉服店支店倉庫		稲穂1	民間	明治40年 （1907）	レンガ 3階 一部4階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	－
36	旧松村商店		稲穂1	民間	明治32年 （1899）	木骨石 1階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	物販店
37	黒瀬病院		花園3	民間	大正13年 （1924）	木 2階	「小樽市の歴史的建造物」（小樽市教育委員会　平成6年（1994））	宿泊施設

③ 活動

（ア）おたる潮まつり

海への感謝をテーマに市民がつくる市民参加型のお祭りとして、昭和 42 年（1967）、「第１回おたる潮まつり」が第３号ふ頭を主会場として開催された。第２回から小樽公園に移されたが、昭和 56 年（1981）の第 15 回からは、第３号ふ頭に戻り、現在に至っている。なお、第１回おたる潮まつりのチラシが残されている。

第１回おたる潮まつりのチラシ

近年は７月の最終金曜、土曜、日曜の３日間で開催されている。祭りの期間中は、第３号ふ頭の会場に特設ステージが設けられ、ステージ上では訪れた人々を楽しませる様々な出し物が披露されるほか、ステージの周辺には多くの露店が建ち並び、市民のみならず多くの観光客で大いに賑わうこととなる。

祭りでは様々な催しが行われるが、「潮ふれこみ」、「潮ねりこみ」、「潮太鼓」、「御神水奉納」、「神輿パレード」、「大花火大会」が長く続けられている。

（ａ）潮ふれこみと潮ねりこみ

「潮ふれこみ」、「潮ねりこみ」ともに、「潮音頭」と「潮踊り唄」の２曲の音頭に合わせ、浴衣姿や法被姿の祭り参加者が行列をなして市内中心部を踊りながら練り歩く。おたる潮まつりは、第１回の企画段階から多くの市民が参加することを重要視しており、踊りの行列がまつりの核となっている。なお、第１回から使用されている潮音頭は、歌手の三波春夫氏が歌っている。

おたる潮まつり（潮ねりこみ）

潮ふれこみは、まつりの始まりを街中にふれて回る役割を持つため、まつりの初日に行われる。行列の参加者は、潮コンシェルジュ（小樽コンシェルジュ）、まつりの役員、踊り社中が中心であり、これらの人々が列を成し、正調の踊りといわれる基本の振り付けの踊りを踊りながら、都会館（旧第 21 区火災予防番屋）を出発し、特設ステージのある第３号ふ頭へ向けて練り歩く。

潮ねりこみは、まつりの２日目に行われ、職場や町内会などの単位で梯団とよばれるグループを組み、花園グリーンロード（令和６年はサンモール一番街入口）を出発し、大きな列を成して特設ステージを目指して市街を踊りながら進む。「潮音頭」と「潮踊り唄」の２曲に合わせて踊るが、正調の踊りとは異なり、各梯団が趣向を凝らした踊りを披露するもので、まつりのメインイベントに位置付けられる。観覧者などが申し込みなしで参加できる「とびいり DE 踊り隊」も用意されている。

（ｂ）潮太鼓

まつりの期間中、第１回のまつりを契機に結成された「おたる潮太鼓保存会」により、小樽っ子の心意気を叩きあげる「おたる潮太鼓」が、毎年会場等で披露される。おたる潮太鼓保存会は、年齢によって親潮隊（成人）、ハマナス隊（中学生・高校生）、若潮隊（小学生以下）に分かれている。おたる潮太鼓は、独自のリズムと演奏スタイルを持っており、主な演奏内容としては、親衛隊とハマナス隊を中心に、小樽に打ち寄せる日本海の荒波を大太鼓、小太鼓で表現した「潮太鼓」、若潮隊は樽を使って揃え打つ「若潮太鼓」、保存会結成 30 周年の際に創作された、山から吹く風を表現した揃え打ちの「山背」などがある。

打演は、会場の特設ステージだけでなく、手造りの山車に太鼓を載せて行われ、潮ふれこみや潮ねりこみの行列を盛り上げている。また、まつりが近づくと、市内や周辺でのキャラバンに参加して、祭りの事前 PR も行っている。

潮太鼓

潮太鼓（山車）

キャラバン

（ｃ）御神水奉納

初日に特設ステージで行われるもので、まつりの開催前に海から汲み上げられた水を潮コンシェルジュ（小樽コンシェルジュ）に手渡し、まつりの開幕を告げる儀式「御神水奉納」としている。かつては、御神水奉納に絡めて、漁船や屋形船による小樽港内パレードの「潮わたり」が行われていた。

御神水奉納

（ｄ）神輿パレード

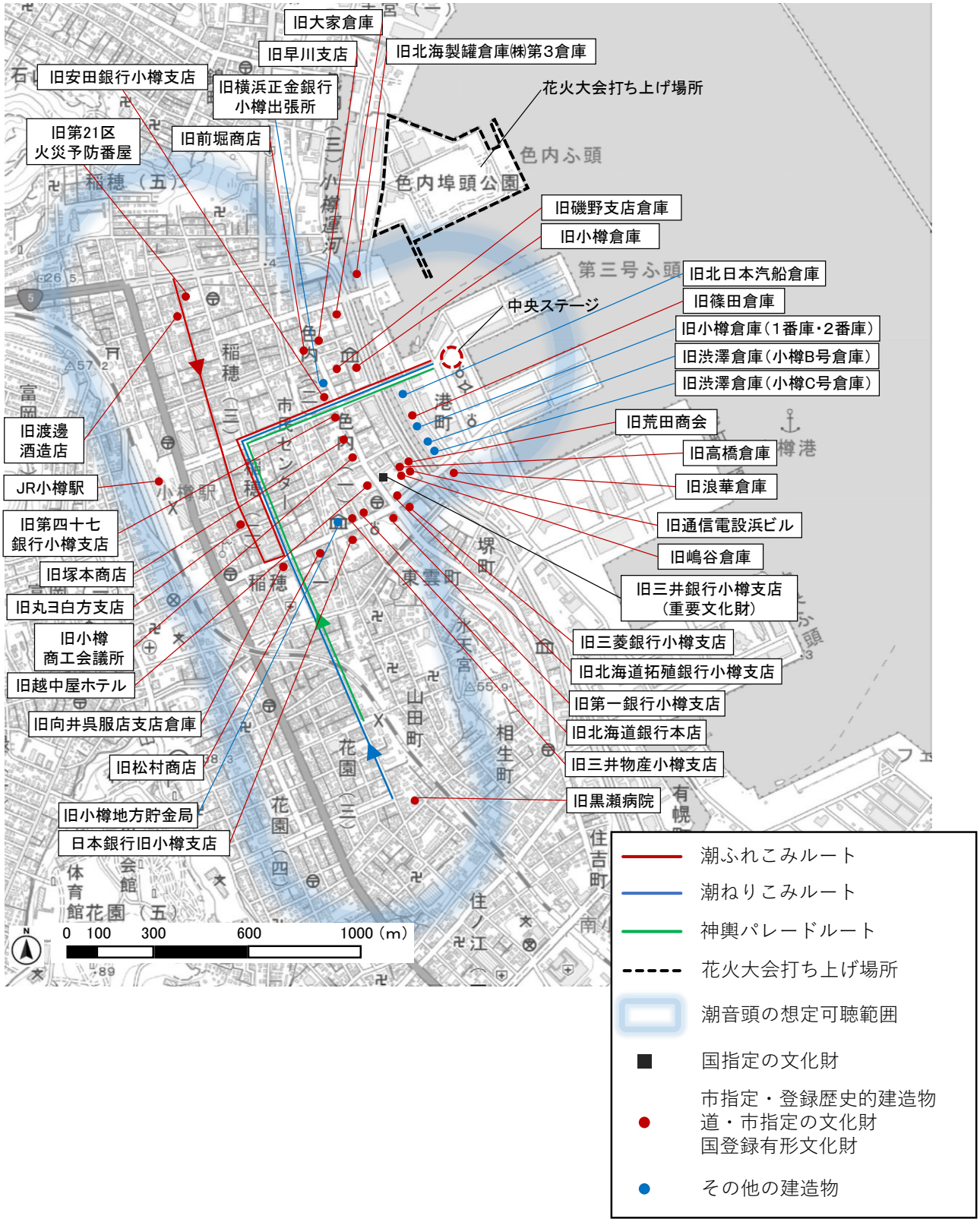
まつりの最終日に、市内の神輿愛好会が所有する神輿と、市内の神社から貸し出された複数の神輿を担いで、市街を練り歩く「神輿パレード」が行われる。昭和 58 年（1983）に、住吉神社の百貫神輿が、潮まつりに貸し出され、潮ねりこみに参加したのが始まりである。パレードのルートとなる中央通りに、いくつもの神輿が連なって進む様子は、このまつりならではの光景である。

神輿パレード

（ｅ）大花火大会

大花火大会

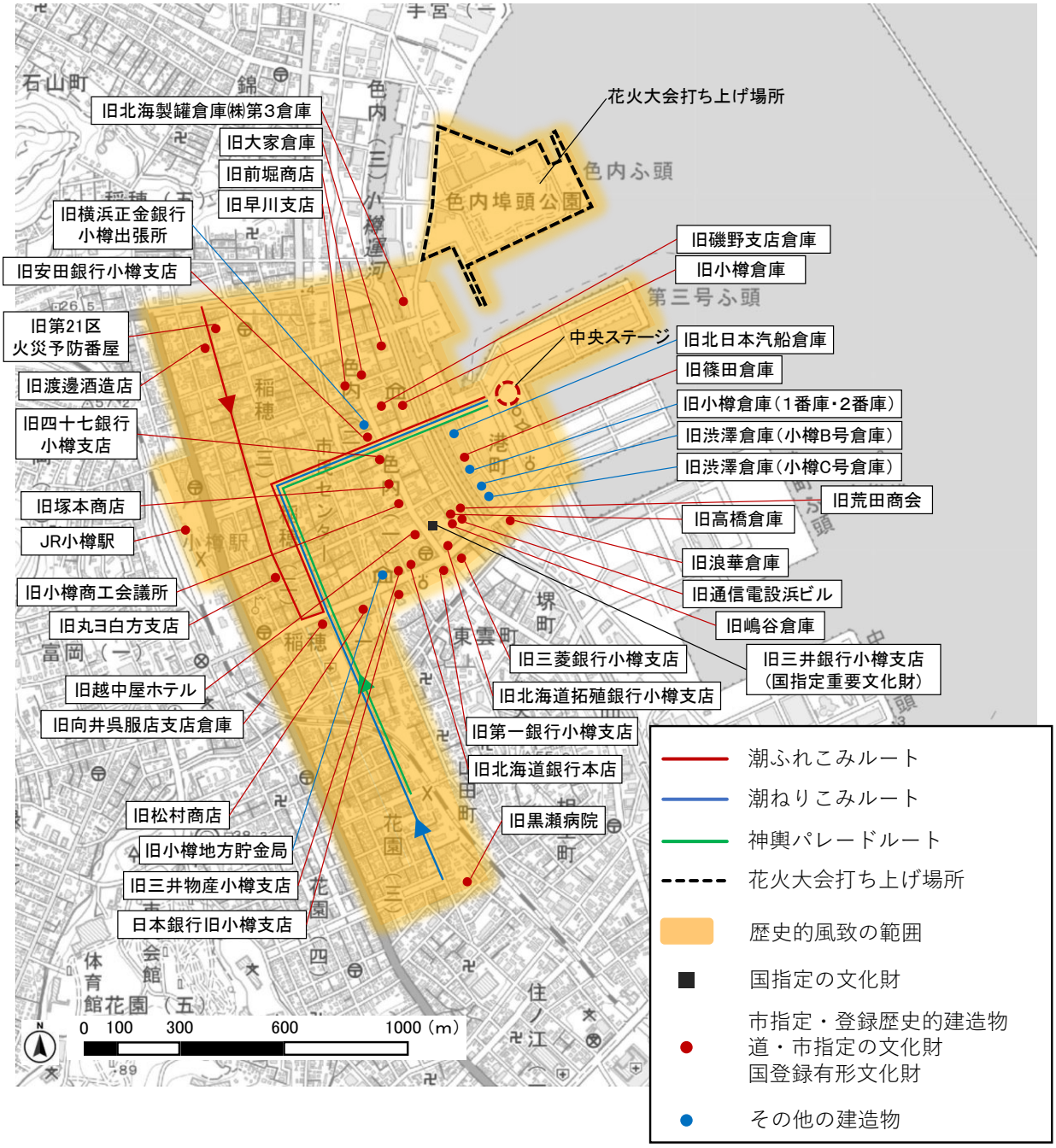
まつりの最終日に行われる「大花火大会」は、潮ふれこみ、潮ねりこみ、潮太鼓と同じく第１回目から続けられている。ふ頭の公園から打ち上げられる花火は、坂のまちとして知られる小樽では、市内各所から見ることができる。小樽市市制施行 100 周年の年であった令和４年（2022）には、コロナ退散を願い最終日に直径 600～650ｍにもおよぶ３尺玉の大玉花火が打ち上げられた。また、近年は、花火大会の前にドローンショーが行われるなど、まつりの来訪者を楽しませている。



潮まつりの踊り・パレードの経路

④ まとめ

おたる潮まつりは、昭和 42 年(1967)から始まった比較的新しいまつりであるが、本市の歴史的なまちなみを形成する小樽港、小樽運河、歴史的建造物などを背景に、潮音頭や潮太鼓が鳴り響く中、多くの市民が参加し、まちをあげて盛り上げる小樽らしい祭りである。市内各地で行われる神社の例大祭とともに、小樽の夏の風物詩として定着している。歴史的なまちなみが残る市内中心部で繰り広げられ、おたる潮まつりの一連の催しは、小樽を元気にしたいという当初からの思いを今も市民に思い起こさせ、一つの重要な歴史的風致を形成している。

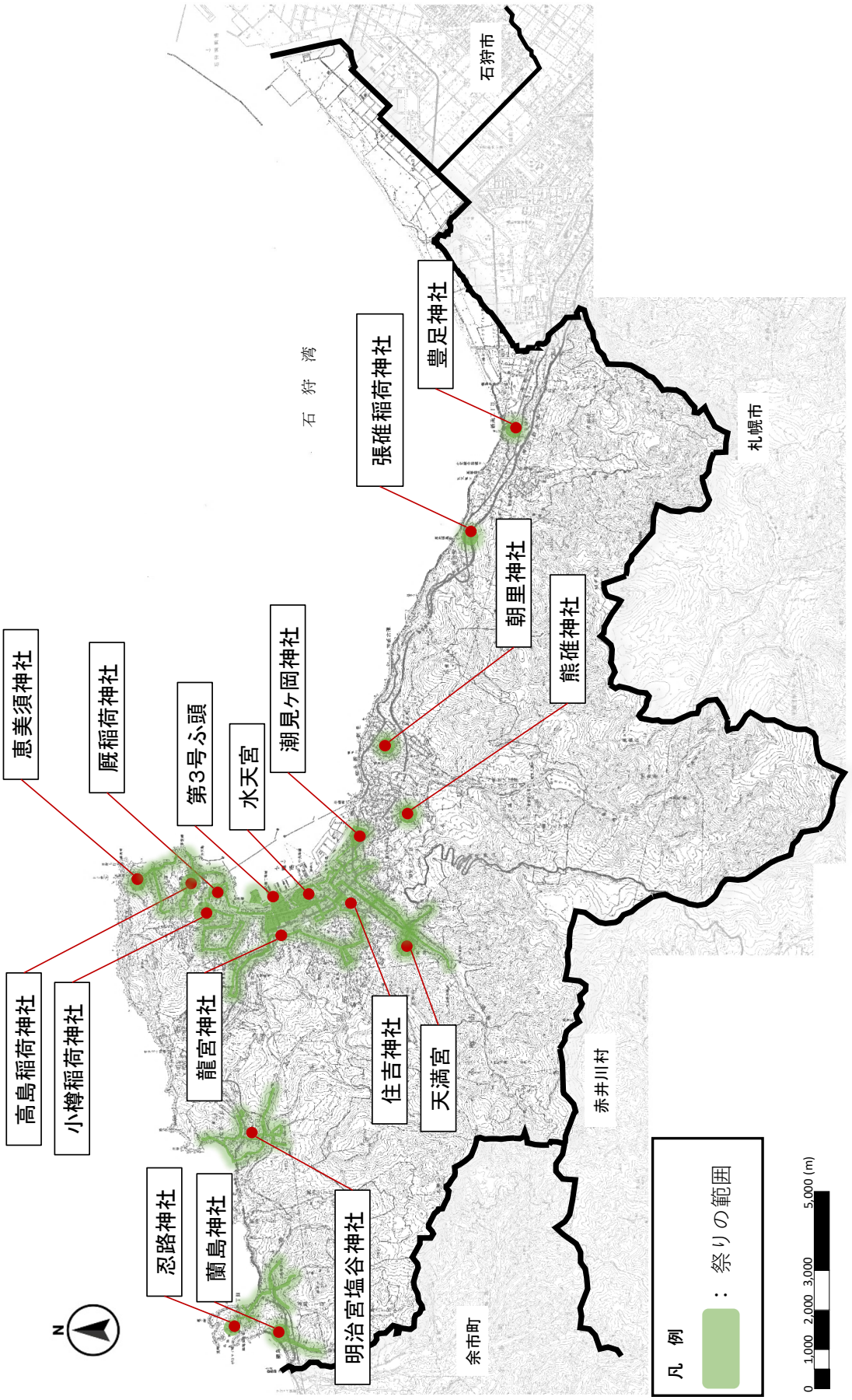


おたる潮まつりにみる歴史的風致

おわりに

小樽では、江戸時代以降に伝えられた神社の例大祭のほか、大正と昭和に開催された博覧会、戦後に定期化する産業振興と観光振興のための祭りやイベントが数多く開催されてきた。伝統行事としての祭りのほか、商業的に企画された祭りやイベントが多いのも商都として繁栄してきた小樽の特色といえるが、小樽へ移り住んだ人は、祭りの多いまちとの印象を持ち、それらに親しんできた。

近年は、社会環境の変化や少子高齢化の影響を受け、各神社の例大祭や、おたる潮まつりの内容にも変化が見られるが、地域の神社で行われてきた祭りと市内中心部の歴史的なまちなみの中で展開される商業的な祭りやイベントは、市民の暮らしの中に根付き、歴史的建造物と一体となって歴史的風致を形成している。



祭りの賑わいにみる歴史的風致の範囲

【コラム】明治宮塩谷神社の松前奴

神社資料によると、松前奴行列は、明治 19 年（1886）に塩谷海岸付近にあった神社を内陸側（現在のゴロダの丘付近）に移転したのを記念して、それまで社殿があった鮏間のニシン漁場の番屋が建ち並ぶ場所を通り、新社殿まで奴行列を行ったのがはじまりとされている。

例大祭においては、神輿渡御の露払いとして行われる松前奴が明治期から約 150 年伝承されており、昭和 30 年代の写真では、揃いの装束に前掛け、股引き、黒足袋、わらじがけの姿で練り歩く一行を確認することができる。

奴行列は、明治期の隊列や行列範囲を基礎として、揃いの装束を身にまとい、主に「毛やり」と呼ばれる長さ４メートルほどの棒を持ち、「奴が来たり」という意味の「ヤーキタリ」という独特のかけ声と共に片足ずつ大きく振り上げる歩行で行進する。

近年では主に市内の青少年が担い手となっている。その家族や親戚が見守りながら随行しているため、神輿渡御の一行は大人数になり、行列が通ると地元住民が玄関前まで出て見物する光景から、郷土の拠り所となっていることがうかがえる。

現在、地元有志による「塩谷松前奴保存会」によって伝承されており、７月の例大祭では、塩谷地区からオタモイ地区にかけての比較的広い範囲において、地域に伝えられてきた伝統行事を体感することができる。

昭和 30 年代の松前奴行列

現在の松前奴行列

玄関前に出て奴行列を見守る地元住民

【コラム】朝里神社と例大祭

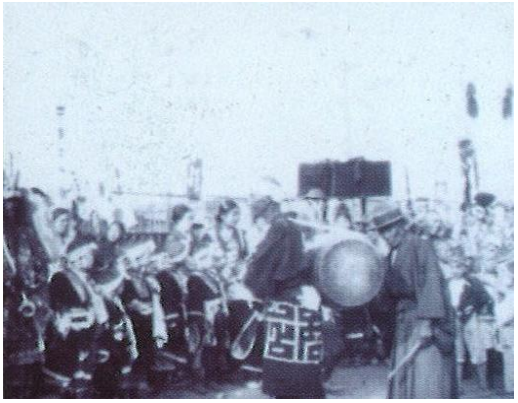
朝里神社は、現在の朝里十字街を海側に下った海岸段丘上の先端に位置し、ニシンの豊漁と海上安全祈願のための稲荷社であった。『北海道神社庁誌』（北海道神社庁　平成 11 年（1999））によると、天保５年（1834）に創建し、大正４年（1915）に現在地に移転したとされている。移転前から元々存在した天満宮と付近にあった住吉神社とともに三社が合祀され、建てられたのが現在の朝里神社である。現社殿は、昭和 59 年（1984）に新築したが、前社殿の神明造を踏襲している。

現在の朝里神社の例大祭では、松前神楽が奉奏されている。また、かつての例大祭では、奴が行われていたことが昭和８年（1933）の写真で確認することができる。

現在の朝里神社社殿

朝里神社例大祭での松前神楽

昭和８年の朝里神社での奴衆



昭和８年の朝里神社例大祭

【コラム】柾里（まさり）神社と松前神楽

柾里神社は、文化 14 年（1817）に「ヲタルナイ　マサリ稲荷大明神」を勧請した棟札があることから、少なくとも 19 世紀前期には祀られていた。さらに同社には、「マサリ浜役原田治五衛門」を代表とした浜中が、稲荷神社の本殿と拝殿を元治元年（1864）に再建した棟札もある。

浜役の原田治五衛門とは、永田富智の北海道新聞（夕刊、2002.7.6）記事によれば、松前地福島の「年寄原田治五右衛門」で、二男は後に福島大神宮第 12 代笹井武麗となっている。武麗の長男常磐井武胤と二男常磐井秀太は、柾里神社の明治 26 年（1893）の式次第によると、稲荷神社の神殿新築時の勧請祭に関係している。

19 世紀後期の小樽市内における神社祭祀に、武麗、武胤、秀太親子が深くかかわったことにより、同地に松前神楽が伝承したと考えられている。小樽市では、これを記念して平成５年（1993）には、松前神楽の小樽伝承百年祭を実施している。

柾里神社

柾里神社での松前神楽

1983 年の柾里神社

５．景勝地の行楽などにみる歴史的風致

はじめに

小樽は、海、山、坂による変化に富んだ地形に加え、四季折々の表情を見せる豊かな自然に恵まれている。

市街地は、山を背に、海に向けて開けた地形が特徴となっており、日本海に面する約 70 ㎞におよぶ海岸線の約６割は護岸などがない自然海岸であり、一部は国定公園に指定されている。

小樽港から望む市街地と山々

海食崖や砂丘の海浜部から 1,000ｍ級の山までを含む自然環境は、古代の人々からアイヌの人々、そして近世から近代にかけて本州から渡ってきた人々の営みの基礎となると同時に、奇岩が連なる海岸や海原を見渡す高台などは、古くから行楽地や観光地として親しまれてきたかけがえのないものである。

オタモイ海岸

市内の景勝地は、豊かな自然環境とともに、先人たちの営みによって形成された歴史的環境を併せ持っている。その中でも高台に位置する公園や展望台、天狗山からの眺望は格別であり、日本海を望み、さらに遠くの山々まで見渡すことができる場所は、自然を楽しむ行楽地として多くの市民や観光客に親しまれてきた。また、それら景勝地の周辺には、地域の歴史に関わる建造物や記念碑などが点在しており、地域住民がこれらの歴史的資源を守り育て、地域の誇りとして次世代に伝える取組を行ってきた。そのため、訪れる人々は、単に風景を楽しむだけではなく、地域の歴史や文化に触れることができるとともに、慰霊の場では過去の出来事に思いを馳せることができる。

これらの景勝地は、美しい自然の風景と地域の歴史的環境が織りなす魅力によって多くの人々を引き付ける行楽地として現在も大切に引き継がれている。

（１）小樽公園の行楽・慰霊にみる歴史的風致

① 概要

小樽公園は、市の中心部に位置する自然豊かな総合公園である。明治 13 年（1880）、開拓使長官の黒田清隆が小樽の将来の発展を見越し、当地に「遊覧場」の建設を提言した。公園の敷地は、明治初期には櫛形山（くしがたやま）と呼ばれる丘陵地帯であったが、明治 26 年（1893）に共同遊園地として道庁から払い下げを受け、その後、有志の寄付をもとにした公園整備が徐々に進められた。

明治 30 年（1897）、花園（はなぞの）町から公園に至る道路が開かれたこともあり、遊覧者が年を追うごとに増加し、茶店や休憩所が置かれた。また、園内には市内の小学校が集まる連合運動会の会場となる、運動場が整備された。小樽公園での連合運動会は明治 32 年（1899）から行われ、明治 40 年ころには参加児童約１万人、観客約５万人に上り、当時の小樽で最も人が集まり熱狂する一大行事となった。児童数、観客数はさらに増え続け、あまりに大人数のため予定種目の進行に支障が生じたことや、児童の出場できる機会が少なくなることなどを理由に、大正 11 年（1922）を最後に連合運動会は廃止され、これ以降は各校（一部は３校連合）で行われるようになった。

小樽公園での連合運動会
（明治 45 年）

現在の小樽公園の全体構想は、明治 43 年（1910）に造園家の長岡安平（ながおかやすへい）が描いた花園公園設計図に示されている。設計図を見ると、現在も園内に残る石碑や、池の位置は当時と変わらず、後に建築される市立図書館や公会堂は、予定地などとして敷地が確保されていることがわかる。また、９か所の喫茶店に割烹店予定地、植物養成所、音楽堂、器械体操場なども配置され、将来の市街化を見越し、公園を都市の中心的な空間とする明確な目的をもって計画されていることがうかがえる。レイアウトは公共施設を園路で結ぶ現在の公園設計に共通した形式であり、公園が地方に定着しはじめた明治後期の特徴を今に伝えている。

昭和に入ってからも様々な施設の整備が行われ、身近な行楽地として家族連れなどで大いに賑わった。現在は、敷地面積 23.5ha の公園内に、クリ、ナラ、ハリギリ（センノキ）など約 4,000 本からなる天然林のほか、約 650 本のサクラ、市の花と木に指定されている約 7,000 本のツツジと約 1,500 本のシラカンバが植樹されており、花と緑の公園として親しまれている。また、眼下に日本海を望む遊具コーナー、旧公会堂及び能舞台、市民会館、図書館、弓道場、庭球場、野球場、総合体育館及びグラウンドのほか、顕誠塔や歌碑などが設置されている。

小樽公園は、自然に親しみ、文化活動やスポーツ活動、慰霊の場として利用され、地域コミュニティーの形成にも重要な役割を果たしており、多くの市民が利用する公園として引き継がれている。

自然豊かな園内

遊具コーナーからの眺望

石川啄木歌碑
昭和 26 年（1951）建立

小樽公園の配置図

花園公園設計図（小樽市指定有形文化財）

② 建造物等

（ア）小樽公園

小樽公園は、明治 26 年（1893）に道庁から共同遊園地としての払い下げを受け、その後、有志の寄付をもとに公園整備が進められた市の中心部に位置する総合公園である。

明治 43 年（1910）に近代公園の先駆者とも呼ばれる造園家の長岡安平（ながおかやすへい）が描いた花園（はなぞの）公園設計図が小樽公園の基本となっており、現在の公園の全体図にそのまま重ねることができる。設計図には、樹木や花壇、四阿、喫茶店、図書館、公会堂、運動場などの施設が緻密に描かれており、人々が憩い、健康に過ごすことができる場所として設計されたことがうかがえる。

また、設計図に描かれた公園の全体図を見ると、共に明治 30 年代に建立し、現在も園内に残る「表慶碑」（明治 33 年建立）、「戦捷記念碑」（明治 39 年建立）といった石碑や、池の位置は当時と変わらないことを確認することができる。

小樽公園の海側に面する道路の両脇には、小樽公園の２本の石柱が建っており、その石柱には、「明治四十四年八月」と寄付者４名の名が刻まれている。

表慶碑
明治 33 年(1900)建立

戦捷記念碑
明治 39 年(1906)建立

小樽公園の石柱

（イ）顕誠塔

顕誠塔は、日露戦争の戦没者を慰霊するため、大正 12 年（1923）に建立された。翌年５月 17 日に除幕式並びに宵宮（よみや）祭、５月 18 日に臨時招魂祭が行われた。大正 13 年５月 18 日付の小樽新聞には「碑面に刻まれた昭忠の二字 小雨冷たききのふ 荘厳な除幕式」と報道され、風雨の強い悪天候の中、神官による神事が行われた後、戦死者孤児の手によって序幕が行われ、会場に集まった在郷軍人会や愛国婦人会の会員に加え、200 人以上の市民から一斉に拍手が送られた様子が記録されている。

元は「忠魂碑」の名で建立され慰霊のシンボルとされたが、戦後は名称を顕誠塔と改め、郷土小樽に貢献のあった人々を合祀するようになった。

塔の高さは約 17m、御影石製で、先端に金鵄（きんし）が羽ばたいている。令和５年（2023）に建立 100 周年を迎え、大規模な修繕が行われた。

落成式の様子

現在の顕誠塔

③ 活動

（ア）小樽公園の花見等

自然豊かな小樽公園は、開園当初から市民の憩いの場であり、小樽名所のひとつとしてしばしば絵葉書にも取り上げられてきた。小樽公園の絵葉書は、春の花である桜を題材にしたものが多く、古くから多くの人々が小樽公園で花見を楽しんでいたことがうかがえる。

花園公園（現小樽公園）の花見（昭和 10 年ころ）

昭和 33 年（1958）のこどもの日に撮影された写真では、多くの家族連れで賑わう様子が見られる。背広にネクタイの男性や学生服を着た中高生の姿が時代を感じさせる。

昭和 33 年（1958）5 月 5 日
こどもの日の賑わい

小樽の人々にとって花見は、待ちわびた春を迎える風物詩として生活に深く根付いている。小樽公園では、毎年春先になると、家族や友人と共に屋外に連れ立ち、暖かな風を感じながら自然に親しむ市民の姿が見られる。

毎年５月上旬から中旬に見頃を迎えるサクラをはじめ、クリ、ナラ、ハリギリ（セン）、ツツジ、シラカンバなどが季節によって表情を変え、現在も訪れる人を楽しませている。また、公園内の多様な施設が文化活動やスポーツに利用されており、小樽公園には、現在も多くの人が訪れている。花見の時季となるゴールデンウィークのころ、園内ではエゾヤマザクラやソメイヨシノなど複数の種類の桜をはじめ、市の花であるツツジなど、様々な花が咲きはじめる。小樽公園を訪れた人々は、花見客が一斉に芽吹いた草木とともに、眼下に小樽のまちなみや港に入港する船舶を眺める様子を見ると、小樽ならではの春の訪れを感じる。

現在の小樽公園

（イ）招魂祭による慰霊

小樽公園における招魂祭は、忠魂碑（のちの顕誠塔）の建立に伴う戦没者慰霊のための祭礼として、大正 13（1924）年に、臨時招魂祭としてはじめて挙行された。大正 15（1926）年５月 14 日、15 日に招魂祭として挙行され、これ以降、年中行事として定着した。14 日に宵宮祭、15 日には本祭が開催され、顕誠塔前の広場を下った花園公園グラウンド沿いには露店が並び、銀行は休業、小中学校は休み又は午前授業になるなど、慰霊行事としてのみならず、小樽で最も早く行われる祭りとして賑わった。

招魂祭の時期は、気温も上がり、桜が咲く季節であることから、天気が良ければ花見客も相まって非常に多くの人が参加した。昭和 21 年（1946）、GHQ の施策などにより戦時色を取り払い、招魂祭の名前はそのままに、郷土の発展に尽くして亡くな

った功労者を慰霊する祭礼・式典へと変化した。また、主催者も小樽在郷軍人会から小樽顕誠会、令和７年からは招魂祭実行員会に変わっている。目的の変化に伴い、実施回数も昭和 21 年（1946）を起点として新たに数えなおし、令和７年（2025）に 80 回目を迎える。平成 28 年（2016）からは５月 15 日のみの開催となり、露店は出店しておらず、功労者の遺族や行政・商業の関係者などが出席する中で、しめやかな鎮魂の式典として執り行われている。一般の人々の参列も可能であり、祭礼に合わせて行われた弓道・柔道などの武術大会（奉納射会、奉納試合）などの一部は、場所を変え現在も続けられている。

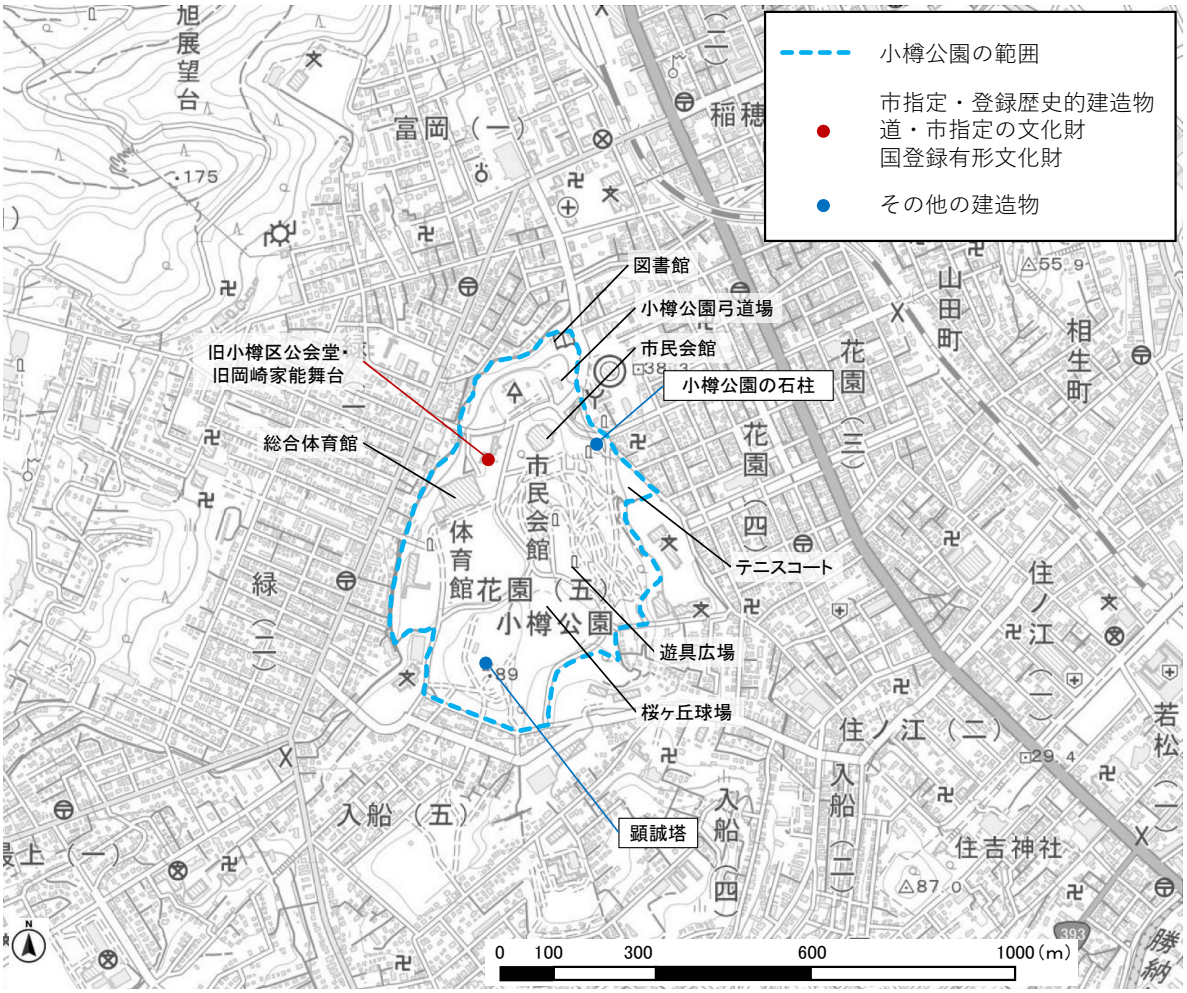
招魂祭の１か月前になると、主催者によって、大通りから小樽公園へ通じる道路の角地にあるレストランから小樽公園内の顕誠塔広場近くにある小樽市総合体育館にかけて、開催を告げる看板が設置される。小樽で最も早く行われるこの式典の看板は、それを見た人々に春の訪れを感じさせる。５月１日からは顕誠塔前広場へ続く沿道には協賛企業の名前が書かれた朱色の献額が約 50 枚立ち並び、見ごろを迎えた八重桜の桜並木と相まって華やかな雰囲気が感じられる。当日の顕誠塔前広場には、市の商工関係者、社会福祉関係者、赤十字奉仕団体、戦没者の遺族、学識経験者などから構成されている小樽顕誠会の役員や神官が集まり、一般参加の市民が見守る中、神官の祝詞や喪服を着た関係者による玉串奉奠（たまぐしほうてん）が行われる。式典は粛々と進められ、顕誠塔前広場は功労者たちに敬意を表し、静かに労わる慰霊のための空間となる。また、多くの市民は招魂祭といえば雨を連想する。正確な統計があるわけではないが、追悼の日に降る涙雨が記憶に強く根付き、「招魂祭の日は雨が降る」と語り継がれているためである。

人々は招魂祭が終わると、小樽の短い春が終盤に差しかかり、初夏が迫っていることを感じる。

顕誠塔前の広場

式典の様子

沿道に並ぶ
協賛企業による献額と八重桜



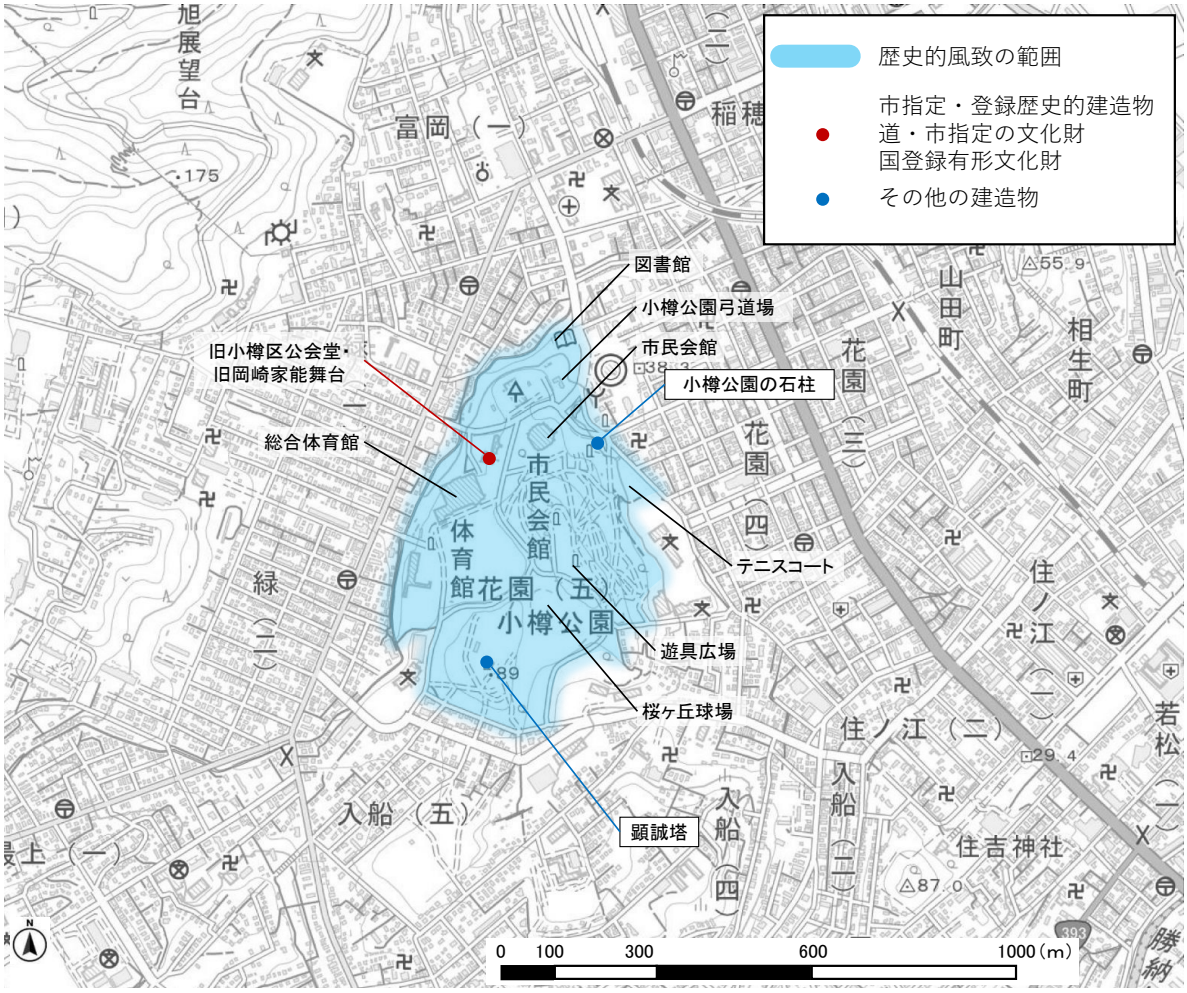
小樽公園の範囲と歴史的建造物等の位置図

④ まとめ

小樽公園は、市内中心部の高台に位置し、日本海を望む眺望と豊かな自然環境を誇り、明治期から市民の身近な行楽地として親しまれてきた。

多様な花や木々が四季折々の表情を見せる中で花見の名所として親しまれてきたほか、明治 31 年（1898）から 20 年間にわたり市内の全小学校が集まる連合運動会の会場となり、地域住民による大規模なイベント会場としても賑わった。また、庭球場や野球場の整備、弓道場の寄贈、総合体育館の建設により、スポーツ活動の場としての利用も広がり、スポーツを通じた地域のつながりの強化や市民の健康促進にも寄与した。さらに、図書館や市民会館が建てられ、移築された公会堂及び能舞台が一般開放されることによって文化活動の場としても利用されてきた。

小樽公園は、自然と歴史が織りなす豊かな空間であり、市民生活と地域文化の根幹を支える重要な場所である。これまで多くの人が小樽公園を訪れているが、豊かな自然の中で、身近な行楽地として楽しむ姿は今も変わりがなく、趣のある歴史的建造物をはじめ、多様な施設と一体となって歴史的風致を形成している。



小樽公園の行楽・慰霊にみる歴史的風致

【コラム】旧小樽区公会堂・旧岡崎家能舞台

旧小樽区公会堂は、明治 44 年（1911）に皇太子（後の大正天皇）の本道行啓に際しての御宿泊所として、海運商として名を馳せた藤山要吉が棟梁 加藤忠五郎に請負を依頼し、宮内庁技師 木子幸三郎の基本設計で新築し、寄付をした。

旧小樽区公会堂の上棟式
（明治 44 年 6 月 24 日）

建造物は、木造平屋建瓦葺き、手前に本館、その背面に御殿が配置された２棟構成で正面に唐破風の車寄せを設け、梁に御紋を刻んだ蟇股を組んでいる。行啓後は公会堂として利用されていたが、市民会館の建設に伴い、昭和 35 年（1960）に移転工事に着手し、昭和 36 年（1961）に西に 100m 離れた現在地へ移築された。このときに本館と御殿の配置が変わり、地下が増築された。

移築後の旧小樽区公会堂

御殿は戦後引揚者の一時収容所となってからは、全館が公会堂として一般に開放されるようになった。現在も市民が文化芸術活動等で利用しており、令和５年（2023）には、施設のライトアップや能をテーマとしたカフェが期間限定で行われ、多くの人が訪れた。

現在の旧岡崎家能舞台

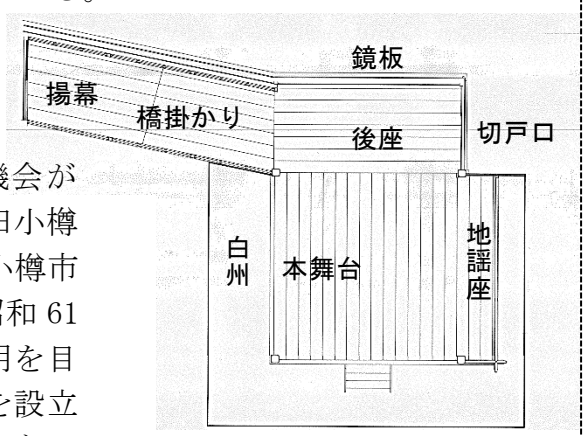
旧岡崎家能舞台は、荒物雑貨商として財をなした岡崎謙が大正 15 年（1926）に入船町の自宅中庭に棟梁 小杉米蔵によって建てられた能舞台である。昭和 29 年（1954）に市に寄贈され、昭和 36 年（1961）に現在地に移築し、旧小樽区公会堂に組み込まれた。

揚幕折戸の唐獅子

鏡板の老松
切戸口の若竹

檜の舞台をはじめ、要所に佐渡産の神代杉が用いられた格式を重んじた能舞台であり、東北以北唯一のものといわれている。

鏡板の老松、切戸口の若竹、揚幕折戸の唐獅子は、狩野派 17 代狩野秉信により描かれたものである。



旧岡崎家能舞台平面図

移築後しばらくの間は能を鑑賞する機会が持たれなかったが、価値が再認識され、旧小樽区公会堂とともに、昭和 60 年（1985）に小樽市指定歴史的建造物に指定された。翌年の昭和 61 年（1986）には、能舞台の整備と有効利用を目的として、市民有志が「能に親しむ会」を設立し、年に数回の一般公開が行われるようになった。その活動は、平成 19 年（2007）に「旧岡崎家能舞台を生かす会」に継承され、能の魅力を市民に伝える活動が現在も続けられている。

（２）手宮公園の行楽・慰霊にみる歴史的風致

① 手宮公園の概要

手宮公園は、市の北西部に位置する自然豊かな総合公園である。公園の敷地は、明治 33 年（1900）に北海道庁から共同遊園地としての払い下げを受け、長岡安平が描いた設計図に基づき、公園整備が徐々に進められた。

明治 43 年（1910）の小樽新聞に掲載された「手宮公園設計略図」によると、陸上競技場、園路、四阿、茶屋、機械体操場などが計画されており、陸上競技場や一部の園路などは現在に引き継がれている。

なお、公園になる前のこの地域は、明治 12 年（1879）に開拓使の煤田事務係小樽出張所が置かれたことから、煤田山と呼ばれた。

敷地面積 19.7ha の区域内には、貴重な遺跡である手宮洞窟（国指定の史跡）や石炭を運び出す施設である高架桟橋を支えた擁壁（重要文化財の旧手宮鉄道施設）といった歴史的な遺産が含まれている。また、防波堤建設に尽力した青木政徳の功績を称える碑や、尼港事件の犠牲者や物故船員の慰霊碑が建立されている。

現在の園内にはクリ林をはじめ、エゾヤマザクラやソメイヨシノなど、約 70 本のサクラが植樹されており、小樽港の東側を一望できる丘には、手宮緑化植物園が設置され、水と石と樹木を組み合わせた日本庭園と桜園、水生植物園、シャクナゲ園、ボタン園など、15 区の見本園が整備されている。

手宮公園からの眺望

手宮公園の配置図

② 建造物等

（ア）手宮公園

手宮公園内の斜面には、廣井勇とともに小樽港北防波堤の建設に大きく貢献した北海道庁技師の青木政徳（1864～1900）の石碑が建っており、そこに、「明治四十四年八月」と刻まれている。青木政徳は、病に倒れ、北防波堤の完成を待たずに 35 歳の若さで他界してしまうが、その功績を称え、小樽港を望むことができる公園内の斜面に石碑が建立された。

手宮公園（大正時代後期）

技師青木政徳之碑

明治 43 年（1910）の小樽新聞に掲載された「手宮公園設計略図」にある陸上競技場については、昭和９年（1934）に開設され、道内では最も歴史ある競技場の一つである。厩町の海面埋め立てに必要な土砂の確保地として手宮公園が選ばれ、昭和７年（1932）から３か年をかけて手宮公園の頂上を 10m切り下げ、そこに陸上競技場が造られた。

手宮公園・陸上競技場

（イ）旧手宮鉄道施設（重要文化財）

官営幌内鉄道は、アメリカ人技師クロフォードの指揮のもと、明治 13 年（1880）に小樽の手宮と札幌間が開通し、明治 15 年（1882）に幌内（現三笠市）までの全線が開通した北海道初の鉄道である。

幌内で採れた石炭は全国に運ばれ、日本の近代化を支えた。その起点となったのが手宮地区であり、旧手宮鉄道施設は、手宮鉄道構内跡地（小樽市総合博物館）に残る一連の鉄道遺産群で、機関車庫、危険品庫、貯水槽、転車台、擁壁から構成され、蒸気機関車が主流であった時代の鉄道システムを現在に伝えている。平成 13 年（2001）、重要文化財に指定された。

旧手宮鉄道施設の擁壁

（ウ）尼港殉難者追悼碑

大正９年（1920）にアムール河畔の尼港（ニコラエフスク）でシベリア出兵によって駐屯していた日本軍守備隊と産業振興を目指して小樽港から渡航した日本人居留民約 700 名がロシアのパルチザンの襲撃を受けて全員が亡くなった。

日本人居留民が小樽からの定期便で尼港に渡った縁から、大正 13 年（1924）に尼港殉難者納骨塔が建てられ、納骨式と追悼法要が行われた。昭和初期の尼港殉難者納骨塔が写真に残されており、昭和 12 年（1937）には、海運商として名を馳せた藤山要吉の寄進により、塔廟、宝塔、墻垣を建設し、霊場として整備された。また、平成元年（1989）には、都市公園法の趣旨を踏まえ、納骨塔の遺骨を移し、名称を尼港殉難者追悼碑に改めた。

尼港殉難者納骨塔
（昭和７年ころ）

現在の尼港殉難者追悼碑

③ 活動

（ア）手宮公園の花見等

手宮公園は、かつて手宮停車場として多くの機関車が行き来した「旧手宮鉄道施設」の後方に位置する海抜約 60ｍの丘陵地の丘頂付近に位置する。

市街地の北端に位置し、南方には楕円形を成した沿岸一帯及び市街地を見渡し、さらに遠くには、小樽市、札幌市、赤井川村の境界を分ける雄大な朝里岳、そして市民にとって絶好のスキー場でもある天狗山を見ることができる。また東方は、石狩湾に伸びる防波堤の奥に、石狩、天塩の山影を望む、市内の中でも特に眺望のよい地点のひとつである。

小樽市『手宮公園史』（昭和 25 年）によると、明治初期、手宮公園地域は熊笹が生い茂る土地であったが、明治 33 年（1900）、小樽区は 16 町６反４畝 10 歩を共同遊園地として北海道庁より無償付与を受け、公園を開設した。

手宮公園の眺望の良さは当初から注目されており、明治 36 年（1903）には、頂上に四阿やラムネを販売する茶店が置かれ、人々が散歩がてら絵画のような景色を楽しんで休憩する、まさしく遊園・公園の姿があった。戦前には 400 から 500 本のサクラ、約 100 本のカエデ、ナラ、アカシヤなどが植林され、現在も四季折々の彩を見せる。昭和 40 年代には花見とともにジンギスカンを楽しむ様子が見られた。現在の園内は火気厳禁となったが、花見の季節になると多くの人々で賑わう光景は現在も変わらない。昭和 58 年（1983）には手宮緑化植物園が開園し、15 区の見本園を整備して自然の保護にも努めている。

青木政徳碑の傍ら、手宮公園の斜面から桜と小樽港を一枚の写真に収める花見客が見られる。過去の偉人の功績のもと港湾都市として発展した小樽の歴史を踏まえてその光景を目にした人々に、多くの船舶が出入りしていたころの様子を想像させる。

手宮公園から小樽港を眺める人々（昭和初期）

花見とジンギスカン
昭和 48 年（1973）

現在の手宮公園

また、手宮公園では、早春の雪解け時期になると、上部で湧き出た雪解け水が崖面を流れ落ちる現象が発生する。その様子がまるで滝のように見えることから、「御前水の滝」と通称されており、雪解け水が崖面を流れ落ちる水の音や、滝のまわりに芽吹いたフキノトウの柔らかな緑が、見るものに春の訪れを感じさせる。滝があらわれる時期や水流の量は気温の上昇の仕方によって変化し、数週間しか見られな

いことから幻の滝とも呼ばれ、自然の便りとして地域のニュース番組などでも毎年のように取り上げられている。なお、「御前水」という名前は、雪解け水があふれ出している泉の水が、明治 14 年（1881）の明治天皇北海道行幸の際に飲料水として献上が計画されたことに由来している。

公園区域内では、ほかにも手宮洞窟保存館として公開・保護されている手宮洞窟や尼港事件で亡くなった人々を追悼する尼港殉難者追悼碑、旧手宮鉄道施設を構成する擁壁、防波堤建設に尽力した青木政徳の功績を称える碑といった歴史的遺産が残り、これらに自然と親しむ人々の様子を見ることができる。

手宮公園は、歴史的遺産を残し、自然公園と運動施設を兼ね備えた総合公園として、市民が老若男女を問わず四季を楽しみ、スポーツに親しむ憩いの地である。

（イ）尼港殉難者の慰霊

大正９年（1920）５月 24 日、ロシアのニコラエフスクでいわゆる「尼港事件」が発生し、多くの日本人が亡くなった。回収された一部の遺体はニコラエフスクで火葬され、遺骨がアレクサンドロフスクの慰霊碑に保管された。

追悼法要の様子

当時ニコラエフスクなどのロシア極東部との定期航路を持つ都市は、小樽、函館、新潟であり、その中でも小樽は定期航路数が最も多く、軍役や民間利用を問わず、現地との物資の運搬や人々の移動も盛んであった。尼港事件で亡くなった人々の中にも、小樽から現地に渡った者が多く、小樽は、これらの人々にとって現地に発つ前の最後の足跡を残した土地であり、遺骨や遺灰となって最初に帰る土地となった。

事件直後から関係者の遺骨を迎えて故郷へ見送った小樽では、手厚い追悼会が会場や主催者を変えて何度も執り行われた。

大正 10 年（1921）５月 24 日には、小樽公園において在郷軍人会や仏教関係者が合同で「尼港殉難者追悼会」を執り行い、それ以降は毎年５月 24 日に追悼法要が行われることとなった。大正 13 年（1924）、手宮公園内に「尼港殉難者納骨塔」及び「尼港殉難記念碑」を整備したことにより、会場を手宮公園に改めた。同地には昭和 12 年（1937）にも地元有力者・藤山要吉の寄進により供養塔などが建立され、霊場としての整備が進んだ。現在、納骨塔は都市公園法の趣旨を踏まえ遺骨を移し、名前を「尼港事件殉難者追悼碑」に改めている。

追悼法要当日には、小樽佛教界の僧侶や市民が集い、追悼碑に向かって読経と焼香が行われる。緑に囲まれた静かな公園の中には、おりんの音や途切れることのない読経の声、焼香の煙や抹香のにおいが広がる。その後、納骨塔完成までに遺骨が安置されていた石山町浄応寺の本堂に会場を移し、雅楽の演奏とともに僧侶たちが本堂に入場すると、再び読経や焼香、法話が行われる。浄土仏教、聖道仏教の２種類のお経が唱えられ、小樽佛教会が宗派を超えて一丸となり法要を務める様子が見

受けられる。尼港殉難者の慰霊がしめやかに執り行われ、僧侶や参列者が神妙な面持ちで手を合わせる様子からは、亡くなった人々を悼むとともに、悲惨な事件を決して忘れず語り継いでいくという悲壮な決意が感じられる。追悼法要の様子からは、厳粛でありながらも心を落ち着かせる雰囲気が感じられる。

手宮公園の範囲と歴史的建造物等の位置図

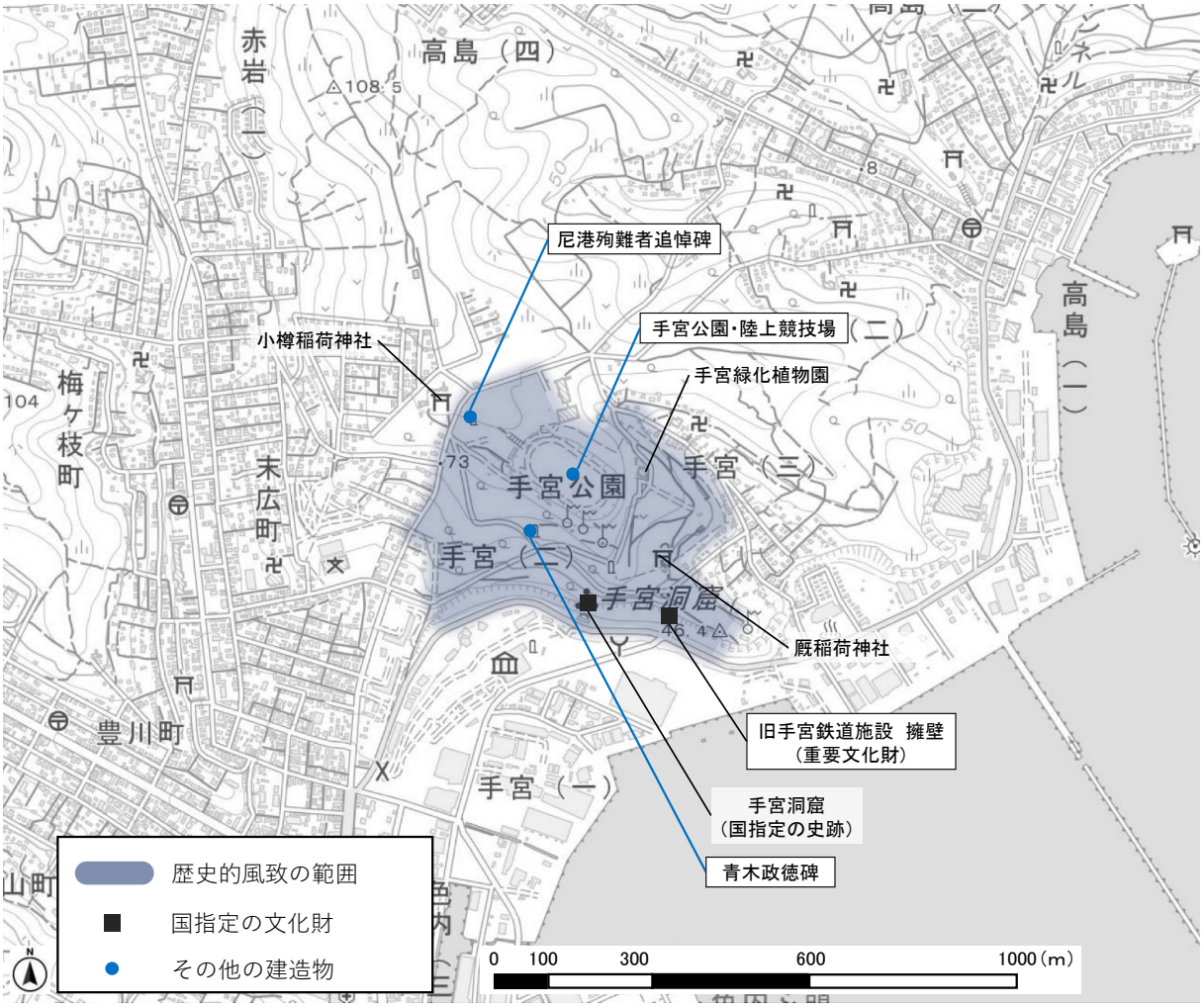
④ まとめ

市内中心部の高台に位置する手宮公園は、日本海を望む良好な眺望と豊かな自然環境により、古くから市民の身近な行楽地として親しまれてきた。

花や木々が四季折々の表情を見せる中で花見やクリ拾いが楽しまれてきたほか、道内でも歴史ある陸上競技場において、多くの人が汗を流してきた。また、園内に慰霊碑が建立され、毎年、追悼行事が粛々と執り行われている。

公園区域内に手宮洞窟などの文化遺産を有し、夏には、周辺の神社で例大祭が行われ、賑わいを見せる環境もあり、人々は様々なかたちで手宮公園に訪れてきた。

かつて石炭の積出港であった小樽港を眼下に望む良好な眺望は、市が重要眺望地点に指定しており、そのような中で、身近な行楽地として親しまれ、スポーツの場や慰霊の場として変わらない環境は、多様な建造物と一体となって、歴史的風致を形成している。



手宮公園の行楽・慰霊にみる歴史的風致

（３）天狗山の行楽にみる歴史的風致

① 天狗山の概要

天狗山からの眺望

天狗山は、市の南西部に位置する標高 532ｍの山であり、市内中心部の至る所から望むことができる。古くから地元住民に親しまれ、その自然環境からスキー場として多くの人々に利用されてきた。

大正 12 年（1923）に「第１回全日本スキー選手権」の会場となり、その後、昭和 26 年（1951）に「小樽スキー学校」が開校し、以降多くの児童がスキーの技術を磨いてきた。また、昭和 27 年（1952）には、北海道で最初となるスキーリフトが設置され、多くのスキー愛好者が訪れるようになった。

近年、天狗山の行楽地としての魅力は、スキーとともに数多くのアクティビティーに支えられているが、古くから親しまれてきた美しい眺望は、今も変わらず人々を魅了し続けている。

天狗山の持つ自然環境と歴史的背景、さらにはスキーなどの多様なアクティビティーの提供は、地域の歴史を維持しながら現代の観光ニーズに応えており、映画などのロケ地に利用されるなど、新たな魅力が創出されている。

② 建造物等

（ア）小樽天狗山スキー場

設置間もない頃のリフト
（昭和 27 年 3 月）

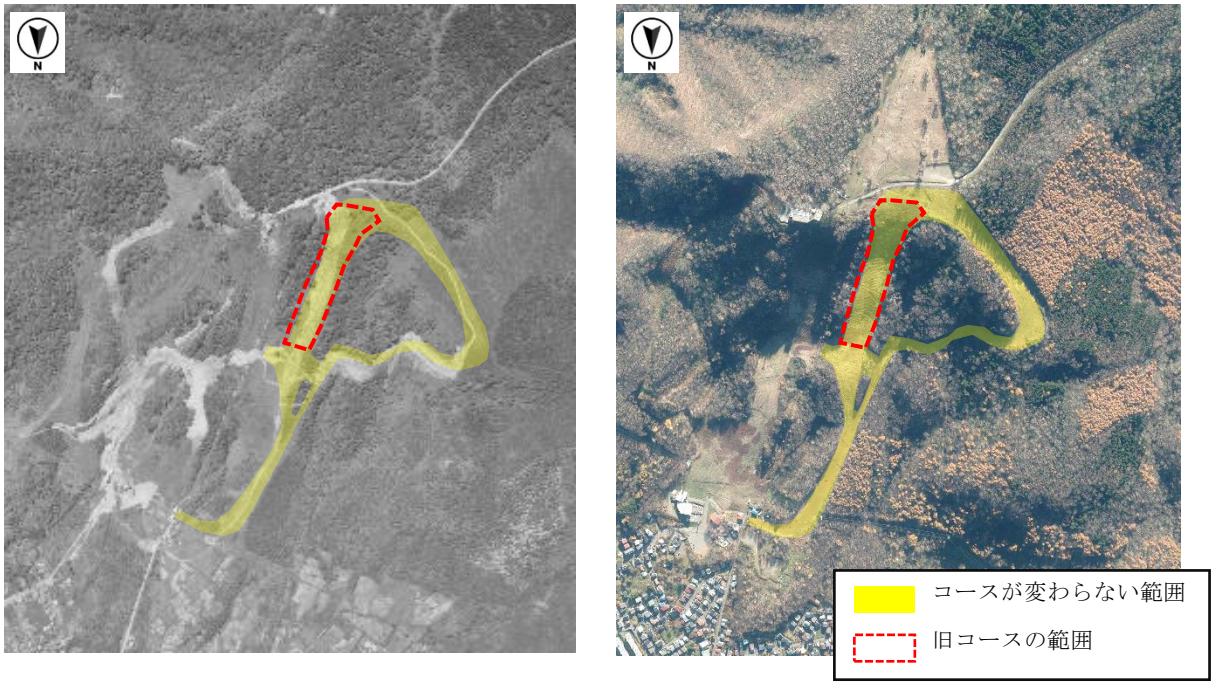
昭和２年（1927）に天狗山シャンツェ（ジャンプ台）を建設。

昭和 27 年（1952）の「第７回国体スキー大会」に合わせ、北海道初となるリフトが設置され、リフト完成後間もない頃の写真が残されている。

昭和 36 年（1961）にＡ級国設スキー場に指定され、その後もロープウェイの整備などにより、市民等がスキーやスキージャンプ、スノーボードを楽しんできた。現在、SIA（公益社団法人日本プロスキー教師協会）の検定試験が行われる「バンビコース」や、なだらかでコース幅の広い「ファミリーコース」など、上級者から初心者まで楽しめる変化に富んだ５つのコースがある。最大傾斜 38 度、全長 947ｍの「旧コース」は、昭和 37 年（1962）に開催された第 17 回国体スキー大会の際に整備されたもので、SAJ（公益財団法人全日本スキー連盟）の公認コースである。遠くからスキー場のナイター照明の灯りが見られるのも冬の風物詩となっている。

現在の天狗山スキー場

現在の天狗山スキー場



航空写真の比較
左：昭和 42 年（1967）　右：令和３年（2021）

（イ）小樽天狗山山麓館

小樽天狗山山麓館は、昭和 47 年（1972）年に開催された札幌オリンピックの公式練習場の施設として、昭和 45 年（1970）に「天狗山トレーニングハウス」の名称で天狗山スキー場の麓に建てられた。鉄筋コンクリート造２階建で、宿泊室（40 人収容）などを備え、現在は民間の宿泊施設として活用されている。なお、昭和 46 年（1971）に撮影された写真が残されている。

現在の小樽天狗山山麓館

『札幌オリンピック冬季大会と政府機関等の協力』（文部省 昭和 47 年（1972））によると、小樽天狗山スキー場はアルペン、ジャンプ、クロスカントリーの練習会場となっていた。各練習会場の中で最も利用度が高く、延べ 85 か国 416 人が利用したとされている。

天狗山トレーニングハウス
（昭和 46 年（1971））

③ 活動

（ア）天狗山のスキー学校

雪国、そして「坂の街」に暮らす小樽の人々にとって、スキーは生活に密着した「通過儀礼」であり「年中行事」とすらいえる文化である。

小樽でスキーが紹介されたのは、レルヒ少佐が新潟県高田市（現上越市）において講習をした翌年の明治 45 年（1912）で、高田でスキーを学んだ小樽高等商業学校（現小樽商科大学）の講師、苫米地英俊（とまべちひでとし）や旭川第七師団によって、同校の学生たちに伝えられた。これを見物していた小学校校長は「勾配急ナル斜面ヲ急速力ニテ辿リ下ル景況ハ宛然飛鳥ノ如ク、其壮快他ノ遊戯ノ及ブ所ニアラズ」とその魅力を語り、「小学校生徒マデ普及スルニ至ルベキカ」と記している。

スキー訓練の様子

この校長の予見どおり、大正中期には、スキーが学校教育にも取入れられ、急速に一般の人々に普及し、大人気の娯楽となった。

庁立高等女学校の女学生
（大正 10 年(1921)）

大正元年に「小樽スキー倶楽部」が誕生し普及に努めたことや、小樽でスキー板の生産が開始され用具の値段が安定したことも、スキー文化が浸透する要因となった。

当時は整備されたゲレンデも、リフトもなかったものの、一度スキーを履いて玄関を出れば小樽全体がそのまま一大スキー場と化し、随所の丘陵では多くの人々がスキーを楽しむ光景が見られた。中でも天狗山は、小樽で最初にスキーが行われた

小樽高等商業高校に隣接し、市街地にも近く、緩急もあり初級者から上級者まで練習できることから、格好のゲレンデとなった。スキーの導入以来、立木を伐採し、スキー場として整備が進められ、大正 12 年（1923）には「第１回全日本スキー選手権」の会場に使用された。この大会では２日間にわたり、アルペン、ジャンプ、クロスカントリーなどの競技が行われ、日本最古の公式スキー大会として記録されている。

昭和初期になると市内で本格的なスキー板の製造・販売が行われ、スキー人口はますます増加した。これを受け、安全で正しい技術を伝えるため、小樽スキー連盟が主催し、昭和 26 年（1951）に「小樽スキー学校」が開校した。

昭和 45 年(1970)の
スキー学校の様子

第１回小樽スキー学校の参加児童数は 65 名であったが、第 31 回（昭和 57 年）には 3,069 人の児童が参加する冬の一大イベントになった。天狗山は、第９回（昭和 34 年）より現在まで、変わらず小樽スキー学校の会場となっており、昭和 45 年のスキー学校の様子が写真に残されている。大正時代以降、スキーを楽しむ市民は多かったが、小樽スキー学校の隆盛により、世代を超えてスキーに親しむ環境が生まれた。なお、小樽スキー学校では、教員のほかに、スキー指導員の資格を持つ市民らが講師となり、子供たちにスキーを教えている。子どもたちは最初、少し怖がりながらも賑やかな声を響かせて、講師の後ろに続いてゆっくりと滑り始める。その姿を見ると、真冬のスキー場にも関わらず、暖かい雰囲気が感じられる。やがて上達し、急勾配の圧雪面を高速でターンしながら滑り降りるようになると、颯爽と滑る姿とともにターンのたびに圧雪面が削れる音が響き渡り、その様子からスキーの疾走感をしっかりと感じることができる。また、スキー場の麓に建ち、かつてオリンピックの公式練習場として利用された小樽天狗山山麓館を背にしてスキー場を見上げると、コースに残されたシュプールによって成長した滑りを想像させる。

スキーを学ぶ様子

また、スキーは、現在も冬季の体育学習に取り入れられ、市民にとって非常に身近なスポーツである。スキー学習は、通常低学年では学校のグラウンドなどに小さな雪山を作りそれを滑るが、高学年になるとシーズンに数回スキー場でのスキー学習を行う。冬になると、スキーウェアを着た子供たちがスキー板やスキー靴を持って登下校する光景や、学校の前にスキー場へ向かう大型貸し切りバスが停まっている風景が見られる。通勤途中などでその姿を目にした小樽の人々

スキー大会　ジャンプの様子
（昭和 44 年(1969)）

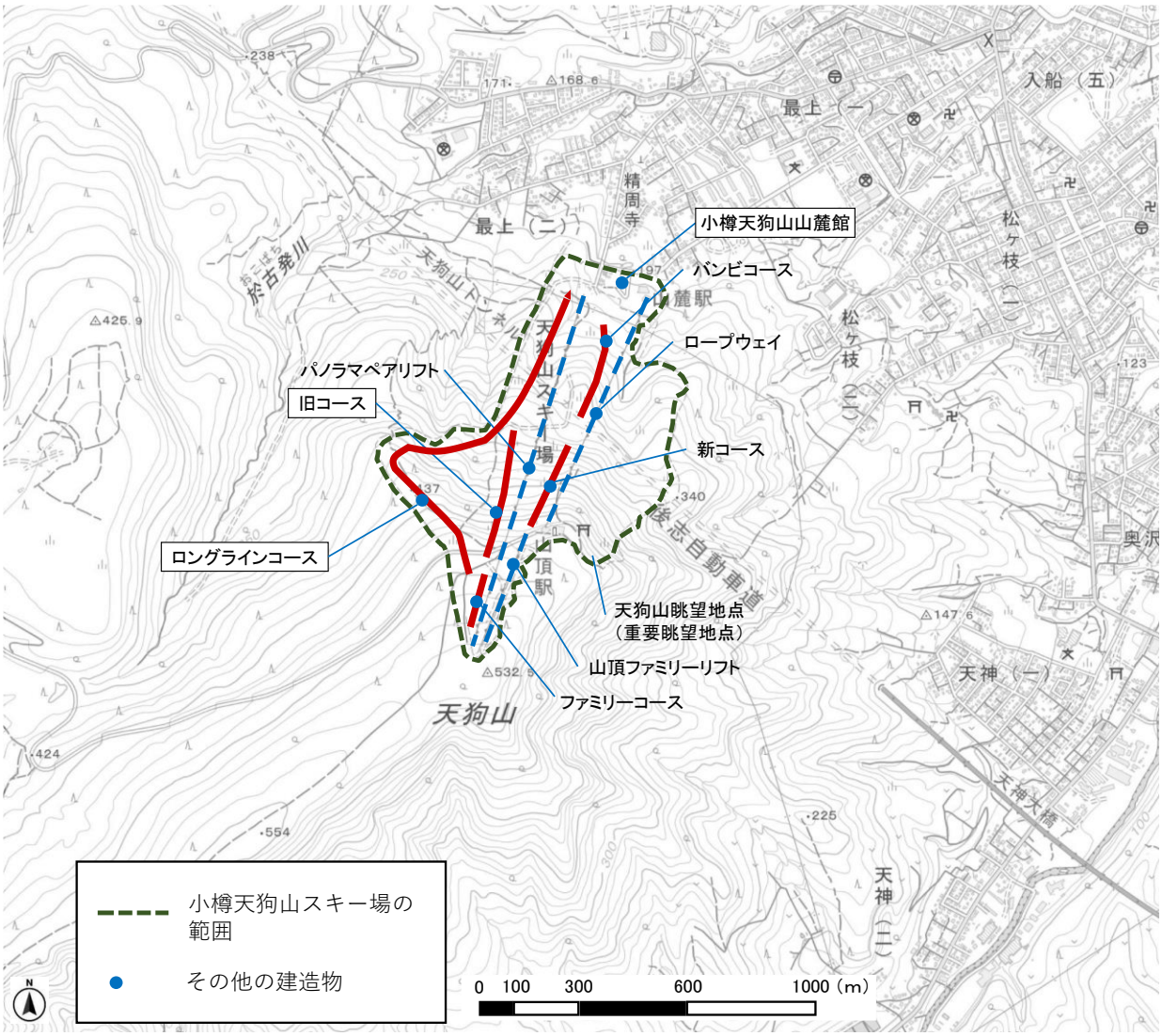
は、幼いころに天狗山でスキーの練習をしたこと思い出し、懐かしそうにしている様子を見ることができる。

第７回国民体育大会
（昭和 27 年(1952)）

天狗山は、昭和 27 年（1952）に第７回国民体育大会の開催に合わせ、北海道で初めてとなるリフトが設置されるなど、交通の便の改善や施設の充実などが進み、小樽のスキーの中心地となっていった。さらに昭和 30 年代からは、当時小樽では数少ない観光資源としての整備も行われ、ヒュッテ（スキーヤーなどが休憩する山小屋）の建設やロープウェイの新設に加えて、夏季の眺望を活用するための観光道路の整備などが次々と行われた。昭和 56 年（1981）にはスキーの歴史を紹介する「小樽スキー資料館」が開設されている。さまざまなコースがある天狗山は、市民にとって恰好のスキー場であり、「ファミリーコース」や「ロングラインコース」では初心者や家族連れの姿が見られ、公益財団法人全日本スキー連盟の公認コースである「旧コース」では地元のレーシングチームなどがポール練習を行っている。

現在市内には、天狗山スキー場、スノークルーズオーンズ、朝里温泉スキー場の３か所のスキー場がある。雪質の良さや、全てのスキー場から海を見渡すことができる眺望が人気で、毎年多くのスキーヤーが訪れている。山から海までの距離が短く、頂上から滑り降りていくと、そのまま海までつながっていくような疾走感を体験できるのは、小樽のスキー場ならではの感覚である。

その中でも天狗山は、市街地のどこからでも見上げることができる、小樽を代表する景観である。山の斜面に冬の夜間に灯るナイター照明が港の海面に映える光景は、小樽の文化的、自然的な特性を描き出しており、小樽ならではの風趣を感じることができる。



天狗山の行楽にみる歴史的風致の範囲

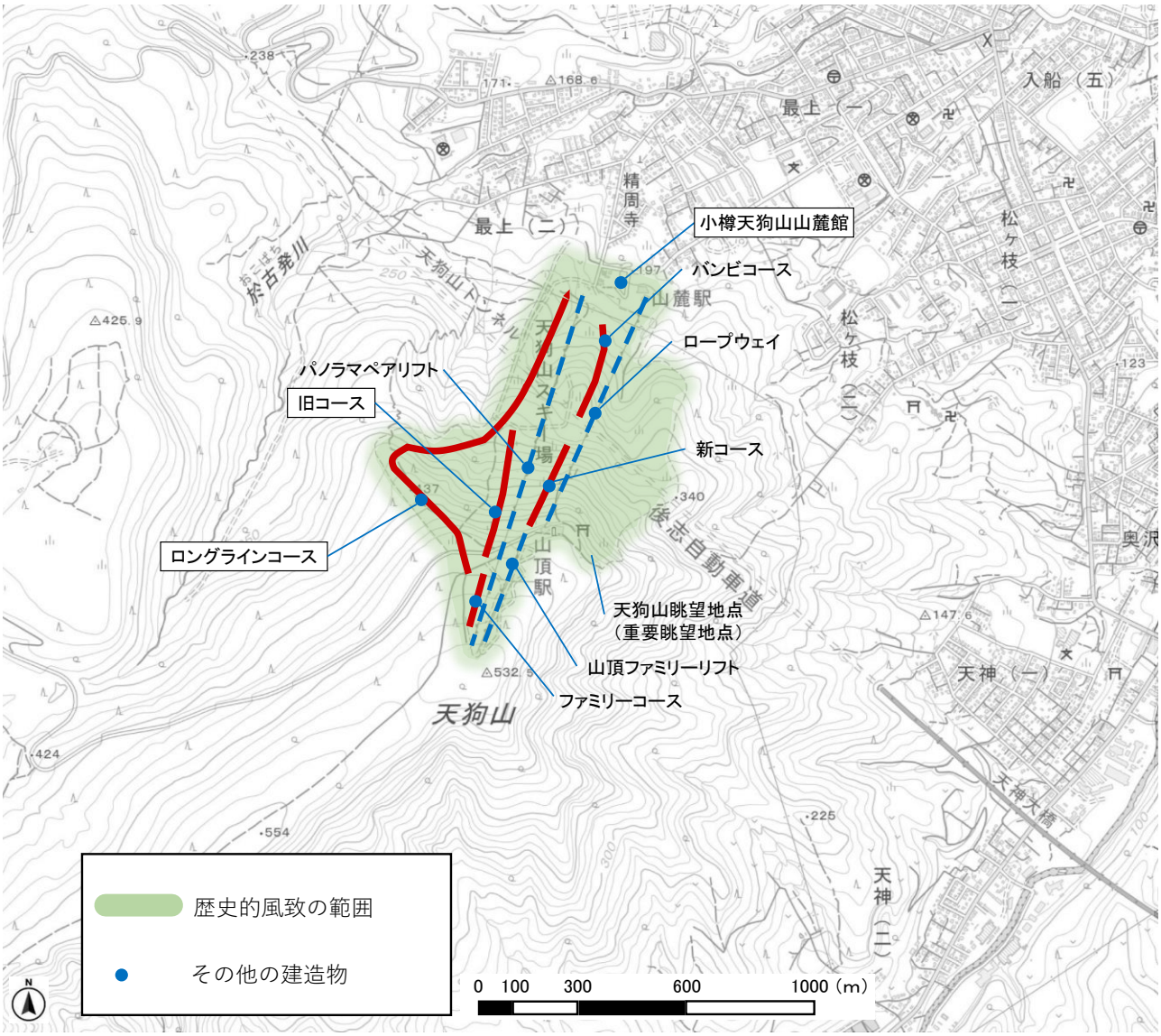
④ まとめ

現在の天狗山は、冬季にスキーやスノーボードが楽しまれているほか、眺望を生かした展望テラスやアクティビティー施設の整備などにより、通年で楽しまれる行楽地・観光地となっている。

かつての商都小樽を一望できる良好な景観は、市が重要眺望地点に指定しており、その夜景は、北海道三大夜景と称されている。

天狗山スキー場（ロープウェイ）

良好な眺望を有する天狗山の環境は今も変わらず市民に愛されており、古くから親しまれてきたスキー場と一体となって、歴史的風致を形成している。



天狗山の行楽にみる歴史的風致

（４）高島岬周辺の行楽にみる歴史的風致

① 概要

高島岬は、市の北西部に位置し、石狩湾に突き出た岬である。この地域は、かつてのニシン漁の中心地であり、多くの船が往来する港町として栄えた。江戸時代には、タカシマ（シクズシ）場所が置かれ、明治時代に入ると青山家に代表されるように自営漁家が大規模な漁場を展開した。その結果、高島岬周辺には、ニシン漁の歴史を物語る貴重な建造物が残り、ニシン漁が盛んだったころに建設された神社仏閣も点在している。これらの建造物やまちなみは地域の歴史と文化を物語る貴重な財産であり、観光資源としても重要な役割を果たしていることから、この地域は魅力的な行楽地となっている。

また、高島岬周辺は、ニセコ積丹小樽海岸国定公園の区域の一部であり、風光明媚な景勝地である。高島岬の突端には、壮大な日本海と青々とした空が織りなす絶景が広がり、特に夕陽や朝焼けの美しさが格別である。こうした景観の美しさは地域の歴史や文化と深く結びついており、観光資源としても大きな価値を持ち、地元の人々や多くの観光客に親しまれている。

昭和 33 年（1958）に開催された北海道大博覧会では、第３号埠頭と高島岬周辺の祝津地区が会場となった。祝津会場では、現在のおたる水族館の前身となる水族館が置かれ、多くの人が訪れた。この博覧会を契機に、高島岬周辺は自然の美しさと歴史的価値を併せ持つ行楽地・観光地として注目されるようになる。

水族館は、翌年市に移管され、営業を続けた。昭和 49 年（1974）には、現在地に新築移転し、その後も施設の拡充や展示の充実が図られ、現在に至る。この水族館は、本市を訪れる人々へ小樽観光の多様な選択肢を提供するとともに、地域の豊かな海洋生態系を展示する場として教育的な役割も果たしている。

高台にある祝津パノラマ展望台からは、高島岬周辺に広がる日本海の景色を一望できる。この地域の行楽は、美しく雄大な自然とニシン漁の歴史が交錯する空間で楽しむことができる点が特徴であり、近年では地元有志による歴史的建造物の修復やニシンに関する祭りが開催されるなど、地域の特徴を生かす取り組みが行われている。

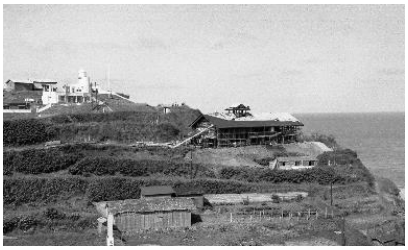
高島岬周辺は、地域の景観や歴史を象徴する場として重要であり、訪れる人々がその価値を再認識し、地域の自然と歴史が一体となった環境を楽しむことができる貴重な行楽地として引き継がれている。

② 建造物等

（ア）日和山灯台

祝津の日和山は、古くから船乗りや漁夫たちが出港前に日和（天候や空模様）を見た場所であった。明治４年（1871）に信香町に設置された常灯台が火事で焼失した後、明治 16 年（1883）に北海道の洋式灯台としては２番目となる日和山灯台が設置された。開設当初は木造の白い外観であったが、昭和 28 年（1953）に鉄筋コンクリート造で改築され、昭和 43 年（1968）に白一色だった外観を吹雪の日でも見やすいように赤と白の横縞のデザインに変更している。現役の灯台であり、雪のない季節には敷地が一般公開され、年に数度、灯台内部も公開されている。昭和 33 年に撮影された写真で白一色だった日和山灯台が確認できる。

日和山灯台



昭和 33 年　日和山灯台と
移築中のにしん漁場建築

（イ）にしん漁場建築（道指定有形文化財）

P. 80 参照

（ウ）おたる水族館本館

昭和 33 年（1958）に開催された北海道大博覧会の「海の会場」のパビリオンとして水族館が建てられ、昭和 40 年（1965）の写真で確認することができる。

昭和 34 年（1959）には小樽市立水族館として営業を開始し、昭和 49 年（1974）に現在地に新館（現在の本館）が建てられ、小樽水族館公社（第三セクター）による経営となった。なお、昭和 49 年７月 14 日付の北海タイムスで新館の開館式の様子が報じられている。また、令和６年（2024）北海道の水族館として初めて、博物館法に規定する登録博物館として登録された。

豊富な種類の水中生物を飼育展示している本館、イルカ・オタリアのショーが楽しめるイルカスタジアム、アザラシ、セイウチ、トド、ペンギンなどが飼育展示されている海獣公園のほか、遊園地「小樽祝津マリンランド」で構成されている。

海獣公園では、自然の海を柵で仕切った豪快なプールでトドやアザラシがのびのびとくつろぐ姿が見られる。海獣公園は、「ニセコ積丹小樽海岸国定公園」

昭和 40 年　小樽市立水族館

現在のおたる水族館本館

高台から見た海獣公園

内にあり、自然の海に非常に近いため、海に生息する魚を狙う野生の海鳥やオオワシ・ハヤブサも訪れ、また波の高い日には野生のトドやアザラシが防波堤を乗り越えて迷い込んでくることもあり、北海道の大自然のたくましさが感じられ、小樽水族館最大の見どころの一つである。

（エ）江差追分節名歌碑

「ニセコ積丹小樽海岸国定公園」内に位置し、海の絶景を一望できる祝津パノラマ展望台に、江差追分節名歌碑が建っている。高さ約７ｍ、幅約２ｍの歌碑は、小樽観光協会と小樽追分節連合会が道内の会員の協力を得て建立したものであり、昭和 28 年（1953）と刻まれている。

江差追分節名歌碑

江差追分は、ソーラン節や北海盆歌とともに、北海道を代表する民謡の一つであり、かつて祝津がニシンの千石場所として栄えたことから、小樽にゆかりのある歌詞「忍路高島およびもないがせめて歌棄磯谷まで」が刻まれている。

（オ）旧茨木家中出張番屋

P. 79 参照

（カ）恵美須神社本殿

P. 79 参照

（キ）旧白鳥家番屋

P. 79 参照

（ク）旧近江家番屋

P. 81 参照

③ 活動

（ア）高島岬周辺の行楽・観光

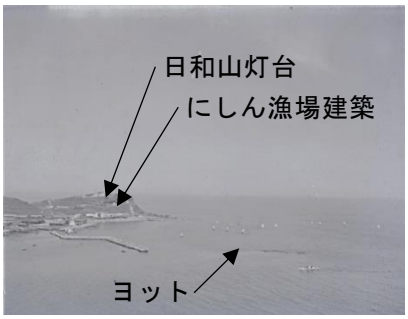
高島岬周辺は、かつてニシン漁の中心地として栄えた本市の歴史と深く結びついた場所であり、その周辺には当時のニシン漁の繁栄を物語る建造物が残されている。また、高島岬は船舶航行の目印としても重要な役割を果たした。高島岬が北風を防ぐため、避難港として祝津、高島さらに小樽港が利用された。

明治 16 年（1883）に建設された日和山灯台は、当時の航海の安全を守るために設置された。この灯台は現役で機能しており、北海道沿岸を航行する船舶の安全を守り、市民にとって重要なランドマークとなっている。灯台の周辺は、美しい景観が楽しめる場所として知られ、四季折々の風景が訪れる人々を魅了している。

トドショーの様子

高島岬周辺では、春から本格的な行楽・観光シーズンを迎える。３月になると、冬季営業を終えたおたる水族館では、春からの通常営業に向けた準備が進められ、冬の間閉鎖されていた海獣公園にアザラシなどの引っ越しが行われる。通常営業が始まり、海獣公園でトドショーが行われると、近隣の祝津パノラマ展望台でも海獣の鳴き声や観客の歓声が聞こえるようになり、冬を越した海獣公園のにぎやかな様子は行楽シーズンの始まりを感じさせる。また、にしん漁場建築では、風雪によるガラスの破損を防ぐため、11 月から３月は窓や出入口がベニヤ板で覆われている。４月の雪解け後、公開に向けて冬囲いが取り外される様子は、春の訪れを感じさせるとともに、これから観光客で賑わう様子を予感させる。また、４月下旬には、祝津パノラマ展望台から「江差追分節名歌碑」を背に海の方を望むと、日和山灯台やにしん漁場建築越しに、昭和 38 年（1963）に撮影された写真のように高島岬周辺の海上を走るヨットの姿が見られ、祝津のかつての賑わいを感じさせる。

鰊御殿冬囲い撤去の様子



海上を走るヨットの様子
（昭和 38 年（1963））

また、高島岬周辺の旧茨木家中出張番屋をはじめとする漁場建築が建つにしん街道沿いの食堂の前では屋外で魚介類の炭火焼が行われ、串刺しの大きなニシンなどが多数並べられ、食事の時間帯には写真撮影を行ったり、足を止めて見入る観光客で人だかりができている。周辺の水族館や遊園地、マリンスポーツに訪れた

店頭でのニシン炭火焼

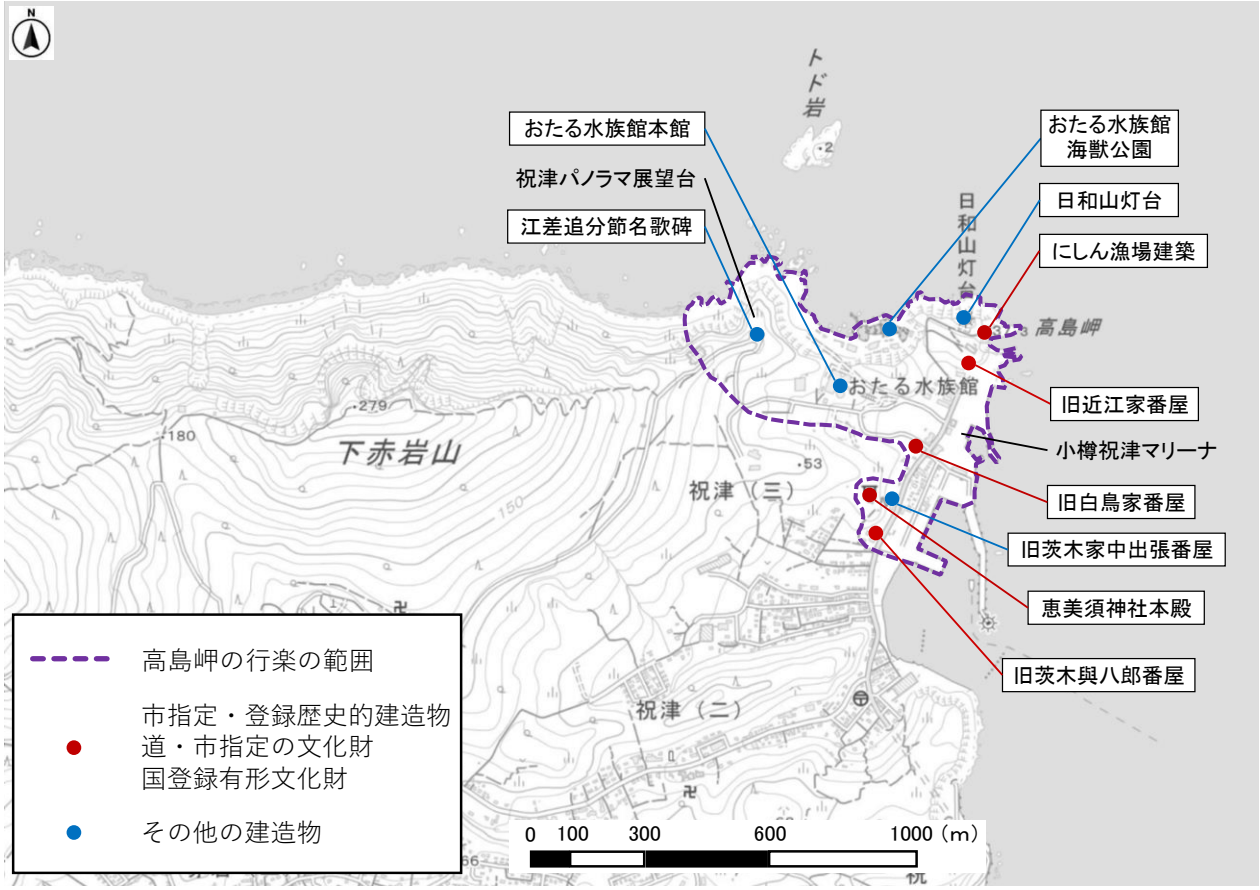
人々は、その光景や香ばしい香りに食欲をそそられるとともに、祝津らしい風景を見ることができる。

さらに、高島岬周辺では地域の歴史を後世に伝えるための活動も盛んに行われており、近年では、祝津地区の歴史と特性を生かし、小樽の特産品であるニシンやホタテをテーマとした祭りが好評である。また、地域住民が中心となり、歴史と漁業・観光のまち祝津の発展を願い、平成17年(2005)に始まった「おたる祝津花火大会」では、小樽市鰊御殿の前浜からおたる水族館の駐車場に至る一帯を会場とし、多くの人が打ち上げ花火を見物する。この花火大会には、大漁祈願や追悼の意味も込められている。

高島岬周辺の豊かな自然環境がもたらす海産資源は、古くから地域住民を支えてきた。一方で「江差追分節名歌碑」が建つ祝津パノラマ展望台から望む雄大な景色は、訪れる人々に大きな感動を与え、さらに漁場建築などによって形成される歴史的環境は、その歴史的価値を保ちながら、観光地としての魅力を発揮し、訪れた人々は過去と現在のつながりを感じることができる。高島岬周辺で行われている活動を通じて、訪れた人々は、地域の歴史に触れ、過去を偲ぶことができる。

おたる祝津にしん・おタテ祭り
（「おタテ」は小樽産ホタテのブランド名）

おたる祝津花火大会



高島岬周辺の行楽・観光の範囲

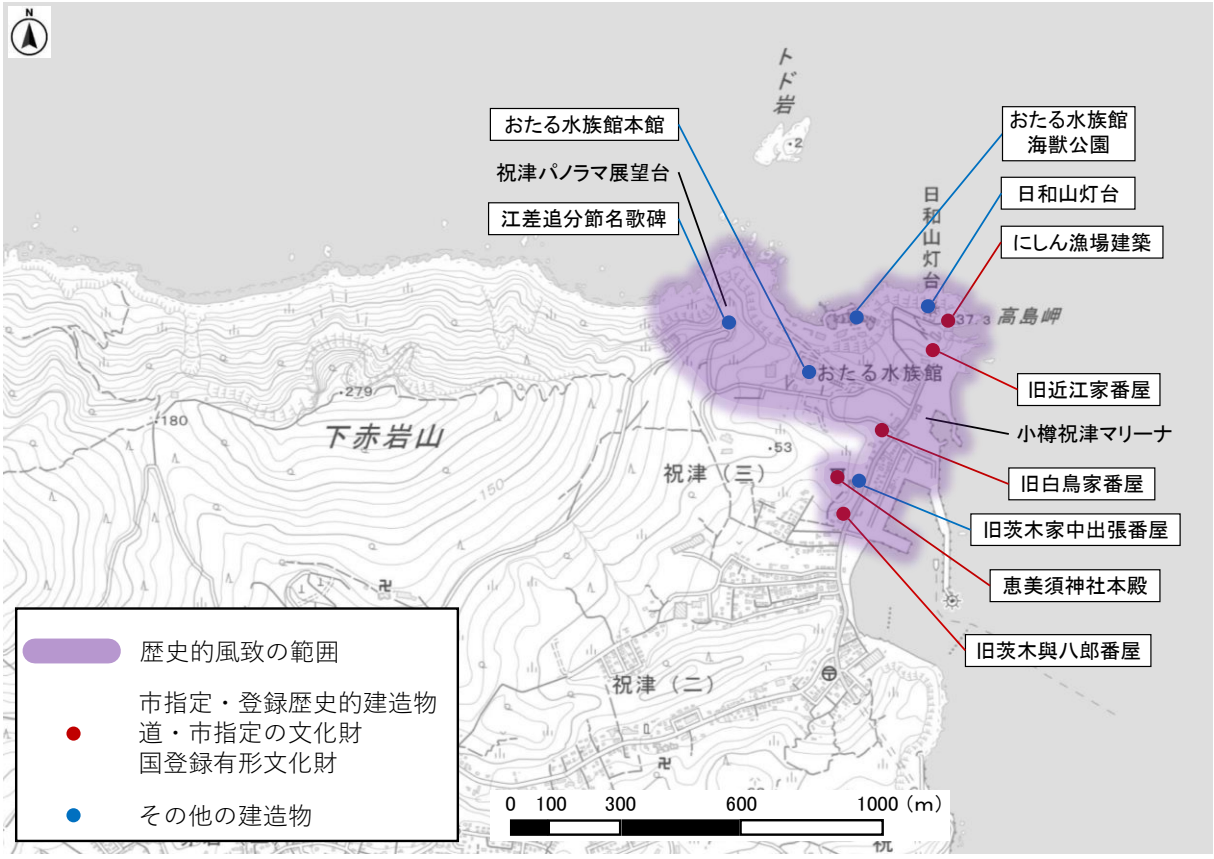
④ まとめ

江戸時代からニシン漁の好漁場として知られた祝津地区は、北海道の漁村集落の様子を伝える貴重な地区であり、海岸沿いの通りに建つ漁場建築や付属の蔵のほか、高台に建つ邸宅や神社が独自の景観を創出している。

日本海と壮大な山々が織りなす美しい絶景を一望できる祝津パノラマ展望台では、にしん漁場建築などの海に関係する特徴的な建造物を望見できるほか、高島岬以西の海岸は、「ニセコ積丹小樽海岸国定公園」に属する景勝地であり、公園内の小樽海岸自然探勝路では、変化に富んだルートにより美しい海岸の風景と四季折々の植物などが楽しまれている。

春からの行楽シーズンに向けて、にしん漁場建築では冬囲いが外され、観光客を迎え入れる準備が行われる。本格的な行楽シーズンになると水族館の海獣公園ではトドショーが披露される賑やかな様子が見られ、海ではヨットが海上を走る姿が見られる。また、にしん街道沿いの店の前ではニシンの炭火焼が行われ、前を通る多くの観光客が足を止める様子が見られる。

良好な眺望を有する高島岬周辺の環境の中で行われる行楽は、昔から変わらず人々に愛されており、その周辺に建つ歴史的建造物と一体となって、歴史的風致を形成している。



高島岬周辺の行楽にみる歴史的風致

おわりに

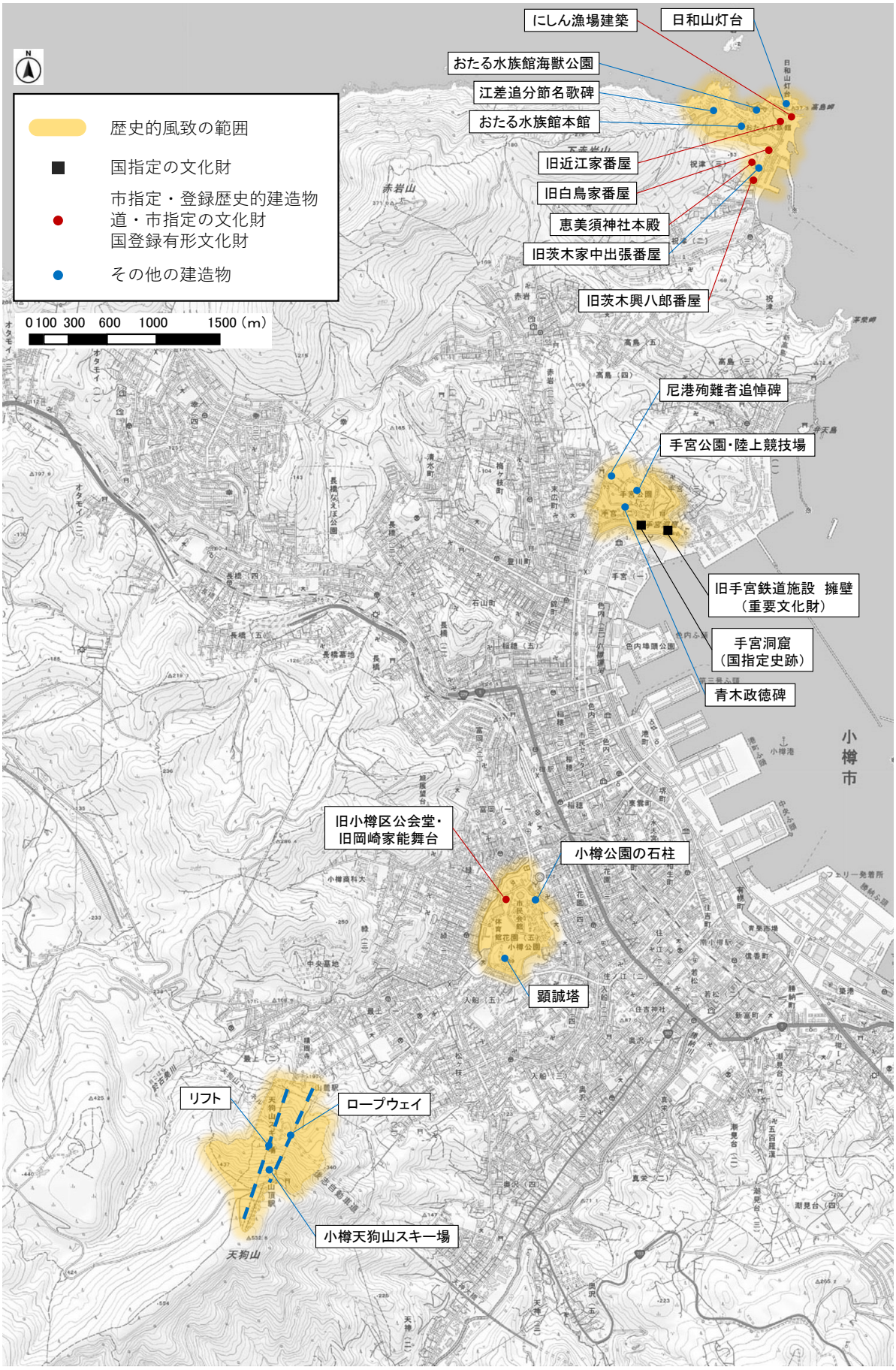
本市には、古くから良好な眺望を楽しむことができる景勝地があり、これらは行楽の場として多くの人々に親しまれてきた。特に高台に位置する景勝地は、優れた眺望とともに自然環境と歴史的環境が織りなす魅力的な景観を有しており、近代的な市街地が形成されはじめたころから多くの人々に親しまれてきた。

これらの景勝地は、豊かな自然と人々の活動が交錯して形成されてきた。明治時代には、小樽公園や手宮公園の整備が進められ、自然環境を生かした行楽地として人気を博した。高台からの優れた眺望と四季折々の美しい風景を楽しむことができるこれらの公園は、花見や憩いの場として利用されるだけでなく、地域の文化活動やスポーツ活動の場としても地域住民に還元されてきた。また、慰霊の場としての役割も担っており、市民にとって大切な場所となっている。

さらに、天狗山は大正時代からスキーの名所として知られ、冬季にはスキーを学ぶ子供たちやその指導者たちの姿が見られ、地域の冬の風物詩となっている。近年では、天狗山の施設が整備され、眺望を生かした観光地としても人気が高まっており、山頂からの眺望や四季の変化、北海道三大夜景といわれる夜景が訪れる人々を楽しませている。

また、高島岬周辺も小樽の魅力を語る上で欠かせない場所であり、海岸付近の漁村集落の風景や特徴的な歴史的建造物によって、ニシン漁による繁栄の歴史を偲ぶことができる。

これらの景勝地の魅力は、豊かな自然と歴史的環境が継承されていることにある。地域住民がこれらの歴史的資源を守り育て、地域の財産として次世代に伝える取組を行ってきたことで、市民をはじめ多くの人々が訪れる景勝地となり、その周辺の歴史的環境と一体となって、歴史的風致を形成している。



景勝地の行楽などにみる歴史的風致の範囲

【コラム】小樽八景

四季折々の変化や朝夕の移り変わりによって、まちなみは表情を変え、私たちはその移りゆく様を通して都市の印象や姿を捉えている。日本では、古くから自然の機微に触れ、その感動を俳句や漢詩にあらわす風習が根付いてきた。特に中国の瀟湘（しょうしょう）八景の影響を受け、近江八景、金沢八景など、８つの景勝地を選定する取組を通じ、生活の中で風土や自然景観は親しまれてきた。

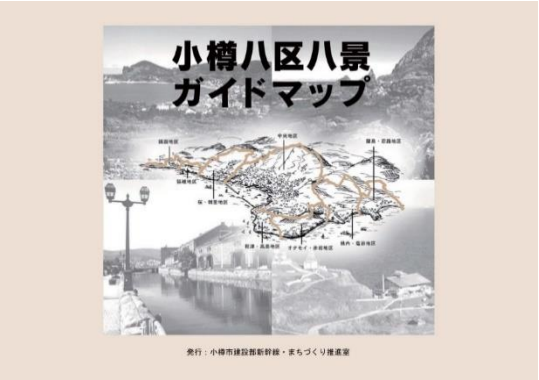
小樽においても、明治９年（1876）に太政大臣の三條実美（さんじょうさねみ）が小樽の風光明媚な景観に打たれて八景選びを行っている。

①祝津（しゅくつ）の夜雨（やう）、②色内（いろない）の青嵐（せいらん）、③住吉（すみよし）の秋月、④竜徳寺（りゅうとくじ）の晩鐘（ばんしょう）、
⑤浜中（はまなか）の夕照（せきしょう）、⑥朝里（あさり）の落雁（らくがん）、⑦石狩（いしかり）の帰帆（きはん）、⑧増毛（ましけ）の暮雪（ぼせつ）

以降、「小樽八景」と題する絵葉書が数種類発行されている。

近年では、魅力あるまちづくりを進めるために、市内を八つの地区に分け、それぞれの地区を代表する景観を八つ選び出し、市内全体で 64 景（八地区×八景）を「小樽八区八景」として選定している。

選定に当たっては、平成８年（1996）３月から２年間にわたる「八景まちづくりラリー」と題した事業を市民参加により実施した。

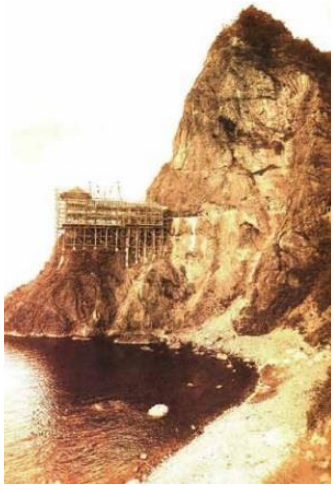


小樽八区八景ガイドマップ

【コラム】オタモイ海岸の景観

オタモイ地区や赤岩（あかいわ）地区の北部は日本海に面しており、積丹ブルーと呼ばれる透明度の高い青緑色の海沿いに、切り立った断崖や奇岩、水平線に沈む夕日を望むことができる景勝地である。水中火山の活動をあらわす海食崖は世界的にも貴重なものとされ、「ニセコ積丹（しゃこたん）小樽海岸国定公園」の一部に指定されている。

昭和初期、市内で料亭を営んでいた加藤秋太郎（1869～1954）は、風光明媚なオタモイ海岸に着目し、ここに一大リゾート施設「オタモイ遊園地」を建設した。



建築中の龍宮閣

この遊園地は、海水浴や舟遊びを中心とした郊外型の施設で、広大な敷地の中に、演芸場、児童公園、大衆食堂、高級料亭なども設置された。特に話題となったのは、高級料亭「龍宮閣」で、海岸に突き出した細い岬の上から、さらに空中にせり出すように建つ建物は多くの人を驚かせ、市内外でも話題を呼んだ。なお、龍宮閣の構造は京都の清水寺と同じ「懸（かけ）造り」であった。

在りし日の龍宮閣

遊園地は多いときで 1 日数千人が訪れる人気施設となり、小樽の観光業のさきがけとなるものであったが、昭和 27 年（1952）に火災で龍宮閣が全焼すると、中核施設を失った遊園地は徐々に閉園状態となった。

オタモイ遊園地の経営終了後、龍宮閣跡地には散策路が整備されていたが、平成 18 年に散策路上で大規模な崩落が発生したことを受け、以降跡地への立入は禁止されている。現在は、遠方から、またクルーズ船などに乗って海上から龍宮閣跡地を望むことができる。オタモイ海岸周辺の絶景は、今も来訪者に感動を与え、観光都市小樽が誇る景観の一つであることに変わりはない。

遠方から望む龍宮閣跡地

海から望む龍宮閣跡地